



昭和二十九年十月

角川文庫

解説目録



かどかわ



角川文庫發刊に際して

角
川
源
義

一九四九年五月三日

目次

日本古典

現代日本文學

小説・戯曲

隨筆・評論

詩・歌・俳句

外國文學

フランス

ドイツ

ロシア

イギリス

アメリカ

その他

宗教・哲學

社會・歴史・自然

藝術

補遺

索引

角川文庫解説目録について

昭和二四年五月に發刊致しました「角川文庫」は、今日までにすでに九〇〇餘點を數へるにいたりましたので、讀者の御便宜を圖りこの總目録を作りました。分類は必ずしも嚴密な學問的方法に據らないで、あくまで讀者の便を旨として作成致しました。各項目の配列はおおよそ年代順に従ひましたが、今後も新刊點數の増加するに従ひ隨時増補改訂を加へてゆきたいと思つて居ります。この目録が本文庫の内容と性格を正しく傳へ、皆さんの讀書に充分利用されますならこの上ない喜びであります。

今後ともに「角川文庫」の成長と發展のために皆さんの樂りませぬ御協力と御支援をお願いする次第であります。

凡例

* 書名下の番號は帯の整理番號です。

御註文の際に御利用下さい。

* 花印(+)は臨時定價を示す。

+一つが四〇圓です。

* 花印による臨時定價及び送料は次の通りです。

+ 四〇圓 八圓

+ 七〇圓 一六圓

+ 一〇〇圓 一六圓

+ 一三〇圓 二四圓

また花印五は送料二四圓、六は三

二圓、七―八は四〇圓。

* 直接御註文はすべて前金でお願いいたします。一度に二冊以上御註

文の節は代金に必ずその合計した

花數に該當する送料を添へてお送

り下さい。御送金には「振替口座

東京一九五二〇八番」の御利用が

安全で簡便です。

日本古典

武田祐吉譯註

古事記

紫1

「日本書紀」とともにわが國最古の古典である。「古事記」は、上代國語の寶庫である。そこには無數の神話・傳説を通して古代國民の習俗や信仰・儀禮が、豊かな歌謡や俚言につつまれて記録されてゐる。遠い先祖たちの夢が混沌未分のままで素材を調和に輝いてゐる。それらの夢は強い絲で現代に結びつけられてゐるのである。

武田祐吉校註

萬葉集

全二冊
上々々々々

紫2-3

民族文化の源泉であり上代人の素朴な豊てある「萬葉集」は、ひとり日本の詩心の原型であるばかりでなく、古代における風俗・習慣・思想を知るための貴重な資料である。日本文化の危機はいくたびか萬葉に遡へることによつて切り抜けられてきたといつても過言ではないが、本文庫は斯學の權威武田博士の心苦になる定本を提供する。

中河與一譯註

伊勢物語

附現代語譯
々々

紫9

王朝時代の物語文學の先驅をなす「伊勢物語」が後世の日本文學に與へた影響はききめて大きい。有名な在原業平を主人公として展開される数々の哀愁と微笑の世界の美しさは、永遠の新しさをもつて讀者の心を打たずにはおかない。中河氏の麗華になる現代語譯を附して理解と鑑賞に資したことは本文庫の何よりの特色である。

佐藤謙三校註

今昔物語集

本朝世俗部全二冊
上々々々々

紫12-13

芥川龍之介の「羅生門」をはじめ、多くの現代作家たちがその歴史小説の素材をもつてゐる本書は、印度・支那、日本の説話の一大結集であり、「日本書紀」を先驅とする我國説話文學の代表的古典である。古代中世における文學研究、傳説研究に缺くことのできない資料として「今昔物語」の占める位置と價值には特異なものがある。

梅原眞隆譯註

歎異抄

附現代語譯
々

紫20

親鸞上人の口傳といはれる本書は眞宗祕藏の聖教であるが、そこには人間觀察の深刻な苦惱の證驗と深い信仰告白が赤々と語られてゐる。古來この書に觸れることによつて救ひを得た人は無數といつてよいが、その内包する人生哲理は現代人の心をも強く捕へずにはおかない。梅原眞隆師の譯註また深切を盡して一段と光を添へてゐる。

今泉忠義譯註

徒 然 草

附現代語譯

紫5

順原退藏譯註

好色一代男

附現代語譯

紫7

吉井 勇譯註

好色一代女

附現代語譯

紫6

順原退藏譯註

好色五人女

附現代語譯

紫8

順原退藏譯註
能勢朝次

奥の細道

附現代語譯

紫4

順原退藏

俳句評釋

全一册

各々々々

紫16-17

「徒然草」は國文學書の中で最も一般人に親しまれてゐる。それは「徒然草」の中に、近代に通ずる多面的な哲學・思想や文學が在るからであらう。現代は更に「徒然草」を通して兼好の人間像に目が向けられる時代である。それはこの一種シニカルな中世の隨想録が常に傳統を生かして行くだけの個性の力を持つてゐるからである。

馬琴、門左衛門と共に江戸時代の三大作家である西鶴の代表作。世之介なる一代の好色兒の一生を遙る形式によつて、當時のあらゆる階級の女の生戀を鋭く描いて、それまでの物語の舊套を破つたもので、その生々しい現實描寫は近世小説に新しい分野を開いた。浮世草子の濫觴とも云ふべく、わが小説史中に劃期的地位を占める。

「好色一代男」で男の眼を通して女の世界を描破した西鶴は、ここては一女性の長い淪落の生涯を通して、女性の好色の生活の種々相を描き出した。ここに述べられた女の一生は「一代男」よりはるかに暗色であり、それだけに悲劇的である。止むなく賣色生活に落ちて行く女を通して、西鶴は古今變らぬ人生の眞實を示してゐる。

有名な「お夏清十郎」にはじまり、それぞれ特異な五人の女の戀とその悲惨な結末を描いた本篇は、西鶴の作品の中では「一代男」「一代女」とは趣の變つた内容を持つた代表作。これまでの断片的な小話を集める手法を排して五人の女の運命を正面から追究して、短篇小説として完成されてゐる點、とくに注目すべき作品である。

俳文紀行の典型としての「奥の細道」の價值は今更云ふまでもない。その句と文との渾然たる調和は殆んど完成された高さに達してゐる。古來「奥の細道」の譯註は多いが、本書に收めた順原博士の遺業は、その精密で理解の深いことは類書を抜いてをり、流麗な現代語譯を附加することによつて、この古典をより親しいものにした。

談林以後の無數の句の中から各俳人の代表作をピックアップして丁寧な評釋を加へたものであるが、俳句研究の第一人者であつた順原博士が蘊蓄を傾けたものだけに、その視野は廣くその感覺は鋭い。單なる評釋書にとどまらず各期の代表作家の評傳を兼ね、あはせて作品を通して見た俳諧史の性格をもつたのが本書の特色である。

現代日本文學

〔小説・戯曲〕

樋口一葉
岡田八千代校註

にぎりえ・十三夜 他一篇

緑235

整理と人情に縛られた女性お力の運命を、心にくいまでにリアルな筆致で描き出した「にぎりえ」(明治二八年)は一葉の作風に獨創的な境地を開いたが、この集にはさらに一葉の作品中最も抒情に富む「十三夜」(明治二八年)および虚けられた女中の生活を描く「大つごもり」(明治二七年)を併せ収め、かつ木村莊八氏の挿繪を附した。

幸田露伴

雪 た た き 他一篇

緑13

正宗白鳥をして「文學の力を感ぜた」と絶讃せしめた「雪たたき」(昭和一四年)は露伴翁晩年の傑作の一つである。題材を近世の初期、封建時代の自由都市であつた堺の町にとり、歴史、モチーフ、風俗の三位を一體とする論獨白の歴史小説への抱負と信念とを實踐したユニークな作品である。他に「魔法修行者」「骨董」を併せ収めた。

幸田露伴

愛

緑217

愛の思想は露伴の思想の大きな一つである。それは露伴の人間世界にたいする愛であり悲願であつた。多数者の幸福や平和と對立し、社會の秩序を破壊する思想や行動を露伴はするどく批判する。この集には愛に關して書かれた「愛」「因其心戀慕乃出爲說法」「春の夜語り」「プラクリチ」「蛇と女」「半のはなし」の六篇を収めた。

尾崎紅葉

金色夜叉 全二册

上々々々 下々々

緑280—281

「人生には二つの大きな力があつて社會の結合を保つてゐる。それは愛と金だ」と紅葉は云つたが、この小説が明治大正昭和の三代を通じてかくまでも愛讀され續けて來たのは、愛と黄金といふ人間生活の永遠不變のテーマのゆゑである。金色夜叉とは金色の夜叉即ち高利貸のことと主人公貫一を象徵せしめたものである。(明治三〇年作)

泉鏡花系圖

全三册
各々々

線365—366

舞姫・うたがたの記

他二篇
々々

線272

青年・あそび

々々

線56

雁・キタセクスアリス

々々

線220

阿部一族

他三篇
々々

線277

山椒大夫・高瀬舟

他三篇
々々

線253

つねに幻想の世界に美をたづねた鏡花の文學のなで、「繭糸圖」(明治四〇年)は、彼が全生涯でただ一つ己れのなま身の問題をあらはに託した自傳的作品である。彼自身の結婚のいきさつに絡まる出来ごとをめぐって、被虐性のひねくれものだった鏡花の人間心理の裏道と、複雑に入り込みかたがそこにあらはされてゐる。

鷗外の初期の好短篇「舞姫」(明治三三年)「うたがたの記」(同)「文づかひ」(二四年)はいづれも鷗外自身の藩獨中(明治一七年八月—二一年九月)の體驗見聞に材を仰いだもので、とりわけ「舞姫」はその優雅な文體とエキゾチックな内容をもつて作家鷗外の名を一躍にして高からしめたもの。名篇「ふた夜」を併せ收む。

「青年」は明治四三年三月から同四年八月まで雜誌「スバル」に連載された作品であるが、すでに圓熟期に入らうとする鷗外が小泉純一といふ一青年をかりて自己の文學者としての抱負や心境を語つたものである。「あそび」(明治四三年)には人間そのものに對する深い絶望の後に鷗外が體得した諦念の人生觀がにじみ出てゐる。

「雁」(明治四四年—大正二年)は「青年」に續けて書かれた鷗外の第二の長篇小説であり、明治のはじめいまだ明けやらぬ封建的世相の波にもまれながら自我に目ざめゆく一女性の影像を浮き彫りにした名品である。「キタセクスアリス」(明治四二年)は題名の示すごとく哲學者金井博士の偽はらざる性慾生活の告白である。

「阿部一族」(大正二年)は肥後藩主細川忠利の死に際して、殉死を許されなかつた阿部彌一右衛門一族の運命を扱つた歴史小説で、封建時代の武士のモラル、殉死をゆるす主君の心理等を精細に表現した近代日本文學史における歴史小説の最高水準を示す力作。他に「興津彌五右衛門の遺書」「佐橋甚五郎」「最後の一句」を收む。

「山椒大夫」(大正四年)は己を空しうして運命の命するがままに生きて行く人間の姿を描いた佳品であり、「高瀬舟」(大正五年)は流人の話に題材をとつて罪の行爲や富に對する觀念等を描いてゐる。他に「魚玄機」「どいさんばあさん」「泰山拾得」等鷗外の人間像の結集ともいふべき晩年の歴史小説の珠玉を收めた。

夏目漱石

吾輩は猫である

全二册

各々々

線130—131

夏目漱石

坊っちゃん

々々

線54

夏目漱石

草枕、二百十日

々々

線363

夏目漱石

文鳥・夢十夜・永日小品

線55

夏目漱石

虞美人草

々々々々

線90

夏目漱石

坑夫

々々

線251

近代日本文学史を通じて、最も豊富で奔放な滑稽文學であり、ユーモアとウィットと諷刺の寶庫である「猫」は、漱石の處女作であると同時に、一躍にして文豪の名を高からしめた代表作である。若沙彌先生に飼はれる一匹の猫に託して展開される痛烈な社會批判は、今日では讀者をして爽快な共感を喚起してやまない。(明治三八年作)

江戸つ兒を以て任ずる若い教師の坊っちゃん、その一本氣の純粹な性格から、偽善にみちた社會に愛想をつかすこの作品を一貫するものは、人間漱石が持つて生れた反俗精神と烈しい正義感にほかならない。浪漫的な雅氣とユーモアの源ふなかに、その奮切れのよい表現は讀者に清爽な感じを與へる。明治三九年「ホトトギス」に發表。

「草枕」(明治三九年)は漱石のいはゆる非人情の美學が脱かれてゐるロマンチイズムの極致である。非人情とは東洋古來の漢詩や俳句を流れてゐる根本的な態度であり一切の人間の事象をも自然に對すると同じ無私の眼で見ることである。「二百十日」(明治三九年)は漱石文學には珍らしい社會批評の方向を示す中篇小説である。

エゴイズムに苦しむ近代的人間の運命を追求してやまなかつた漱石にも、このやうな滋味ゆたかな一面があつたのかと思はせられるロマンチイズムの香り高い珠玉の名品。それはメルヘンともいふべく、美しい夢幻の世界に讀者をいざなはずにはおかない。漱石文學の愛好家に忘れられてならない貴重な一本である。

漱石文學における悲劇の誕生ともいふべき劇作的作品である。「生か死か」といふ第一義の道にこそ人間の眞の生き方があり、それを忘れ利己と虚榮に走る人生は常に破滅を免がれないとの漱石独自の悲劇のセオリーはそれ以後のすべての作品の根本命題の提出ともいふべきであり、漱石文學の方向を決定せるものである。(明治四〇年作)

「人間の性格は一時間毎に變る」と漱石はいふが、未知の青年の家出をして坑夫になるまでの告白を材料として書かれたこの作品で、漱石が意圖したもののは、「虞美人草」における外形の派手さではなく、人間の言行の下に潜む意識の時間のなかにぐり、そこに秘められてゐるものを捉へ、それを分析することであつた。(明治四一年作)

夏目漱石
三 四

✧ 郎 緑83

夏目漱石
そ れ か ら

✧ ✧ 緑117

夏目漱石
門

✧ ✧ 緑104

夏目漱石
思ひ出す事など

✧ 緑339

夏目漱石
彼岸過迄

✧ ✧ 緑91

夏目漱石
行人

✧ ✧ ✧ 緑289

「それから」「門」と続く三部作のいはば序曲ともいふべき作品で、いはゆる「無意識の偽善」といふ問題をめぐる、愛せんとして愛を得ず、愛されんとして愛を得ない複雑な愛の心理を描く。更に主人公三四郎を中心に展開される當時の東京大学の學生生活の描寫は、風俗史的にも貴重な資料を提供するものといへよう。(明治四一年作)

「三四郎」に描かれた淡い戀愛は、「それから」にいたつて深淵な人間の苦惱に彩られる。自然の情景ゆゑに社會の掟に背いて友人の墓に戀慕を寄せる主人公代助の苦悶は明治四〇年代の知識人の肖像でもあるが、三角關係の悲劇を通して漱石が追求したものは、分業と破綻を約束された愛の運命といふテーマであつた。(明治四二年作)

ひとりの人間の犠牲において成立した宗助とお米の愛の勝利は、やがて罪の苦しみに襲はれる。「人間の心の奥底には結核性の恐ろしいものがひそんでゐる」と漱石はいふのだ。つひに主人公宗助は禪寺の山門をたたくが、安心と悟りはたやすくは得られない。そこに眞の意味の求道者としての人間漱石の面目があつた。(明治四三年作)

明治四三年胃潰瘍のため修善寺温泉に轉地中多量の吐血をして生死の間を彷徨した漱石が、病中に心配してくれた人たちへの感謝の思ひをこめて書き記したものがこの體験記であつた。まことに修善寺の大患における死の體驗を轉機として漱石の生活および藝術は一大轉回を遂げるのであるが、ここにその消息が詳しく語られてゐる。

「行人」「こゝろ」とつづくいはゆる後期の三部作の序曲をなす作品である。このあたりから漱石の作品は完全に漱石自身の問題に密着してくる。人間ゆゑのエゴイズムの悲劇は、自意識をもてあます須永と千代子の交りの喪失の奥に、やがて「行人」「こゝろ」と展開される血みどろの闘ひをはつきりと暗示してゐるのだ。(大正元年作)

自我にとちこもる一郎の懷疑と孤獨は、近代的人間の運命そのものの姿である。「行人」の悲劇は單なる一夫婦の悲劇ではない。人間そのものの心の深淵にその宿命的な根をもとめなければならぬ性質の悲劇である。「死ぬか、氣が違ふか、宗教に入るか」といふ主人公の苦悶は、ただちに漱石自身の苦しみでもあつた。(大正元年作)

夏目漱石
こゝろ
緑76

夏目漱石
硝子戸の中
緑285

夏目漱石
道草
緑250

夏目漱石
明暗
全三冊
緑337—338

永井荷風
腕くらべ・夏すがた
緑81

永井荷風
つゆのあとさき
他二篇
緑89

「こゝろ」は後期の三部作の終曲であるばかりでなく、漱石文學の絶頂をなす作品である。自我の奥深くに暴喰つてゐるエゴイズムはこゝでぎりぎりの所まで押し詰められる。誠實ゆゑに自己否定の試みを自殺にまで追ひつめなければならなかつた漱石はやがてそこから「則天去私」といふ人生觀にたどりつくのである（大正三年作）

終日硝子戸の中に坐して靜かに人生を默思するこの隨想錄が、つねに多くの讀者から愛誦されてやまないのは、度々の重疊を経た漱石が心に深く死といふ人生の一大事について思ひを切にするところからこれらの文章を綴つたからであらう。こゝには確かに死を豫覺しつつ過ぎ來し生涯を回顧する漱石の痛ましい憂がある（大正四年作）

漱石の文學には珍らしい自傳的色彩の濃い作品である。健三、お性の夫婦生活を中心に展開されるエゴイズムの矛盾、そして因習的な「家」の秩序の壓迫のなかに自我に目ざめなければならなかつた近代日本の知識人の課題を自らの問題として對決した漱石の人間的苦惱は、今日といへども新しい課題をわれわれに提起する（大正四年作）

漱石自身の死とともに未完成に終つたこの作品は、文字どほり漱石文學の總決算であつた。自然主義に近い客觀的態度で人間の醜態をあますところなく描破しながら、しかも漱石が背後に意圖したもののは、いはゆる「則天去私」といふ眞實の生き方であつた。終りの方に現れる清子といふ女性の形象がそれを暗示してゐる（大正五年作）

深くフランスの世紀末文藝に共感すると共に江戸の趣味傳統を愛した荷風の中に、獨特の美しさで結實したのが彼の花柳小説であつた。「腕くらべ」（大正五年）「夏すがた」（大正四年）はともにその代表作であるが、そこに漂つてゐる深い虛無感に支へられた近代的哀愁こそ荷風以前の花柳文學に無かつた要素なのである。

「此の作者ほど終始一貫して艶情小説に筆を染めてゐる人も少い」とは谷崎潤一郎の評言であるが、齡知命を過ぎて愈々文章に枯淡の味を帯びて來た荷風が、銀座のカフェーの女給の生活に題材をとり経綫なる男女痴情の世界を描破して盡さない「つゆのあとさき」（昭和六年）の他「夜の車」「かしらぬ女」の二篇を併せ收めた。

永井 荷風

ひかげの花・あぢさゐ

他二篇

線111

永井 荷風

遷 東 綺 譚

線80

永井 荷風

浮沈・おもかげ・勳章

他二篇

線139

永井 荷風

問はずがたり・來訪者

他一篇

線222

岩野 泡鳴

耽 溺

線162

石川 啄木

雲は天才である

他一篇

線234

妻の職業によつて無爲徒食する重吉、夫を慕切ることを何とも思はないお子代、この倒錯した男女の心情は、「己れといふものを出来るだけ卑しく」した果てに荷風が創り出した自らの影であり分身にはかならない。冷静な作者の眼は昭和初年の様々の社會相を描へて描き出す。併せ収めた「あぢさゐ」(櫻物語)は珠玉の名篇である。

「小説をつくる時、わたくしの最も興を催すのは、作中人物の生活及び事件が開展する場所の選擇と、その描寫とである」といふ詩人荷風の孤獨なる彷徨の足跡が、江東の陋巷をさぐり失はれゆく美への郷愁から靜かに風俗の變遷、世の推移を觀じた「遷東綺譚」(昭和十一年)は荷風晩年の傑作たるのみでなく貴重な風俗史の資料でもある。「浮沈」(昭和十七年)は太平洋戦争直前の重苦しい不吉な一時期に生きるさだ子と、彼女をとりまく市井の事件を巧みに織り交ぜた作品で、「つゆのあとさき」につづく風俗小説である。「おもかげ」は辻タクシーの運轉手の話。「勳章」は日露戦争の無名の勇士の死とその勳章を描いた好短篇。他に「女中のはなし」「萬節情話」を収む。

ここに収めた「問はずがたり」「來訪者」「踊子」の三篇はすべて昭和十八年末から昭和十九年末にいたる戦争の渦中に作られたものであるが、これらの作品を通じて我々の眼前に示されるものは、人生の現實の一断面であり、人間性の奥深くにひそむ眞實のすがたである。作者は虚偽と虚飾を去つた人間の本来を繪寫してゐる。

泡鳴の文壇的處女作であり、彼のひとつもポピュラーな作品である「耽溺」(明治四二年)は、脚本を書くため國府津の海岸に來て藝者にはれこんだ主人公が、仕事をすててその田舎藝者との愛慾にひたつてゆくといふ筋の小説で、愛慾の情みを肯定し、眞正面からそれに迫つてゆかうとする點、泡鳴の後の作品の出發を示してゐる。

啄木の小説が何よりも我々の心を打つのは貧しい人々に對する限り無い愛情のゆゑである。後年、啄木が社會思想を抱くにいたつたのは、生活苦を通じて觸れた社會的不平への洞察からであるが、同時に生活苦のなかに生れて來た貧しい人々への愛からであつた。初期の作であるこの小説にすてにそれがはつきりあらはれてゐる。

鈴木三重吉

千

鳥

他十篇
◆◆

線318

鈴木三重吉

桑

の

實
◆◆

線287

鈴木三重吉

古

事

記

物語
◆◆

線336

中 勸助

菩

提

樹

の 蔭
◆◆

線132

谷崎潤一郎

お

國

と

五平・恐怖時代
他一篇
◆◆

線143

谷崎潤一郎

痴

人

の

愛
◆◆

線98

「千鳥」(明治三十九年)は三重吉の處女作であるが、漱石の紹介で「ホトトギス」に掲載されるや、一躍にして三重吉の名を有名にさせた名品である。ここに収めた十一篇の作品の根柢をなすものは、人間三重吉の深き哀愁であり、その哀愁に支へられたロマンティシズムの精神である。哀愁こそ三重吉の世界の美の本質であつた。

「私の「桑の實」の中のおくみなどは架空にこしらへた女だけれども、ああいふ女を自分の女房にしたいと思つてゐた」とは作者三重吉自身の言葉である。三重吉はおくみのやうな女性を、淋しいもの、悲しいもの、哀れなもの、いぢらしいものとして、いたはりいつくしますにはゐられなかつたのである。大正二年の「國民新聞」に連載。

現代の生んだ最高の童話作家である著者が、民族文化の遺囑としての古事記を、眞に兒童の讀み物になるやうに工夫して書かれたこの名作が、三重吉の遺した数多い作品の中でもユニークな一つとして今日にいたるまで愛讀されるのは、その美しい文章の底を流れる三重吉の限り無い日本への愛と童心に近い夢のゆゑであらう。

征服者であり勝利者たらんと望んで生きた提婆達多の生涯は、高慢と嫉妬との自我に悩まされた一生であつた。我々人間のなかに提婆達多が住んでゐることを深刻に反省する著者は、はげしく提婆達多を憎悪すると同時に、また深く愛惜してやまないのである。そして、「菩提樹の蔭」には我のいふ愛が美しく描かれるのだ。

おほむね平安朝物、徳川時代物、現代物の三つに大別することができる作者の戯曲のうち、ここに収めた「お國と五平」、「恐怖時代」、「象」、「十五夜物語」の四篇は、徳川時代物に該当するものの初期に属する作品である。なかでも「お國と五平」は大正一年七月帝國劇場で作者自身の舞臺監督で上演されたゆかりの深いもの。

處女作「刺青」から谷崎文學に流れてゐた惡魔主義的傾向が、「惡魔」「續惡魔」などのリアリスチックな要素を加へながら「富美子の足」にいたり、つひに一つの頂上をきかめたのが、この「痴人の愛」(大正一三年)である。震災前の東京の尖端風俗を敏感に捉へてゐて、作者がすぐれた風俗作家であることを證明してゐる。

谷崎潤一郎 蓼喰ふ蟲 ※ 蟲 線145	谷崎潤一郎 亂菊物語 ※ 語 線66	谷崎潤一郎 蘆刈・吉野葛 ※ 葛 線325	谷崎潤一郎 春琴抄 ※ 附春琴抄後語 線296	谷崎潤一郎 少將滋幹の母 ※ 他一篇 線221	武者小路實篤 その妹 ※ 妹 線166
日常生活の上に、肉體的享樂の上に理想を追求してやまなかつた谷崎文學はこの「蓼喰ふ蟲」(昭和三年)にいたつて落着いた圓熟味を獲得して來た。もはや、夫には妻が「女」でなく、妻には夫が「男」でないとといふ特異な夫婦關係を描きながら、作者自身の文化觀が豊かにちりばめられその文化批評の結晶をなしてゐる。	この「亂菊物語」(昭和五年)は作者の作品中でもロマン性の最も強烈な特異な存在である。戰國の混亂期の世相を背景にして、大名、没落貴族、海賊、遊女等が登場するが、作者が重點を置いてゐるのは、泉州堺の自由都市の勃興の根柢をなす近代的なブルジョア意識、市民意識への作者自身のある種の共感であつた。	「蘆刈」(昭和七年)は作者が水無瀬の宮の舊蹟を訪づれたとき、蘆の繁みからあらはれた男の話をうつるといふ形式で展開される異常な繪巻物のうちに、王朝的雰囲気と大阪商人の豪華な生活ぶりとを絡ませた作品で、作者獨特の夢幻の世界が創り出されてゐる。「吉野葛」(昭和六年)は谷崎文學の美感の結晶ともいふべき傑作である。	琴三越て身を立てる盲目の美女春琴は弟子の一人である放蕩息子から戀の恨みをつて熱湯を浴びせられる。春琴の家に奉公して歎身的に仕へる佐助は奇禍にあつた春琴の顔を見まいとして自ら眼に針を突き刺して盲人になるといふ筋のこの物語り小説において、作者獨特の女性禮讃とその流麗な筆致のうちに最高項に達してゐる。	正宗白鳥はこの小説を谷崎氏の最高傑作と讃美してゐるが、この作者の初期の作品から一貫してゐる女性禮讃、女性禮讃が古典的な嬌をもつて淨化され、殆んど宗教の極致にも似て技神に入ると云つた感じを與へるまでに完成の域に達してゐる。現代人の共感しうな心理を具へながら作中人物は渾然として古典の世界に收まつてゐる。	武者小路實篤の初期の代表作で、美と創造に對する強烈な憧れが妹の歎身的な肉體愛の形で現され、氏一流のフェミニズムが高い香りを放つてゐる。この作を書きながら作者は幾度か泣いたといふことを自ら述懐してゐるが、天才藝術家の情熱と情みとをともに主題にしたこの戯曲の底流がやがて「愛慾」に圓熟してゆくのである。

武者小路實篤

幸 福

者 他一篇

線101

「自分がこれを書いたのは、年來の望み、自分の理想とする人間のある種の生きた型を表現することによつて、讀者の心に、希望と、平和と、又慰安を送りたく思つたからだ」と作者はいふ。幸福者と境遇によつて支配されず心置によつて支配される人間であり、他人てではなく神によつて支配される人間のことである。(大正八年作)

武者小路實篤

友 情

情

線96

大正八年十一月大阪毎日新聞に連載されたこの作品は、近代日本文學の「青春の書」の一つとして讀はれ、既に古典として毎年のごとく版を重ねてゐる。人間にとつて結婚は大事なことであるが、もつと大事なことは戀愛による淨化の力であるといふ愛のモラルは、人の世の青春のあるところ、いつまでも生きつづけるであらう。

武者小路實篤

愛慾・人間萬歲

他一篇

線57

醜いせむしに生れつゝいた天才畫家が、美しい妻を愛してゐながら、これに對して全面的に専有してゐるといふ感情を満足させることが出來ず、どうにもならない獨り相撲の嫉妬のやうなもので自分も妻も苛めさいなむといふのが「愛慾」であり、「人間萬歲」は人間の醜さと美しさ、愚劣と偉大の野放圖な禮讃を主題とする代表的戯曲である。

武者小路實篤

人 生 雜 感

線168

人類の意志を信じ人間性への信頼と肯定が作者の唱へる「人類愛」であり、「ヒューマニズム」である。そのやうな根柢に立つて「人生を斯く考へる」と感想風に書き綴られたこの書物は、數多い人生論隨想のなかで、もつともユニークなものといへよう。「今迄僕のかいた感想の内一番まとまつてゐる」とは作者自身の言葉である。

武者小路實篤

或 る 男 全 冊

上々々々 下々々

線314—315

武者小路實篤の作中唯一といつていい自傳小説である。誕生から筆を起して大正七年に「新しき村」を創める頃までのほぼ三十三年間の自傳であり、「白樺」の最も華々しい活躍の時代の舞臺が活き活きと描かれてゐるこの作は、ひとり作者の自傳たるにとどまらず語られた文學史として貴重な文獻といふべきである。(大正一〇年—一二年)

武者小路實篤

人類の意志について

線35

「我等を支配するものは我等を生んだものであり、その意志を我等は人間として生かす爲には、人類の意志と言ふものが存在していいはずと僕は思ふ」は作者はいふ。古今東西の人が同じ意志と感情に支配されてゐるのだといふ本書をつらぬく信念が、この作家のすべての作品の髓であり光りであるといつても過言ではない。

武者小路實篤

若き人々

緑299

著者自身が一番通俗味が多い作といふこの「若き人々」(大正一四年)は、若き日の作者の記念碑ともいふべく、いたるところ若さの持つ我武者羅さが溢れ讀む者の心をよく打つのである。もととは「彼等と彼女達」といふ題であつたが、讀者は必ずこの彼等と彼女達の内に自分自身の肖像を発見することであらう。

武者小路實篤

井原西鶴

緑286

「井原西鶴」が書かれた昭和六年を前後する十年間を批評家は武者小路文學の「傳記の時代」と呼ぶが、それはまた一面彼の作家生活における最も不遇な時期でもあつた。その不遇な時代に敢然と抗した作者が東西の一流の人物を片端から書きまくつたのが十數篇の傳記であつた。「西鶴が一番純粹に出来てゐる」とは作者自身の言葉である。

武者小路實篤

湖畔の畫商

緑160

昭和一一年四月より十二月迄の歐米旅行の紀行文集であるが、ヨーロッパをめぐつて作者は何よりもミケランジェロ、レンブラント、セザンヌの藝術に感動し、しばしば眠られぬ夜があつたと告白するのである。これを轉機として武者小路文學には第二の青春が誕生し、やがて「愛と死」「幸福な家族」等が次々と創造されるのである。

武者小路實篤

愛と死

緑106

昭和一四年ヨーロッパから歸朝後の代表作品であるこの小説は、現代における最高の戀愛文學といはれる。情痴を描いた作品のあまりにも多いなかで、この作のごとき戀愛が全人格性を帯びてあらはれてゐるものは少い。全人格性とは人生いかに生くべきかと云つた根本の問ひを根柢にひそめた戀愛をいふのである。

武者小路實篤

幸福な家族

緑159

昭和一五年婦人公論に連載された作品で、年頃の息子と娘を持つ畫家夫婦の愛情と、息子の戀愛をめぐつての美しい兄妹の愛情など、幸福そのものといつてよい家族の生活が展開されてゐて、作者一流の明るさが讀む者をして誰しも幸福感に浸られる小説である。彼の創作活動に油ののりきつた時期の傑作の一つである。

武者小路實篤

曉・ある彫刻家

緑276

「曉」(昭和一七年)は自然に對する心の深さから生まれる新鮮な感動を、的確に純粹に深く描寫した作であつて、そこには人生を眺めるのにリアリズムを必要としなかつたこの作家の肉眼の輝きが感じられ、「ある彫刻家」(昭和二二年)の深い謙遜と高い率直さとそして天真爛漫な自信と情熱こそ武者小路文學を貫く生命である。

武者小路實篤

棘 まて 美 し

緑186

この小説について作者は自らつぎのこと云ふ。「愛讀されていいものと思つてゐる。おとなしい、淡々とした處のあるものと思ふが、今迄僕にこんな作があることを知らない人にはよろこんでもらへさうに思ふ。「愛と死」や「友情」と何處か共通のあるものと思ふ」名作「友情」とともに是非併せ讀むべき佳品である。

武者小路實篤

眞 理 先 生

緑110

昭和二年一月から五年十二月まで雑誌「心」に連載されたこの小説は、武者小路文學の頂點ともいふべく、常に人間の善意を信じ人生の美しい面を觀て來た作者の精髄がここに極まつたといつてよい。「幸福者」の主人公を年とせせたやうな「眞理先生」と石ばかり描いてゐる「馬鹿」に作者の人間肯定の面目は盡きてゐる。

武者小路實篤

馬 鹿 一

緑375

「眞理先生」の續篇をなすこの作品の主人公達は、眞理先生をはじめ馬鹿一、白雲、泰山などいづれも「眞理先生」の中で活躍した人達である。これらの人物は作者の分身にはかならないが、とくに馬鹿一といふ人間像を通して作者は、運命に感謝して死ぬ迄誠實無比にこつこつと仕事をしつゝといふ人生觀を造形してゐる。

志賀直哉

和 解 他一篇

緑295

ここに收められた「和解」と「大津順吉」とは志賀直哉の作品の中で最も自傳的要素の濃い作品であり、すべて作者の経験した事實をそのまま小説に構成したものである。そこに共通して現はれて來る問題は父との確執であるが、とくに「和解」における父との間に和解の成る部分は涙なくして讀むことが出來ない。

志賀直哉

清兵衛と瓢箪 他十四篇

緑274

小説を書く事に不満であつた父への不服を動機として書かれた「清兵衛と瓢箪」をはじめ「正義派」「小僧の神様」「雨鈴」「山科の記憶」「プラトニック・ラブ」等、ここに收めた十四篇は、作者の大正期全期にわたる短篇の代表的作品であり、近代日本文學における短篇小説の一つの様式を確立したものと見て價值高い珠玉集である。

志賀直哉

暗 夜 行 路 全册

緑204—205

「ひと口で言へば深い意味での幸福の探究である」とはこの小説に對する小林秀雄の評言であるが、志賀文學の最高峰を示す作者唯一の長篇であるこの作品は、前後二十五年の歳月をかけた不朽の傑作として、既に近代日本文學史にゆるがない古典的地位を占めてゐる。ここには志賀直哉の人間成長の年輪が刻み込まれてゐるのだ。

志賀直哉

早春の旅

他十二篇

緑273

これらの十三篇は、作品として殆ど虚構の要素を持たず、出て来る人物も竹實名の儘で、創作と随筆との境界のはつきりしないやうなものであるが、それだけにかへつて強く人間味の豊かなものとなつてゐる。平明清澄な筆致のうちに淡々と語る作者の態度は、作者のいはゆる「離れて、しかも強く即く」といふことに盡きるといへよう。

長興善郎

項羽と劉邦

緑257

すべての優れた作家は若い時に、その人の個性が不意に開花することがあるが、この戯曲は二七歳の若き日の長興善郎が思ひ切つて咲かせた大きな花である。ヘッペルの史劇に感激したのが動機で書いたといふが、項羽と劉邦といふ歴史的題材を若さの力で充實して生かしてゐて、讀者にロマンティックな美しい幻影を興へずにはおかない。

長興善郎

青銅の基督

緑213

二〇歳頃から内村鑑三の著書に親しみ、さらにその門に通つてキリスト教に深い関心を寄せた作者が、長崎滞在中に耳にした銅板路繪の著者萩原裕佐の話に創作欲をかきたてられて書いたのがこの小説であつた。キリシタン殉教史の一齣を埋める天才的な銅物師の藝術の悲劇の背後には、作者自身の藝術への決意を感じさせる力がある。

長興善郎

竹澤先生と云ふ人

全二册
緑214 215

「道徳觀は直ちに世界觀であり、人生觀であり又宗教である。而していつ死ぬか分らない自分は、何はさておき自らのためにそれを明かにしてはつきりと書きとめておくことが急務と感ぜられた」といふ作者が、竹澤先生といふ人物を設定し、その言行録を記すことによつて自らの風貌、生き方をたづねたユニークな思想小説である。

長興善郎

野性の誘惑

緑63

宇野浩二をして「不思議な小説」といはしめたこの作品の魅力は、その文章の持つてゐる獨特の力にあるといへよう。登場人物は概念的な恨みがあるにもかかはらず、作者の筆力は讀む者を緊倒するのである。題材のなかにあくどいまでに入りこんでそれを掘り下げる力に惹かれてゐる長興氏の特徴が遺憾なく發揮された傑作である。

長興善郎

夜の全二册

緑267 268

作者が戦後約四年間にわたつて没頭し書き上げた長篇小説である。敗戦と共に消滅した貴族階級の、ありし日の姿を客觀的に描いて落日直前の貴族生活を正しく刻明に記録した長篇はこの小説が唯一といつてよい。若い日から東洋に深い関心を寄せ、しばしば大陸に旅した作者はこゝで日本の悲劇の基を探求しようとしてゐる。

有島武郎

宣

✧ 言

緑68

有島武郎

カインの末裔

✧ 他一篇

緑254

有島武郎

生れ出づる悩み

✧ 他一篇

緑18

有島武郎

或る

女

✧ 全二冊
各々々々

緑229—230

有島武郎

惜みなく愛は奪ふ

✧

緑3

有島武郎

ドモ又の死

✧ 他一篇

緑259

有島武郎にとつて文學は、火花を散らしつつ展開する眞實追求の場であつた。「宣言」(大正四年)はとりわけその特色がよく發揮されてゐる作品で、内面に投入された作者の必死の眞實探求が、讀者の心を強く引くのは、やむにやまれぬ内的衝動に驅られながら、自己の眞實から一步も離れなかつた作者の血みどろの闘ひのゆゑである。

「カインの末裔」(大正六年)の主人公廣岡仁右衛門は、有島武郎が自己の内面に奪ひ取つた人物であつた。外部からの壓迫によつて内に押し込められてゐた激しい本能が、恐ろしい力で外部にほとばしり出た結晶である。そして仁右衛門の自我主張とその裏に隠されてゐる愛の氣持とを違つた環境にもつて來たのが「實験室」である。

ここに收められた「生れ出づる悩み」(大正七年)と「クララの出家」(大正六年)とは有島武郎の靈的な一面を代表する注目すべき作品で、彼の人間的な愛から生れたものである。クララに託された宗教的なものの憧憬が、人間の世界に實のする時、隣人への愛となりここに「生れ生づる悩み」のやうな作品が書かれたのである。

有島武郎の代表作であるのみならず、大正期の最高傑作の一つとされる「或る女」(大正八年)は、國木田獨歩の戀人であり妻であつた佐々城信子をモデルとして、男と女、家族制度、女の經濟的獨立等の問題をめぐつて、封建的社會の中に生れて自我の解放を求める女性の運命を描いた作品で、全篇濃厚なリアリズムの力に溢れてゐる。

このエッセイを讀むことなくして有島武郎を知ることには出来ない。ここには有島的なものの一切、その發想の仕方、書き方、生き方のすべてが集約されてゐる。自己の二元的生活を清算して、あくまで自己を精充しあらゆるものを自己のなかに惜みなく奪ひとらうとする積極的な態度を、彼は「惜みなく奪ふ」愛と呼ぶのである。

ここに收めた「ドモ又の死」(大正十一年)「斷橋」「御柱」の三つの戯曲は、いづれも有島武郎がその思想的危機に直面して小説が書けなくなつた頃に作られたものである。現實生活に行きづまり、現實に立脚した作品が書けなくなつた有島武郎の悲劇的破局は、すてにこれらの戯曲のなかに、はつきりと豫斷されてゐたのである。

有島武郎

一房の葡萄

他七篇

線113

有島武郎

星座

☆☆

線271

小川 未明

赤い蠟燭と人魚

他三十篇

☆☆

線136

芥川龍之介

羅生門・偷盜・地獄變

他四篇

☆☆

線23

芥川龍之介

邪宗門・奉教人の死

他十三篇

☆☆

線34

菊池 寛

父歸る・藤十郎の戀

他九篇

☆☆

線223

有島武郎の童話はほとんど自殺の前年と前々年に書かれたもので、ここに収められた八篇がその全作品であつた。子供に子供の求むるものと與へ、精神の糧を與へたいといふ父親らしい氣持から書かれたもので、白樺派らしい人道主義の精神が童話の世界においても、明るい解決と人生への肯定を生み出す力になつてゐる。

未完に終つた「星座」は有島武郎晩年における唯一の長篇小説で、彼が思想的轉換と生活的情勢との矛盾に苦しんでゐた時期の作品である。北海道を舞臺として展開されるが、その大自然が生きて生きたと寫され作品全體に嚴肅な氣分と深刻な矛盾氣とを與へてゐる。大自然のやうに強く大きく生きたいといふのが彼の願ひであつた。

作者は日本の童話文學の草分けであり「童話の中に高い文學精神を吹き込んだ最初の人」とされてゐる。その数多い作品は、生涯を童話にかけることによつて夢幻の世界に絶えず美を探らんとする激しい心熱の結晶とも云ふべく、豊かなロマンチズムに彩られた兒童文學として正に「世界に誇り得るもの」が少くない。

短編の名手芥川は常に藝術的完成に敏感な作家であつた。彼は夙から學んだメリメの方法、アナトール・フランスのスタイルを我國の王朝物を素材として生かし、これら珠玉の完成品を生んだ。芥川の歴史小説はその完成美と、さらに古人の心に「ヒューマンな閃き」を捉へたことによつて、常に變らぬ輝度を保つてゐる。

とりわけ「すべて異常なる物」に對して興味が強かつた芥川は、これらの切支丹物に、その浪漫のエキンチシズムを美しく定着した。明治末から大正にかけて我が國の文學者を激しく結了した「南蠻」への憧憬が、芥川の彫心鑠骨の表現を得て花びらいたと云つて良いてあらう。王朝物と共に芥川文學を代表する作品群である。

菊池文學の本領は、平明率直に構成の素材な點にある。その特色は初期の短編、とくに戯曲に最もはつきりと打ち出されてゐる。緻密な計算の上に置かれた單純なナイマ、鮮やかな登場人物の性格と無駄のない臺詞、それらを一つの焦點に向つてしほり上げた彼の戯曲は、萬人向きの魅力をもつて、すでに日本近代劇の古典となつた。

久米 正雄

學生時代

線321

久米正雄の代表作の一つであるのみでなく、わが國の青春文學の中でもユニークな存在を示すもの。その柔軟なタッチで描かれた大正期の學生生活の真実は、そのまゝ現代にも通ずるものが多い。何時の時代においても青春の泉である學生生活を、様々な角度とニューアンスをもつて描き出して萬人の郷愁を誘つてゐる。

山本 有三

生きとし生けるもの

線67

「生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける」といつた紀貫之の古今集の序の言葉にヒントを得てつけられた題であるが、この世に生を受けてゐるものは、必ずなんらかの意味で太陽に向つて手をのばしてゐないものはない。光を求めることが生きとし生けるものの本性だといふ作者の信念が全篇を貫いてゐる希望の書である。

山本 有三

西郷と大久保

他二篇

線304

「西郷と大久保」は戯曲家としての作者の最高潮期を代表する作で、山本有三の全作品中最もオーソドックスな重量感のある力作である。「嬰兒殺し」(大正八年)は戯曲の不遇に對する社會的條件への反抗から一氣に書かれた傑作であるが、作者の作中最もポピュラーなものの一つである。他に「米百俵」が併せ収められてゐる。

山本 有三

女人哀

詞

線264

ハラブトマン、シュニッツレル等の翻譯者としての作者が據つたものは、ドイツ、北歐系の正統的なドラマトゥルギーであつたが、日本近代戯曲史におけるこの作者の最大の功績はドラマトゥルギーの問題意識を、實作を通してはじめてわが國に植ゑつけたことである。この「女人哀詞」はそのやうな態度で貫かれた代表作の一つである。

山本 有三

不惜身命

他二篇

線169

「ふしやくしんみやう」(昭和九年)は作者には珍らしいただ一つの時代小説であるが左翼運動に連坐して獄に投ぜられ、精神的疲勞の結果自殺をはかつた作者の親しい人のために、ぜひ讀ませたいとの動機から創られた作品だけに、愛にささへられた作者のヒューマニズムが全篇に漲つてゐて、社會のあらゆる方面の人々に迎へられる名作。

山本 有三

眞實一路

線278

この名作で山本有三が描いた問題は自己解放の人間意識であつた。その自己解放が愛人との死別によつて挫折し、やむない再婚によつて愛の手形の偽造といふ罪を犯す。そしてつひに自滅を餘儀なくされるのだが、それは近代日本のあらゆる大陸侵略へ暗轉しようとする前夜の現實に宿命づけられた悲しい人間像であつた。

興謝野晶子
全譯

源氏物語 全九冊

一・二・三各々

線341—349

水上瀧太郎

大阪の宿

☆☆

線282

野上彌生子

新しき命 他二篇

☆☆

線330

野上彌生子

眞知子

☆☆☆

線64

野上彌生子

若い息子 他二篇

☆☆

線231

廣津和郎

風雨強かるべし 全三冊

各々

線187—188

難解な源氏物語をきめて理解されやすい現代的な表現に變へた「興謝野源氏」の特色は、何よりもまづ女性の心をもつて女性の心を見てゐることである。女性でなければ捉へることのできな繊細な女性の心が、晶子女史の香り高い麗筆を通して、約一千年の「時」をへだてて現代によみがへつたのがこの健康の文學史的價値である。

漱石の「坊つちやん」とならび稱せられるこの「大阪の宿」が、つねに多くの讀者に愛される理由は、何よりも作品中の人物が善良で、人間の正義感と仁愛の情とが共に満たされることにある。主人公は作者そのまゝの自画像ではないが、その分身であつて作者は自分の言ひたいことを主人公三田を通して自由に發言するのである。

作者の出産の體驗記錄である「新しき命」は陣痛から分娩までにすべての女性の胸裡に去來するさまざまな思ひが、人間の、ある結晶した思念の高さで語られてゐる。讀者はここに出産といふ肉體の重荷を負つた女性として、人間としての意義を發見するであらう。母の愛情のあふれる「小さい兄弟」「母親の通信」を併せ收めた。

眞知子は必ずしも作者ではない。むしろ彌生子氏の生んだ娘であり彼女のエミールである。革命思想としてのマルキシズムが日本に輸入された時期に、インテリ女性が經なければならなかつたさまざまな問題をめぐつて、作者がそれを鋭い社會科學の鏡に照して客觀的批判的に見るところから創造された女性の典型が眞知子であつた。

「眞知子」において上流階級の若い一女性をして實人生に觸れさせ、自己と階級との關係を考へさせた作者は、さらにこの「若い息子」において、母親の愛情を集めた一學生をとりあげて學生運動の渦を描き出す。若い世代の正義感に同情と理解を惜しまない作者のヒューマニズムが全篇にあふれて今日なほ新鮮味を失はない。

プロレタリア文學運動の敗退により、轉向・不安・行動と三巴の文學主張が芽生えた昭和八・九年の「風雨強かるべし」時代の中で中産業者本家の家庭を背景に日本の運命を絶えず注視し、誠實に生きようとする純粋な自由主義者を念願する知識人佐賀駿一の精神的物質的動搖を描き、憤光利一「紋章」と共に時代の思想を代表する傑作。

廣津和郎

ひさとその女友達

他一篇

線270

戸板康二解説

久保田万太郎戯曲集

他三篇

線181

久保田万太郎

市井人うしろかげ

他三篇

線249

藤森成吉

若き日の悩み

他三篇

線9

藤森成吉

渡邊 崋山

全冊

各々々

線174-175

藤森成吉

何が彼女をさうさせたか

他一篇

他一篇

線266

風俗の巷に生きる内向的なひさと外向的な年下の美しい加代子といふ對照的な二人の女を通じて、「春の歴史」の作者は、正しい行ひのため苦難の中に投げられた義人ヨブの物語にまで通ずる道理を、昭和一〇年から戦後に至るまでの困難な歴史の中に、さりげなく描き、巧みな女の生活史を形成する。他に「入江の町」を併せ収めた。

およそ時代なり置かれた場所なりに順應する自由さをこの作家はど幾かに持つてゐる人は少い。「浅草の詩人」といふのがジャーナリズムの通念であるが、作者の人生觀はきはめて深僻であり、道義についてはきはめて頑固である。ここに収められた九篇の戯曲はそのやうな作者の「ものの見方」をそのままにあらはしてゐる。

十二世旦暮庵彌生を主人公に吉原の近く古い俳諧の庵に下町人のサークルを描き、震災、戦争を流れゆく時に淡々とくりひろげられる轉變の人生、浅草の歴史。作者の青春への郷愁は差つた冬の日の黄昏の空のやうな低くかなしげな人生の溜息となつて切々たる哀調を奏してゐる。他に「モデルと作者」「一トひらぐも」を収む。

もともと「渡」といふ題に公けにされたこの作品は作者の處女作であるが、文學のどの流派にも属さず、何かの主義にとらはれることもなかつた作者は、ここで自己の個性のままに書きながら時代の新しいタイプをよく現はしてゐる。たえず人生の目的と正しく生きる道を追求してやまない非常に進歩的な自由主義者の人間像がそこにある。

崋山に關するあらゆる文獻を渉獵し盡した上で、崋山を愛し、崋山を體験し、自己の中の崋山をもつてあらゆる材料の中から描き出されたこの肖像は、單に渡邊崋山個人の傳記ではなく、日本の大きな運命といふものの中の崋山を一點としての文化史的存在として、いつの世にも適合され得るやうな普遍性をもつて描かれてゐる。

無垢な、純真な、正しく善良に生きるべき人間が、誤つた社會と、恵まれざる環境とによつて、心ならずも不知不識に破壊の潮に墮ちて行く、これが現代の不幸な人々の運命であるが、作者はその社會の缺陷をこの作によつて鋭く描破した。何がすみ子をさうさせたのか、これは現代に生きる者の深く育みなければならぬ問題である。

江馬 修 受 難 者 ☆☆☆☆ 線 4	江馬 修 山の民 全三冊 各☆☆ 線38-40	長田 秀雄 大 佛 開 眼 ☆☆ 線172	賀川 豊彦 死線を越えて 全二冊 各☆☆ 線197-198	倉田 百三 青春の息の痕 ☆☆ 線30	倉田 百三 愛と認識との出發 ☆☆ 線21
江馬修の出世作であつたこの作品が世に出たのは一九一六年の十月、すなはちロシア大革命の一年前であつた。當時の日本文壇はヒューマニズムが主流をなしてゐたが、これはその屈指の代表作である。しかも本書がそのやうな文學史的意義ばかりでなく、現在なほ生きた文學として讀まれるのは目を見張らせるやうな表現のゆゑである。	戦争のまつた中で、作者は「一舉手一投足はいよいよ當局のきびしい監視をうけ」「飛騨の山の中で、捕虜と同様」の生活をおくりながら書きあげられたこの「山の民」は文壇や歴史家のあひだだけの傑作ではなく、大衆の一人一人を勇気づけ、勵まして正しく前進させてくれるやうな立派な作品であり、抵抗の文學である。	わが國の新劇運動初期の代表者である作者が大陳文化の影響をうけた奈良時代に題材をとり、大佛鑄造をめぐる展開される機い勢力争ひを描きつつ、天皇をめぐる政治上、藝術上、宗教上の歴史的人物を選び出してそれにつながる若い人々の信念、野心、戀愛そして民衆の苦惱等を描いてきながらに奈良文化の香りをただよふ大作。	後年、社會事業に挺身するキリスト者として東洋の三指導者の一人に數へられてゐるドクタァ・カガハの青春期の自叙傳。明治學院神學部を中退して神戸の貧民窟に潜り傳道と救済の事業に關連な殉教者の生活を生きた一青年の死線を越えた姿は、宗教に満ちた第一次大戦後の日本に「暴風雨の如き」共鳴を以て迎へられた。	一高在學中胸を病んで郷里に靜養してゐた著者が二人の友人にあてた苦惱の書簡集。悲惨な運命とのたたかひの中から教養に自己の内面に眞の人間の生きる道を見出し、「愛と認識との出發」や「出家とその弟子」等の不朽の名作を書くに至るまでの心の遍歴の報告書である。告白の純粹さと美しさが讀者の心を打たすにおかない。	大正から昭和にかけて生ひ立つた人が、その青春の日にこの書物をひもとかなかつた者はないといつても誇張ではないほど萬人に愛讀される不思議な書であるが、それは本書が深く熱く人間を愛し、魂の救済を熱心に純潔に求めぬた著者の「善人にならんとする祈り」にささへられ、讀者に生きる望みを與へるゆゑであらう。

倉田百三
出家とその弟子

緑51

ロマン・ロランをして「宗教藝術作品のうちで、これ以上純粋なものを私は知らない」とまで絶讃せしめたこの不朽の名作の世界をつらぬくものは、生を愛する心、戀を思ふ心、死を恐るる心を抱き締めながら、人生の限りなき淋しさを感ずる心である。ここには西洋精神と東洋精神との調和の極地が示されてゐる。(大正五年作)

倉田百三
俊寛・布施太子の入山

緑77

倉田百三の作品の中で「俊寛」ほどにもの凄む感じが満ちたものはない。不毛の鬼界ヶ島に流された俊寛は二人の友に裏切られ、絶海の孤島で餓死、この世は善が亡び悪が勝つ世界だと断じ現世に呪ひを浴せつつ死んでゆく。しかし作者はこの呪ふべき世界をなんらかの仕方て祝福しうるものとしたとの願ひからこれを書いたものである。

倉田百三
靜思

緑33

「愛と認識との出發」につづく第二のエッセイ集である。生き難い苦痛の多い人生をいかにして祝福すべきものとする事ができるかといふ、心の態度を探し求めた著者は、ここでは、人間は同胞の愛をもつて互に救ふはなければならないといふキリスト教的敬虔の心境にまで達してゐる。敬虔こそ本書をつらぬく生命である。

倉田百三
超克

緑105

この書は著者の倫理學書である。といつてももちろん購讀で脱くために書かれた倫理教科書ではない。何よりもまづ自らを戒めるために書かれた倫理の書である。著者は自己を高めてゆくためには強くならねばならないと絶えず意志してゐる。それは自己のうちに弱さを自覺した著者の自戒であり精神革命であつた。

倉田百三
絶對的生活

緑129

いかに生きべきかを倫理的に追究しぬいた著者が、その頂點に達した時の思想がここに盛られてゐる。執拗なばかりに眞摯な求道精神と明確な理論への努力を捧げて運歴を重ねた著者は、この「絶對的生活」において歸められぬものを生かすためには、諦められるものを捨てねばならぬといふ雄々しい諦觀に到達したのである。

倉田百三
親鸞

緑161

「出家とその弟子」以來親鸞と深いつながりをもつてきた著者は、この書において親鸞の信仰と生活とをひとつの物語として自由に讀み易く敘述してゐる。これは必ずしも史實に忠實な傳記ではないが、親鸞の信仰の眞髓が巧みに浮彫りにされ、人間味ゆたかなそして人生の不幸や淋しみを知つてゐた親鸞の面目が瞭如としてゐる。

青田 百三

青春をいかに生きるか

❖❖

緑218

瀧井 孝作

無限抱擁

❖❖

緑92

室生 犀星

あに いもうと・山吹

❖❖

緑194

川端 康成

伊豆の踊子・禽獸

❖❖

緑47

川端 康成

浅草紅團

❖❖

緑246

川端 康成

母の初戀・高原

❖❖

緑328

人間の一生は、青春時代に決定されるといはれる。ここに收められた諸論文は、青春をめぐる諸問題について書かれた著者の文章であるが、讀者、教養、倫理、戀愛、先哲、夫婦愛等人間としての最も大事な根本問題が著者獨特のユニークな思索を通して展開され、讀者はここに青春の命を限りなく汲みとるであらう。

現在ではすでに古典的名作になつてゐるこの作品は、わが國では珍しい純潔な戀愛小説である。作者自身の直接経験を正直に一分一厘も歪めずこしらへず寫生したこの小説が讀者を強く感動させるのは、作者が「自ら打込んで題材の中に生活して生拔いた」からに他ならない。大正末期の誠實で求道的な青年の魂の記録といへよう。

「あに いもうと」は室生犀星氏の全作品中での一頂點を示すものとしてつとに定評ある小説であるが、長い芭蕉研究や隨筆などではしばらく閑かな生活を送つてゐた作者が、忽然として脂肪の乗り切つた文章で市井の愛情嘆息の姿を書きつづけたのはゆる「市井もの」のきつかけをなした劃期的名作。「山吹」は氏の「王朝もの」の代表である。

川端康成の文學の奥底には、一種の虛無感が素直な歸心を奏してゐる。氏が郷愁をもつて、いつも探してゐるものは、魂の歸つてゆく家である。初期に屬する傑作「伊豆の踊子」の主人公は孤獨を抱いて伊豆の旅に出、旅藝人の純情な踊子にはげしい思慕の念ひを寄せる。汚濁の現實を遊離しつつかへつて人生の眞實を捕へてゐる。

「浅草紅團」は大震災によつて一變した昭和初期の打撃から復興するひまもなくおそつて來た經濟界の不況の時代を背景として、それとは一見うらはらな獵奇と享樂の氾濫する世俗をみごとにとらへ、それを不良少年・少女のむれを中心に定着したアラベスクの繪模様ながらの作である。

ここに收められた「童話」「夕映少女」「高原」「母の初戀」の四篇は、いづれも川端康成の三十代の活動を代表する記念的作品である。作者の肉眼は、女性の肉體をつかささるやうにするどくみつめるが、しかも氏の心眼はこの世にありふれた人のすがたのなかに、あまりにも深く神秘的な人間の運命をとらへてゐる。

川端 康成

舞姫

緑301

いはゆる浅草物といはれる一連の作で川端康成が描いた世界は、いはば「生命」追求の旅情であつた。浅草の中に氏は人間の裸の姿を見、舞臺に踊る舞姫の中に森の世界の宿命を見つめる。この「舞姫」もまたその流れの中に立つ一つの作品であるが、踊子の肉體と精神、舞臺と生活との相剋の中に作者は「女の生命」を追求する。

川端 康成

再婚者

他九篇

ここに收めた「再婚者」「さざん花」「白雲」「お正月」「夢」「夏と冬」「雨の日」「冬の半日」「宵輪」「再會」の十篇は、いづれも作者戦後の作であるが、「千羽鶴」「山の音」などで完成の域を示した川端文學にひとつの轉機が来たことを暗示してゐる。女性のかなしし心情と肉感を鋭く描いた「再婚者」はとくに名品である。

横光 利一

寢園

緑171

眞に小説といふ名を冠するに相應しい「寢園」は現在のおが國の小説作品のなかくて、新しい小説の最高を示すものである。小説の意識的構成といつたものが作家の肉體をもつてある完璧な實現を得たものであり、その意味で「寢園」の出現は劃期的な感銘をもつて世に迎へられたが、今日なほその新鮮さは失はれてゐない。

中河 與一

朧花

緑167

昭和八年五月から六月にかけて東西の朝日新聞に連載されたこの作品は、いはば青春への讃歌ともいふべき小説で、善行も惡徳もない、すべてが生きたいとして瀟灑とした青春の輝きが全篇に漲つてゐる。作者は特定のモデルを選んで書いたわけではないのに、この小説の主人公であるといふ名乗る讀者が實際に現はれてゐるといふ。

中河 與一

愛戀無限

全二册
各々々

緑332-333

近代日本文藝として稀有な構想の雄大さと創造的な浪漫性のゆゑに第一回選谷賞をうけたこの作品は、名作「天の夕顔」とともに人間の尊嚴と愛の久遠性を説く中河文學の真髓である。世界を巡歴する飛行曲藝師夫妻を中心に人間尊嚴の思想は奔放多彩な場面の轉回とともに浪漫的に昂揚され、一大ロマンを形成してゐる。

中河 與一

天の夕顔

緑31

香はしく、夕顔の愁ひを秘めたひとりの人妻の魂を求めて二十年、思ひのことごとくを盡くして人を受する男の生涯は、狂熱の誤謬と云ふより求道の剛毅に近い。こんなにも美しく、つつましく、雄大な戀愛小説は類がない。昭和十三年以來ベスト・セラ―をつづけ、英獨等について佛譯いづるやドミニク、アドルフなどに比較された。

中河 興一 香妃・氷る舞踏場 他五篇 ◆ 緑95	中河 興一 失楽の庭 ◆ 緑322	中河 興一 悲劇の季節 ◆ 緑306	岸田 國士 由利旗江 ◆◆◆ 緑243	岸田 國士 鞭を鳴らす女 ◆◆◆ 緑157	岸田 國士 雙面神 ◆◆◆ 緑196
乾隆帝の肖像に從はず、因へられたまま數年後みづから貞操を守つて送れた「香妃」の肖像を、紫禁城内に目のあたり見て、作者の想像は飽くまで甘美。晴れ渡つた月夜、北國の植民地の一隅に漂着する數十組の戀人達に、突如其來のはげしい渦巻が襲ふ「氷る舞踏場」。その他ロマンチシズムの極地を示す「鏡に入る女」等七篇を収む。	美しい古都北京を背景にくりひろげられる烈しいそして無價の戀愛を、女主人公の母親に與へる手紙の形式で書かれたこの作品は、作者が戦後に發表した最初の本格的なロマンであつた。あらゆる意味で愛情に貧困な現代にあつて、つねに眞實の愛情のありかたを示してやまない作者の思想と意志が、この作品全體をつらぬいてゐる。	人間の尊嚴さにおいて人間を形成することをめざした教養小説は、ゲーテに發した近代小説の一つの特色であるが、この「悲劇の季節」はさういふ目的を見事に實踐した作品である。求愛や戀愛や結婚が事務化しつゝある戦後の傾向のなから、人道と人間の尊嚴のための激しいたたかひをつづける数少い文學の實例がこの小説に示される。	處女作「古い玩具」以來六年、確乎たる位置を劇團に占めるにいたつた作者が最初に筆を下ろした長篇小説がこの作品であるが、こゝで作者が描かうとしたものは一人の勝れた女性の想像を通して、自ら身を獻げる以外、決して奴隷になるまいとする女性としての最も純粹な道徳であり、そこにこの作の意義がある。	西欧小説の本格的な構成を初めて日本文學に實現しようとした野心作「由利旗江」はチーマの大膽さのゆゑに必ずしもその眞價が正しく理解されなかつた。その悲運に對する反撥として書かれたのが「鞭を鳴らす女」であつた。世の常識と偽善を痛快に踏み倒つて行く主人公綾三の快調な動きに昂然たる作者の氣概が示される。	日本におけるファッショ勢力の權頭を決定的ならしめた二・二六事件の直後、かつて軍閥にあつた作者がその深い憂慮から、せめて文學者の果し得る責任を果さうとした悲痛な試みがこの作品であり、當時の政治の動向を憂へた作者が爲政者と國民に與へた公の警告であつた。軍人批判と風俗の混亂に對する反省が作の中心をなしてゐる。

岸田國士
落葉

日記

緑102

戯曲「落葉日記」は殆ど古典的格調をもった形式美と清冽なリリズムとによつて、数多い作者の戯曲のうちでも一際目立つ名作であるが、これはそのリリズムを小説において追求しようとしたものである。全篇に渾身の力をこめて、真摯な情熱を注ぎ込んで流れて、作者の小説のうちで最も快活な読み易さを感じさせる作品となつてゐる。

岸田國士
泉

緑48

戀愛の抑制によつて、いはば戀愛道とも呼ぶべき一個の「道」の完成に仕へる男女の物語である。幾島の自尊心と素子の自信と、互に満ち得ぬ二つの精神が仄かにかよふ一筋の思ひを通じて、共に苦しみ共に努力しつつ愛の成就にいたるといふ主題が、作品に漲る脈々たる作者の情熱にささへられて心ゆくまで美しく描かれてゐる。

岸田國士
日本人

**

緑148

著者の戦後のエッセイ集であるが「日本人」とはおほかた時形的なものから成り立つてゐる人間で、自分たちはそれに氣がつかず、それでゐて、完全な若しくは健全な人間像といふものを自分たちの間で求めることを断念し、てゐると説く痛烈な文明批評は、賛成すると否にかかはらず讀者を反省させずにはおかない。

池谷信三郎
望郷全二册
各々

緑93-94

池谷信三郎ほど都會人らしい品格を保ち得た人は少かつた。作家としては未成品であつたが、處女作長篇小説「望郷」に發し、「花はくれなゐ」にきままるその作風は、青春哀歌の抒情として今日なほ若々しい薫風を放つてゐる。「望郷」は大正一三年時事新報の當選作品であるが、清新芳醇な近代都會的文藝の先驅をなしたものである。

梶井基次郎
城のある町にて他十三篇
各々

緑97

略い現實に傷つき宿病に悩みなながら眞摯に誠實な生き方をつらぬき、生命を賭けた文學を生み出した梶井基次郎の作品は、繊細鋭敏な感受性と逼ましい筆致によつて讀者を描いて然も清澄であり、哀愁を描いて然も健康な近代知識人の諸特徴を見事に現してゐる。名作「檸檬」をはじめ代表作はほとんどここに收められてゐる。

岡本かの子
花は動し他二篇
各々

緑265

白痴美の妖光を放つ岡本かの子の藝術は類聚美の文學ではない。そこには健康さが溢れ、その稚拙な外観の中には感性の暖かさ、豊かさ、若々しさが充滿してゐる。この集には彼女のナルシズムが最も單純素朴に現れてゐる「母子感情」、死期近き病妻家に戀する中年の新興生花師匠の切々の心を描いた「花は動し」他一篇を収めた。

岡本かの子 金魚療亂 他二篇 ◆◆ 線263	岡本かの子 巴里祭 他一篇 ◆◆ 線262	岡本かの子 老妓抄 他十一篇 ◆◆ 線261	岡本かの子 生々流轉 全三册 各◆◆ 線49 50	岡本かの子 女體開顯 全三册 各◆◆ 線227---228	小林多喜二 蟹工船、黨生活者 ◆◆ 線329
ここに收められた三篇のうち「金魚療亂」は著者の面白さと構成の緊密さとして、かの子の作品のうちで、最もすぐれたものの一つであり、「春」は女性の哀れさ、はかなさが象徴的に表現された佳品。そして「落城後の女」には佛教の輪廻思想が近代的な自我擴充の思想と分ち難く絡み合つたかの子の獨特の人間観が示されてゐる。	かの子の特質な文學的資質が豊かに開花してゐる「巴里祭」「河明り」「雜妓」の三篇を收む。「巴里祭」では抒情風のリズムのうちに藝術家かの子の眼に映つたパリが、單なる旅行者の觀察を越えて内面から描き出され、「河明り」はかの子の女性観が表白され最も成功したものの。「雜妓」は藝術家の誕生を主題とした名品。	「老妓抄」はかの子の心境が最も明らかに現れた作品で、段々と素人の素朴な氣持に還らうとしてゐる一老妓がある青年若學生を引取つて世話をする話であるが、「年々にわが悲しみは深くしていはよ華やぐいのちなりけり」といふ老妓の歌は取りも直さずかの子自身の姿にはかならない。他に名作「東海道五十三次」他十篇を收めた。	武蔵相模をつらぬく多摩川の流れば、岡本かの子が終生思慕してやまなかつたところであるが、萬象を映して流れ行く美しい川の深奥にひそむ嘆きをかの子は自分の體內に秘めてゐたのである。そのやうな自己の生命の神祕の自覺と狂亂の祈りにささへられた「生々流轉」はかの子文學のエッセンスであり、宿命の告白にほかならない。	「女體開顯」の奈々子は「生々流轉」の雛子と全く同一型人物である。大家奈々子を「状況」から脱出させ、旅立たせるためにかの子はこの小説を展開するが、それはまたかの子が抱いた藝術論、庶民藝術史、文明批評の展開でもあつた。常に現實によつて魅惑されてゐたといふのがかの子の切なる願望であつた。	蟹工船といふ特殊な労働形態を取扱つて、植民地、未開地における搾取の典型的な姿を描いた「蟹工船」は中國、ソヴェート、アメリカ、チエッコ等にも翻譯され、小林多喜二の作中最もひろく讀まれ、近代日本文學の代表作の一つとなつてゐる。「黨生活者」は日本文學ではじめて共產主義的人間の造形に成功した小説である。

宮本百合子
貧しき人々の群 他二篇
線202

宮本百合子
伸子 全二冊
線238—239

宮本百合子
播州平野
線183

徳永直
太陽のない街 他一篇
線241

徳永直
妻よねむれ
線100

徳永直
静かなる山々 全冊
線255—256

作者が十八歳のときに發表した「貧しき人々の群」はトルストイの「コサック」や「ヂ・ムラート」に刺激されて、自分のうけてゐる村の自然と人間の生活を描いたもので、きはめて素朴なあたりにはあるが、この作者の全生涯を貫いた人生と文學とに對する一つの基調がその奥底に響いてゐる。「福宜様宮田」「加護」を併せ収めた。

宮本百合子の最初の長篇小説である「伸子」は、自分自身を女主人公に設定し、結婚と離婚を軸として家庭生活の内外に起つた人生の波の起伏を描いたもので、百合子の人間の思想的發展のための出發點を示す作品である。何よりもまづ婦人解放の文學であり、しかも日本に生まれた婦人解放の文學中もつとすぐれたものである。

敗戦直後の日本人の姿を具體的に寫し出した「播州平野」は、平和を願ふ人間のよりどころを明かに示した作品である。宮本百合子は戦後最も熱心で有力な平和運動者の一人であつたが、この作品の最も深い意義は、平和運動の源泉を描りひろげて、地をうるはしつづける清水の流れをいつまでも溢れさせてゐるところにある。

一九二六年におこつた東京・小石川の共同印刷の大事業を主題とし、その争議に積極的に参加した作者が、戦ひやぶれて工場を追はれての半失業の貧しい生活のなかに書きあげた「太陽のない街」は、この歴史的な争議を労働者の怒りと戦ひの意欲をもつて描き出したものとして、プロレタリア文學史に不朽の地位をしめてゐる。

おのづからにはとばしりてたこの鎮魂歌は、敗戦といふ現實が作者にもたらした断絶感と解放感との二重寫として滴血された最初の歌聲である。徒らに背のびもせず卑下もせず作者の胸中にわきあがる自然な感慨が「妻よねむれ」の呼びかけてあつた。作者個人にとつてだけでなく、敗戦直後の文壇をかざる記念碑的な作品といへよう。

古今のすぐれた文學作品は、それぞれの時代のそれぞれの社會の縮圖であつたが、「静かなる山々」は戦後日本社會のきはめてしつかりした縮圖である。これはたんに小説の舞臺となつた川岸工場のみが存在する眞實ではなく、日本の現實全體のなかにある眞實である。作者はこの眞實をさまざまな人間の形象を通じて表現してゐる。

島崎藤村原作 村山知義脚色 戯曲 夜明け前 ◆◆ 線297	藤村の代表作「夜明け前」の戯曲化であり、新協劇團が一九三四年に初演して好評を得て以来、上演ごとに手を加へた決定稿である。明治維新といふ大變革を、木曾の山の中の庄屋であり本陣である舊家の主人といふ立場から眺め、變革の必然性をリアリスタイックに描き出したところに特色がある。	村山知義 死んだ海 第一部 第二部 ◆◆ 線184	日本人は毎日魚を食べながら其の魚は誰が獲り、いかにして賣られ我々の手に届くのかを良く知らない。作者は初めてこの主題に正面から取組んで、最も貧しい漁民の生活からはじまり、漁業資本の機構や國家の政治にまでも及んで行く。「真夜中の港」「磯町に寄せる波」と續き、いづれも上演されて好評を博してゐる。	久保 榮 五稜郭血書 ◆◆ 線185	この戯曲はフアッシュの支配體制の礎が置かれた重要な時期である明治維新に對する作者の藝術的解明の試みであり、從來全く閉却されてゐた未墾地に向つて打ち込まれた一つの小さな鐵である。どういふ政治的經濟的要因によつてそのやうな支配體制が打ち樹てられたか、作者はこゝでそれを具體的に分析解剖してゐる。	久保 榮 吉野の盜賊・こはれた瓶 ◆◆ 線189	リアリズム演劇確立のために、雄しい創作活動をつづける作者が、シルレルの「群盜」の熾烈にして高邁な詩的精神と理想主義をとり入れつつ、應仁の亂を背景とする社會狀勢を描き出したのが「吉野の盜賊」であり、「こはれた瓶」はドイッの本格的な喜劇の高い内容と形式を示した傑作を日本の舞臺に上せるために書かれた作である。	中野 重治 歌のわかれ ◆ 線298	「聲」「手」において、自我の充足を自己の事なかれ根性の拒絶によつて購はうとする詩高い孤獨及びその自覺の發展は第三幕「歌のわかれ」に到つて、短歌の抒情によつて自己を誇る場所から、皮膚を外に曝して「兎鼻なも」に立ち向ふ、方へ轉回する、烈しい感受性や自尊心を自身の學生生活を描く裡に解剖した見事な青春文學。	中野 重治 空想家とシナリオ ◆ 線297	執筆禁止や發表處分などの暗い谷間の現實のなかに書かれたこの小説は、作者自身の憂悶の赤裸々なる告白にはかならない。創意の苦痛の伴はない仕事に一日中縛付けられてゐる主人公善六の面影には、市の社會局調査課千駄ヶ谷分室の臨時雇ひとなつた作者自身の體験が色濃く投影されてゐて、主人公と作者は表裏一體をなしてゐる。
--	--	---	--	---	--	---	---	---	---	--	--

聖家族・美しい村

他七篇

緑153

風立

ち

ぬ

緑22

かげろふの日記・曠野

他七篇

緑41

榮穂子

他三篇

緑20

幸福

福

緑26

街

全一册
各々

緑108-109

ここに集められた九つの作品は、いづれも堀辰雄の初期の筆に成るもので、いはば彼の青春文學の見本帖ともいふべきものである。新感覺派や新興藝術派のあつたらしい起伏と交響の渦中に身をまかせ、そして自己の可能性を磨きあげる一方、メロメやボーダーラインへの静かな傾倒を忘れなかつた堀辰雄の青春の記念碑である。

これは散文で書かれた最も純粹な詩であり、生と死とが透明な互の姿を映しあふ調高い一つの悲歌である。「風立ちぬ」の詩人は生がその眞影を現はしだす危険な深淵を覗くもの、日常的なものの、また一つの風景への祈りにも似た愛で通り抜ける。風立ちぬ、と人が口にするとき、存在の最も深いところから純粹な風が湧き起る。

名作「風立ちぬ」を發表したあと、言ひ知れぬ空虚感に襲はれ、そこから脱れる爲にひたすら心を日本の古い美しさに向けた作者が見出したのは「蜻蛉日記」「更級日記」等の王朝文學であつた。この難解な対象とまともに取り組みながら、作者が追求したものは、「戀する女たちの永遠の姿」にはかならなかつた。

「聖家族」の發表以後、堀辰雄の精神の内部に最も本質的な主題として生き續けてゐたものは、唯ひとつ「榮穂子」の完成といふことであつた。モリーヤツクの「テレーズ・ダケイル」の影響下に書かれたといはれるこの作品は、堀辰雄の文學の總決算であり、日本の近代文學史上に類の少いロマンの典型といへよう。

作者の耳目に觸れたいくつかの青年の姿を、現代といふ不可解な時代のなかに浮び上らせることがこの小説の意圖である。ここに出てくる数人の青年の像は、空想の産物でなく、現代が生んだ實體である。それらを通じて作者は時代の影像を描かうとしてゐる。人間のもつ善き意志こそが世界に幸福を築くのだと作者は訴へてゐる。

支那事變前後の日本の姿を、逞しく廣い取材方法によつて、快テンプで活寫してゐるこの作品は阿部知二の代表作の一つであるが、一齣齣師を主人公に、配するにインテリの典型をもつて、彼らをめづつて躍る各階級の人間の姿を渾然と映畫化して描破したこの小説は、二十世紀の日本における「ドン・キホーテ」と言つてよい。

阿部知二

風

雪

線45

井伏鱒二

集金旅行・さざなみ軍記

雪

線357

井伏鱒二

本日休診・遙拜隊長

雪

線236

伊藤整

青

春

線46

伊藤整

典子の生きかた

雪

線212

深田久彌

津輕の野づら

雪

線294

狂亂怒濤のごとく戦争に没入して行く日本の混亂と、その混亂の中にそれぞれのやり方で身を處してゆくインテリゲンチヤの生息を、自由主義者である一人の老政客を中心に、して展開しながら、作者は人間の良心の聲の尊さを強く打出してゐる。描かれる時代は「街」に關連するが、内容は「幸福」の系列に屬するものと云へよう。

「集金旅行」は連作形式の中篇で、集金旅行にことよせて、中國から九州へかけて都市の風俗や個性を描き分けることに成功してゐる。「さざなみ軍記」は壽永年間京都を落ちのびてゆく平家名門の少年の轉戦記といふ形で、滅びゆく名門の哀傷をよくあらはした傑作。敘述や描寫の的確さはこの作者ならではの感と興へる。

つねに庶民の精神の底から發想し、昭和文學史にユニークな作風を打ち樹てた井伏文學の特色は、人生の最も冷酷な現實を何気なく描き出す妙手にある。「本日休診」は恐らくこの作家の全作品を通じて最もポピュラーな作品であるが、名作「多喜古村」のまごころないユーモアがここには輕妙な洒落に變つて、作者の成長を思はせる。

北國の小都會を背景に藝術と戀愛との間に迷ひ、自己を失ひがちになる青年畫家。實社會に接觸する前のためらひと疑ひの中でエゴの自覺と愛情の目ざめを感じつつ自己を形成してゆく學生。作者はさういふ物語りを心理的な方法で描き出し、それを北國の自然と季節の推移の中に織り込みつつ美しい一篇の青春の歌たらしめてゐる。

父を失ひ母が別な家に再婚したあと、親類の家に養はれた一少女典子が、次第に自我が目ざめ、自分と似た境遇にある一青年を愛するやうになる。青年はやがて胸を刺して死に、ひとりて生きる道を求め喫茶店に働く典子は社會の汚れを知る。ここには人生の體驗よりもつと眞實なものがリズムをなして美しく描かれてゐる。

北陸生れの作家には珍らしい深田氏の明るい作風は、この出世作に最も著しく現れてゐる。津輕の少女八幡は、生々と自己の周圍に童話の世界を築いて屈託がない。これは醇厚とした青春文學である。青春を描いてとなく感傷に墮しやすいつ缺點を見事に克服したこの作品は、その内に抱く風土的香氣の故にも珍重すべきである。

深田久彌
知と愛
緑103

深田久彌
續知と愛
緑195

深田久彌
鎌倉夫人
緑258

芹澤光治良
巴里に死す
緑126

芹澤光治良
愛と死の書
緑327

芹澤光治良
春の谷間
緑372

「津經の野づら」から一轉して、多分に知的操作をこらし多彩な群像を描かうとしたこの作品にはジイドの「法王廟の抜穴」の影響が見られる。鋭敏な感受性に充ちた青年達と社會の垢にまみれ安撫を身につけた大人とを對比させつつ、人の世の諸相をつづれ織りにして描きながら、作者の興味は青春の理想像にかけられてゐる。

大正の終りから昭和のはじめにかけての、舊制高等學校は、學生生活の花といはれたが、人生を感じ「知と愛」を感じることの最も切實なその學生生活を獨特の色彩に染める感傷と粗糲と、向う見ずの交錯する青春生活を通して、當時の中産階級の子弟に見られた潔癖が心にくいまでに刻み出されてゐる。

パス・ガール達との接觸を通して、戦前の一時期の鎌倉に住むマダム達の生體を、軽くスケッチ風に描いた作品である。努めて深刻な色合をさけることによつて、この中篇はかへつて「鎌倉夫人」なるグルーブの典型を生きた形で捉へることに成功してゐる。作者獨特の軽いユーモアが作のいたるところに光を放つてゐる。

かつて新興藝術派の有力メンバーとして作家的出發をなした作者の代表的作品。一人の娘の育つてゆく姿を見つめながら巴里に死んで行く醫學者の夫人の手記といふ形で書かれたこの小説は、人間の愛と死の問題を、獨特の知性と甘美さをもつて描き、ほとんど完璧さを持つてゐる。なほこの小説の佛譯版は巴里で絶讃をばくしてゐる。

夫、母、弟と大々に親身の人間の死を體驗する女性、そのあひだに獲得する愛情と實在性の把握を體驗風に語つてゆく形で書かれてゐるこの小説は、日本の文學には珍らしい一種の思想小説と言つてよい。觀念に頼らずどこまでも女性の感覺をとほして生の實在を追求してゐることがこの作品のエッセンスを形成してゐる。

敗戦といふ衝撃のなかで解放感を興へられた姉妹を主人公に選び、新しい女性の生き方を示唆する青春小説。家を離れてもけつときよく夫や子供への愛にひかされる姉と、自分の行動の中ですべてを割り切つて生きてゆく典型的な戦後派の姉とのさまざまな生活の交錯を描きながら、作者は女性の幸福のために温い愛情を注いでゐる。

尾崎士郎 人生劇場 青春篇 全二冊 緑307—308	尾崎士郎 人生劇場 愛慾篇 全二冊 緑309—310	今日出海 天皇の帽子 他二篇 緑85	島木健作 第一義の道・癩 他三篇 緑37	島木健作 生活の探求 緑1	島木健作 生活の探求 緑2
「この小説の誕生と存在には不思議な光芒が描現してゐる」と川端康成を讃歎せしめたこの作品は、現實の人間認識の上に虚構の形式をつくりあげたものでありながら、しかも、すべての登場人物が作者の投影である。素材と情熱との調和が一つの流れをなしつつ歴史の縮圖をつくり、運命の奇蹟が影をひそめてゐる。	「青春篇」が現實と虚構のあひだに青春の悲劇を織り出してゐるのに對して、この「愛慾篇」になると、次第に虚構が稀薄になり、現實のかたちが重苦しく作者の視野を埋めてくる。そこには作者自身の愛慾生活の苦惱が色濃くにじみ出て、あたかも、空をゆく天馬が地上に下つて汗を垂らしながら走りつづけてゐるといふ感じである。	「天皇の帽子」は今日出海氏の代表的な中間小説である。天皇の帽子といふ尊貴なものが日本の庶民の中にとどのやうな感情を湧かすか。作者はフランス流のモラリストとして洒落な話術とユーモアをもつてその鋭い社會批判を展開する。直木賞を獲た作品だけに、その健康で適度な味ひは典型的な中間小説としての面白味を藏してゐる。	つねに第一義の道を求めた島木健作の文學の根柢をつらぬいてゐるものは烈しい正義感にはかならない。彼にとつて轉向とは社會正義への祈りであり、人間再生への實踐を意味したが、ここに收められた短篇は島木文學の本質が最もよく現れてゐるもので、それをささへる作者の人格の力が讀む者に何かを訴へずにはおかない。	島木文學の基調と方向を決定した「生活の探求」は新生の探求であり信念更生の物語である。作品を貫く情熱は、一切放棄による實生活の行への捨身である。苦學生活をやめて農民生活に同化しようとする主人公杉野駿介を描きつつ、作者は自己の傷を洗はうとしたのである。いはば純粹生命復活の祈念がこの作品の根本をなしてゐる。	農村に歸つた主人公杉野駿介が封建的にゆめられた農民生活の中で、自分自身にならうとする戦がつぶさに描かれるが、それは作者が駿介を實驗臺として自ら解析せる作者自身の「自己」にほかならない。さらに駿介の父駒平や上原老人のなかに、農民固有の情念と虚無を描きつつ作者は深い愛情を注いでゐる。

島木健作

赤

蛙

他八篇
々々

緑303

武田麟太郎

銀

座

八

丁
々々

緑288

石坂洋次郎

麥

死

な

ず
々々

緑300

高見順

故

舊

忘れ

得べき
々々

緑61

太宰治

晩

年

々々

々々

緑245

太宰治

女

生

徒

他十五篇
々々

緑324

ここに收められてゐる作品は、ことごとく島木健作の晩年の作であり、氏の歿後に遺作集の形で發表されたものである。なかでも「赤蛙」は作者自身の宿命的な生涯を一匹の赤蛙のなかに感情移入しつつそれを象徴美の世界にまで高めたものとして、とくに好評をよんだ作であり、ある意味では島木文學隨一の傑作とさへ言はれてゐる。

生命の泉を求めて庶民の生活のなかに自分を埋めていつた作者は、舞臺を銀座にえらんで肺病やみのパアのマダム、ふたりの女給、小野心家のパーデン、貴族でパトロンになつてゐる内田、左翼くづれの悪徳記者の五十嵐、その男に喰ひ物にされ氣の狂つてゆく下級官吏の長野、さうした人物を配置しつつ銀座八丁の風俗を展開する。

田舎教師で小説家である五十嵐の妻アキは、年下のマルキストである牧野の影響によつて、家庭をすてて實踐運動にはいるが、やがて牧野と肉體關係を結び再び家庭につれもどされる。さういつた筋のこの小説は時代思潮によつて流した作者の紅血に彩られた眞實の繪卷である。登場人物は戲畫化され、そこには作者の自嘲の影がある。

時代の先頭に立つてゐた敏感な青年達の情熱が失はれざるを得なかつた昭和一〇年前後の時期のやむを得ない表現がこの作品であつた。この一篇において作者は獨特の發明になる「饒舌體」といはれる説話形式のスタイルを確立したが、それは十九世紀的な客觀的リアリズムの手法が解體しつつされた果てに辛うじて芽ばえた話術であつた。處女作品集に「晩年」と名づけなければならなかつた太宰治の文學は、そもその出發において限りなき絶望に彩色されてゐた。「死なうと思つた」といふ言葉からはじめられるこのユニークな短篇集のなかに、その後の太宰文學の一切の祕密がかくされてゐるといつても過言ではない。その意味ではこれは作者の最高傑作といつてもよい。

未知の女性の讀者から送られてきた日記に基いて書かれた「女生徒」は、ひとりの女生徒の朝から夜までを描いたものであるが、のびのびとした筆と、すみずみにまでゆきとどいた抒情にささへられた太宰治の代表作の一つである。他に「燈籠」「皮膚と心」「誰も知らぬ」「きりぎりす」「千代女」「恥」「おさん」「運應夫人」等を收めた。

太宰 治 斜陽 緑19	太宰 治 人間失格・櫻桃 他二篇 緑16	石川 淳 白描 緑82	石川 淳 森鷗外 緑207	中島 敦 李陵・弟子・名人傳 緑127	伊藤 永之介 警察日記 緑247
身を減ばさずにおかぬプロテスタトが「晩年」から一貫した太宰の夢であつた。斜陽族といふ流行語を生み出したこの作品には、そのやうな太宰のぎりぎりの反抗が留されてゐる。これは四人四様の斜陽であるが、そこにはいかなる意味においても希望といふものはない。作を貫いて空気をなしてゐるものは死の四重奏にほかならない。	太宰治が生涯をかけて追ひ求めたものは正純な愛情とその表現方法に他ならなかつた。そのやうな作家がつひに「人間失格」を書かねばならなかつたその逆説のなかに現代の苦難が秘められてゐる。これは現代を最も誠實に生きた受難者の肖像でありぎりぎりのところから叫ばれた死の抗議である。太宰の獨創がここに極まつたと云へよう。	わが國在來の小説概念に大膽な挑戦を試みつつ、寫實主義を完全に排除した特異なスタイルを完成させた作者の、最も野心的な意圖によつて書かれた長篇小説がこの「白描」である。讀者が作者の精神のまつた中に飛びこみ、その精神のはげしい息吹きに直接ふれるならば、この作品の興味はほとんど盡きることがないであらう。	鷗外文學の傳統を正しく繼承する作者が、詩歌・小説・論說・史傳等鷗外の文學作品の廣大な世界に自由に入つて、その眞髓を把握し、鷗外文學の全體の像を髣髴たらしめるやうに書いたものであるが、「鷗外覺書」「詩歌小説」「傍觀者の事業に就いて」など鷗外に對する正しい認識と文學一般に對する理解を深めてくれる書である。	「李陵」は中島敦の文學の頂點を示す代表作である。東洋の歴史と社會、古代中國の君主意志とその秩序がそこでは一箇の運命として個人に臨んでゐる。さうした巨大な運命の壓力のもとで司馬遷は孜孜として史記の稿を續け、李陵はその胡服に絶望を包む。これら運命に拮抗する生きざまが、對照と交錯のうちに劇的構成をなしてゐる。	東北地方の田舎町の警察署に場面をとり、その刑事部屋に展開される様々の事件はそのまま戦後の社會の縮圖である。強盜・詐欺・萬引・賣淫・拾子など、目まぐるしい事件と人物とを熟練した技巧で面白く描きながら、しかもこの生えぬきの農民作家は飽く迄も作品の底に變らぬ庶民への愛を潜め、権力と不正への怒りを燃やしてゐる。

石川 達三
智慧の青草
◆ ◆ ◆
緑44

石川 達三
母系家族
◆ ◆ ◆
緑340

大佛 次郎
霧
◆ ◆ ◆
緑142

大佛 次郎
雪崩
◆ ◆ ◆
緑240

大佛 次郎
阿片戦争
◆ ◆ ◆
緑260

大佛 次郎
乞食大将
◆ ◆ ◆
緑155

最も常識に富んだ作家と言はれる石川達三の文學が、廣く讀者層を持つてゐるのは、作品の基礎をなしてゐる正義感と良識のゆゑである。つねに大衆とともに考へながらこの作家は、作品を通してモラルを追求してやまないものである。「智慧の青草」は戦前の大學生活を描いてゐるが、それは戦後社會への作者の批判ともなつてゐる。

作者の第二の新聞小説として書かれたこの小説が、發表以後今日まで愛讀されてやまないのは、作品の主題が時勢の變化にかかはらず今なほ新鮮な興味を失つてゐないからである。かたちは變つても戦後の社會にはこの小説に描かれてゐるやうな母系家族が幾十萬となく殘されてゐて、新しい問題を投げかけてゐるのである。

「良識と知性」の作家大佛次郎の作品には常に独自の香氣が漂ひ、その香氣の中には強いエキゾティシズムが流れてゐる。彼のエキゾティシズムはその眼を開化期へ向けさせるが、「霧」はその典型である。霧に包まれた横濱の異人町、一途な青年千代吉と英人のクバーの對立と妖花お花——それは讀者を堪能させるに充分である。

「雪崩」の舞臺は戦前の東京であるが、主人公五郎にはアフレ的性格が強い。師がよくて常に自分の正しさを信じてゐるがその行爲は一貫性を缺く青年、作者はこれに對して智慧深く寛容な父親と一徹そのものの老人を、さらに柔順で古風な娘と教養豊かな女性とを配置して、この清潔で華麗なメロドラマを展開させてゐる。

阿片戦争の頃の日本はまだに鎖國の泰平の中に眠つてゐた。けれどもその餘波は、當時の唯一の窓であつた長崎へもひたひたと押寄せて來た。作者はそこで起つた小さな波紋を克明に描くことで、夜明け前の日本の姿を浮き上らせようとしてゐる。この小さな島國もやがてはその狂亂怒濤に巻きこまれる運命を象徵させながら……

講談の世界にのみ英雄として生かされて來た後藤又兵衛に材をとつて、そこに戦國武將としての一典型を見出さうとしたこの小説は、また楽しい讀物でもある。武骨一途の故に頭角をあらはし、またそれ故に浪々し乞食にまたなる又兵衛の姿は、その瀟灑な内面世界が裏づけとなつてゐるが故に鮮かに印象的である。

大佛次郎 幻燈 緑248	大佛次郎 歸郷 緑116	大佛次郎 宗方姉妹 緑146	獅子文六 胡椒息子 緑216	獅子文六 南風 緑190	獅子文六 おばあさん 緑302
「幻燈」もまた大佛次郎得意の開化物の一つである。しかし「霧笛」に比べてよりおだやかで靜的に構成されてゐる。森を離れ太刀を奪はれて落伍する武士と新興の町人、この二つの階級の交替期を背景として生じた混亂と、その中を突きぬけて伸び行くさまさまの人間模様の姿を、作者の筆は美しく生き生きと描いてゐる。	藝術院賞を受けた「歸郷」は戦後新聞小説の最高峰である。戦後社會への激しい「怒り」から生れたといふこの小説は、しかしその「怒り」を作品の底に秘めて、あくまでも白々と明るく美しい。大佛氏の良識と知性はその「怒り」を昇華して、現代の完壁な「童話」の世界を現出させた。それは現代への痛烈な批判でもあるのだ。	時期的には「歸郷」と同じ戦後が描かれてゐるが「宗方姉妹」の世界はより現實的である。ヒロインの姉は古都の靜寂を、妹はパレーを受すが二人とも清潔で美しい。この斜陽族の姉妹をめぐつて戦後の混亂した生活と人間の哀歎が、しつとりと古雅なタッチで彩られ、そこには作者の古き日本への郷愁が滲み出てゐる。	惡戯つ子だが頗る良くてさつぱりした氣象の少年は、富豪の邸に住み乍ら妾腹故にさまたまな不都合に遇はねばならぬ。しかし少年はいかなる障害にも負けずに眞直ぐに伸びる。獨自のユーモアと諷刺性にみちた作者の筆は、この快少年を通して、戦前のよき時代のブルジョア家庭の腐敗ぶりを痛烈にえぐる。好個の娯樂讀物である。	天成の樂天家宗像六郎太はその悠揚迫らざる風貌の中に、絶對に人を疑ふといふことを知らない。彼は兩親の故郷鹿児島で西郷南洲の渡南説を信じ、その落胤を日本に迎へようとする。この事件のまき起す可笑しきは、理想の人物六郎太と日本の現實との落差から生ずる。著者はそれを清新で豊かな風刺的に描いてゐる。	時代は太平洋戦争勃發前後。正真正銘の江戸つ子で由緒正しい家風を固持する一人のおばあさんが、その聰明な洞察力と深い愛情をもつて息子や娘、はては孫たちの生き方を巧みに是正して行き、やがて満足の中に世を去るといふ、いはば獅子文六獨特の人物設定で、そのユーモアと諷刺は生き生きとして、戦後の今でも興味深い。

獅子文六

東京温泉

他一篇

緑144

中山義秀

七色の花・テニヤンの末日

緑87

中山義秀

少年死刑囚

他一篇

緑371

福田清人

若草

緑226

林美英子

茶色の眼

緑275

林美英子

晩菊

他六篇

緑313

大東京の真中に眞實の温泉が湧き出したら、といふ大膽な或ひは突飛な夢が失業者にとりつたことから起る悲喜劇を、おもしろをかくし展開させながら、作者は戦前の東京風俗を生き活きと寫し出してゐるが、そこに描かれる庶民の姿は微笑ましいユーモアをもつて讀者の胸をゆるめるのである。これは全く獅子文六の獨擅場である。

はやくから横光利一に兄弟しながら、その一徹で孤高な作風を堅持しつづけた中山義秀はつひに獨自の文學の世界を築きあげた。ひたむきに人間の氣魄と情熱をうたふ彼の文學は戦後ゆるぎなく、圓熟の境に近づいた。それは記録文學の先驅たる「テニヤンの末日」に結實し、新聞小説「七色の花」へと發展して行つたのである。

中山義秀の作品をつらぬいて流れてゐるものは、「有爲轉變」といつた東洋風の思想であるが、死の宣告を受けた一八歳の少年の手記といふ形で書かれたこの作品は、生と死のあはひにおける矛盾をすくく洞察しながら、人間性の怪しい呻きや奇怪な慾望の深さを描いて、作者の端的な敘事精神の轉變の激しさを語つてゐる。

作者の長篇處女作であるが、南國に生れ風物詩に手馴れた作者の筆は、この作品においても、首都の明暗を背負ふ二人の女性をヒロインに、明るい淡彩と軽いリズムで、昭和前期の東京の街の生息を描きながら、若き日の群像の甘美な感傷や羞恥や潔癖や、さらに眼覺める性の衝動まで、心にくいほどの筆致で青春の哀歡を描いてゐる。

作者の生涯のなかで最も圓熟してゐた時期に書かれたこの作品は、妻を中心にしてごく普通の庶民生活、いはゆる世帯ものや女ごころを突込んで扱つた林美英子文學の一つの系列に屬する代表作であるが、戦争直後の生々しい現實を描きながら作者は、中心人物の中川夫婦と相良女史の三人に自分自身を分化してゐるのである。

一段と圓熟した林美英子の創作技術がその頂點を示した傑作「晩菊」は、浮いた商賣をした女の晩年の不安定と寂しさと我執とが、見事な筆で描かれ、さういふ生活をする女の生活空圖氣、化粧ぶりや趣味、感覺までが生き活きと浮彫りにされた作品で、思想的にみても林美英子の文學の核心を傳へる完成された結晶と言へよう。

林 美英子 め し 緑232	妻の座・暦 查井 榮 緑225	流離の岸 大田 洋子 緑242	女 獣 心 理 野澤 七生子 緑78	次 郎 物 語 下村 湖 人 第二、四、五部々々々 第三部々々 緑69—73	豊田 正子 定本 綴方教室 附悲しき記録 緑128
作者の絶筆になつた未完の小説「めし」は、「朝華」「茶色の眼」の系列に属する作品であるが、市井の片隅のありふれた人間の姿に限りなく其感をもち、悲しみに沈む人間のいとなみに切々たる憂情を寄せた美英子文學のリリシズムとリアリズムは、いつまでも讀む者の心に眞實への思慕とせしなき郷愁を呼び起すにはおかない。	「暦」はこれまでの文學に見ることのできなかつた新しい歌ごころ、散文でなければ傳へることのできなない歌ごころの結晶である。それは勞働と生活そのものがいつのまにか集團的に歌つてあるといつた歌ごころである。そして「妻の座」は母の座の悲劇のなかに女性の悲しみと哀れさを負はざるをえない経緯の物語りである。	この「流離の岸」は處女作を発表するまでの作者の成長の歴史を降づけたもので、近代の作家が一度は振りかへつてみなければならぬ魂の發展の歴史である。作者は愛情を情熱とモラルとの相剋の上に捉へようとするのであるが、生きるべき人間のモラルの追求を外にして、この作者には戀愛について語るべきものはないのである。	哲學を専攻しギリシャ古典やドイツ文學に深い造詣をもつこの作者の文章は、職業的文人にならぬ新しい感覚が隔々にまてにじみ出ている。戦前ドイツに紹介の話まであつたこの長篇の何よりの特色は、手垢のよくない清新の氣がみなぎつてあることである。作品の各部分に通じてある主人公レダへの愛情は音楽的な情調を奏してゐる。	凡百の教育公式論は一篇の誠實な魂の遍歴史に如かぬ、かう堅く信じた高名な教育者は、多感な一少年が、愛情と境遇の變轉の中で、自己を築いていつた魂の記録を、慈愛の眼を以て綴つた。それぞれに獨立した主題を響かせる各篇を貫いて底流するライト・モチーフは、運命に對する愛の勝利であり、明るい調和への誠實な希求である。	昭和二年始めて本書が世に出るや劇化映畫化と記録的好評を博した。第一部は著者が一〇歳から一三歳までの作品であり、都會の貧民街の生活を何の感傷もなく描いた寫生文である。第二部になると著者の眼は次第に懷疑的になる。母親の毒通を扱つた「悲しき記録」は、童心の發する痛烈な響きを以て、讀者の心を深い沈黙におしつづす。

豊田 正子 粘土のお面 他十二篇 ◆ ◆ ◆ 緑43	本庄 陸男 石・狩川 全册 各 ◆ ◆ 緑210—211	九 岡 明 幼年時代 他二篇 ◆ ◆ ◆ 緑293	原 民 喜 夏 の 花 ◆ ◆ ◆ 緑320	森 本 薫 女 の 一 生 ◆ ◆ ◆ 緑317	田 中 英 光 オリンポスの果實 ◆ ◆ ◆ 緑86
一〇歳から一三歳までの作品「綴方教室」で大衆の中へ深く浸透して行った著者が、前作に描かれてゐる時期に先んずる、尋常一年から三年頃までの思ひ出を綴つた我が家の生活記録である。生氣ある民衆の言葉と、時に一抹の哀愁を伴つて悲愴な暗い生活の谷間を點々と彩る明るいユーモアは、記録文學史上に異色の收穫を齎した。	きはめてユニークな歴史小説であるこの作品は北海道の夜明け前といつてよい。作者は自分の父祖の血を流した跡をかへりみ、代々の開拓者の苦悩に對して、一種の鎮魂歌を奏てるのである。石狩の大自然と開拓の先驅者の跡は、そのまま作者の詩魂と化してゐるが、死の直前まで筆を執つた作者の生命力が全篇にあふれてゐる。	作者はかつての「三田文學」の俊才。そのフランス風の清新な心理主義的スタイルは故郷鼓雄の流れてゐる。おのづから連作の體をなす三篇の自傳小説において、著者は「幼年時代」といふ一つの調和ある狀態を、成熟した大人の思考と文體とをもつて描きつつ、失はれた時の感受性の再現に成功してゐる。	ここに收められた「夏の花」「廢墟から」「壊滅の序曲」など原民喜の作品の底を基調音となつて流れてゐるものは、亡き妻の死の歎きと、原子爆弾に焼かれをされた廣島の無數の人々の歎きであり、戦後の荒廢した風景や人間關係をもふくめて、日本人の無數の苦悩である。戦争の悲劇がのこした悲しい記念碑と言へよう。	文學座だけの上演回数でも三百回に近づくとしてゐるこの戯曲は森本薫の最後の作品でありまたその代表作であるが、およそ近代文化とは縁の遠い山間僻地など、どこにおいても立派な感銘を與へるものがこの作品の何よりの特異性で、親しみ難いものと思はれてゐた「新劇」を日本の民衆に結びつけた功績は高く評價されねばならぬ。	池谷賞を授與されたこの作品は、學生時代にサンフランシスコ・オリンピック大會に端艇選手として参加した作者が、その前後のことを同じく走高跳選手であつた熊本秋子に語りかける形で、回想風に書綴つたものであるが、ナイーヴな抒情にきさへられた青春の歌が、一種熱つづく純真に奏でられ、珍らしい青春文學の地位を占めてゐる。

若 杉 慧 エ デ ン の 海 ❖ 緑107	野 間 宏 暗い繪・顔の中の赤い月 ❖ 緑42	梅 崎 春 生 日の果て・ルネタの市民兵 他一篇 ❖ 緑244	三 島 由 紀 夫 愛 の 渴 き ❖ 緑52	三 島 由 紀 夫 眞 夏 の 死 他五篇 ❖ 緑182	大 岡 昇 平 サンホセの聖母 他十一篇 ❖ 緑182
戦後の廢墟の中でエロタイシズムや肉體文學の流行に満足できなかった作者は、瀬戸内海地方の女學校生活を背景に、一女學生と青年教師の戀愛を描き、一對の男女の結合の神祕にメスを入れないながらエロタイシズムとモラルを對決させ、明るい青春のロマンを樹立したのである。戦後の作品でこれほど健康でこのびのびとした小説は珍らしい。	戦争と解放との間の暗い花ざかりの樂園の中で青春を持った世代の眼は、批判的であることすら許されなかつた。「暗い繪」は、その暗い谷間の中で「日本の現實から出發しなければならぬ」と口ごもりながら、青春の不安や失敗や苦惱を通じてあらたなる道をみいだすために生きた若い群像を浮彫りにした戦後文學の代表作。	「日の果て」は脱走して女と共に住んでゐる將校を射殺することを命ぜられた主人公が、將校を殺しそして自分もまた女に殺されるといふ筋の小説であるが、主人公の虚無的な心理がリアルな効果ををさめてゐる。「ルネタの市民兵」では、純粹に生命の恐怖に直面した場合、人間はどのやうな反應を示すかを實驗的な興味で描いてゐる。	生きることも、死ぬこともできない現實の姿に絶望し、しかもその絶望そのものに無限の希望をかけてゐるやうな存在。鬼才三島由紀夫の代表作であるこの小説の女主人公である未亡人はそのやうな存在である。自然主義的リアリズムに馴れた眼にははなはだ不可解に見えるかもしれない文體に、實は作者の生命の充實感があふれてゐる。	伊豆の今井清で實際に起つた瀕死事件を骨子として、良人の妹と二人の幼い子供が一瞬のうちに波にさらはれる悲劇を取扱つた作で、普通の小説とは逆に、悲劇の頂點をプロローグに置き、その事件の反應と、つひにそれが忘却の中に見失はれる夫婦間の心理的経過とを追及しつつ、昇的に分析した野心作である。	ここに描かれてゐるのは、戦争といふ「完全に非人間的な狀態」であるが、描き出されてゐるものは、かけがへのない眞實の人間である。一種の私小説であるが、また戦争や人間についての作者の省察録であると言つてよい。そこには「死」に直面したときの人間の様々の生體が、作者自身の深い共感から生き生きと捉へられてゐる。

大岡昇平

武藏野夫人

緑283

人間社會の相互關係の怖ろしさを理解させることを中心主題とするこの小説「武藏野夫人」を讀む讀者は、その文體がこれまでの日本の小説の一般的な書き方と違ふことを發見するであらう。それは作者が人間の心の働きや、人間と人間との關係を心理的な力學として把握してゐることから起るのである。作者の頂點を示す作である。

大岡昇平

妻母

緑334

「妻」「母」の他「父」「再會」「神經さん」「わが復讐」「家」「女相續人」等を収めたこの短篇集は、「武藏野夫人」「野火」の作者として戦後文壇に華々しく登場した大岡昇平には珍らしい私小説風の作品であるが、それだけにかへつて作者の人間味が隔々にまてにじみ出てゐて、大岡の文學を理解するよき鑑を與へてゐる。

武田泰淳

愛のかたち・蝮のすゑ

緑114

合理主義者であると同時に、極端な精神主義者であるこの作者は、精神主義で割り切れぬもの、精神を侮辱するものに對して極度に敏感な恐怖心をもつてゐる。文學はこの作者にとつて一種の自己防衛のメカニズムにはかならないが、しかもそこには觀念文學特有のじじめじめしたセンチメンタリズムは少しも見られない。

田宮虎彦

落城

緑237

幕末の歴史のすさまじい風浪は、雪深い東北の一隅、黒苔のさやかな城と、そこにたてこもる僅かなひとびとに襲ひかかる。それは當時の封建制度の悲劇であり、封建國家の悲劇であつた。そして作者の心眼はその悲劇の奥深くに、人間性そのものの悲劇を洞察しつつ、革新の前夜の霧のなかに姿を消した日本人を確認し再現する。

田宮虎彦

足摺岬

緑326

世相の美しさ、醜さ、喜び、苦みを書きたいと念願し、日本庶民の哀歡をこめた作品世界の完結性そのものに自身の生き得る可能性の總てを賭けてきた作者の精髄が、これら數篇の短篇に凝集してゐる。昭和一〇年代の暗い青春を扱つた「繪本」「足摺岬」は作者の前に去來した「死の影」がどんなに切實なものであつたかを語つてゐる。

由起しげ子

警視總監の笑ひ・本の話

緑62

戦後文壇に突如としてデビューした誠實な著者は、教養的な作家でありながら、どこかにしみじみと肌にあふれて來る所がある。他の女流作家に類のない緻密な感情の「警視總監」、理知で情緒を浮き彫りにした芥川賞の「本の話」、人間的愛情が手放して横溢してゐる「脱走」と、この作者の觀念の抽象性に戦後文學は大きな收穫をえた。

井上靖 い潮 他一篇 ❖❖ 緑125	石川淳序 壁部公房 《S・カルマ氏の犯罪 赤い蘭》 ❖❖ 緑269				
戦後芥川賞受賞作「闘牛」、「獵銃」の二作で慧星の如く文壇に出た作者は「黯い潮」の作品によつて新しい出發をとげた。獨身記者遠水は戦争未亡人景子といふ新しい戀人を得たためかへつて、「黯い潮」に時折隱顯する「自殺した妻の白い肉體へ強い愛情でひかれてゆく。現實生活の彼方の壓微な情緒世界を象徴的に描いた傑作。	密封した壁を自由に出入りする四次元の世界に戸惑ひしない爲には、讀者はS・カルマ氏のやうに己の名前を忘失して見なければならぬ。柔軟な精神は、我々が常識的に正當と考へる倫理的現實の次元を超えて自由の世界に遊ぶが、そこには彼の形式に必然な壁が生ずる。柔軟な精神とは、この壁を不斷に回避する事を宿命と感じる運動だ。				

〔隨筆・評論〕

幸田 露伴

露伴翁座談

緑25

幸田 露伴

續露伴翁座談

緑123

石井 滿編

新渡戸稻造隨筆集

緑84

金田 一京助

室本 石川啄木

緑28

金田 一京助

北の人

緑147

座談會といふ形式は現代ジャーナリズムの所産であるが、近代日本が生んだ稀に見る博學露伴翁を圍んで試みられた、これらいくつかの物を訊く座談は、讀む者をしてさながらに翁の聲に接し、その高潔なる人格に觸れるの思ひを抱かしめる。文豪露伴のヒューマン・ドキュメントとも言ふべく、興味のつきるところを知らない。

「露伴翁座談」に洩らした「釣の秋漫談會」（昭和八年）「言語と文字の間の溝」（昭和十三年）等の座談および齋藤茂吉氏との對談「露伴翁と語る」（昭和十四年）を收めたほか、「馬琴の小説と其當時の社會」「文學上に於ける弘法大師」「瀧澤翁に就いての所感」「青淵先生の後半生」等人物評論に屬する講演四篇を附載した。

近代の生んだ先覺者新渡戸稻造の名はあまりにも高名であるが、その數多い著作は案外世に知られてゐない。本書は三十餘冊の遺著の中から、多岐な面にわたつて選び出された短文を集めてゐるが、これらのエッセイがそのまゝ人間新渡戸稻造の面影を、その生涯に及んでとらへ得るやうに配慮されてゐる所に特色がある。

常に貧困に苦しみながら若くして逝いた啄木の生涯は平凡ではなかつた。彼の多くの書簡はよくその間の消息を語るが、これはまた、さらに人間啄木を深く描き出してゐる。啄木の幼馴染であるばかりでなく、常にその身邊にあつた著者の友情とその理解の廣さは、かかれたる資料を駆使して、人間啄木を浮彫にしてゐる。

「北の人」とはアイヌ人のことである。アイヌ語研究の權威と自他ともに許す金田一博士が、數多い實地踏査の折りに接したアイヌ人や、數々の思ひ出を語つたものだが、この、いはば研究餘滴とも言ふべき隨想の中で、著者は楽しく、愛をもつてすべてを語り、そこに本書の汲むべき滋味があふれてゐる。

鈴木三重吉

綴方讀本

綴180

安倍能成

山中雜記

綴75

阿部次郎
生ひたちの記

綴152

阿部次郎
學生と語る

綴335

小宮豊隆
漱石寅彦三重吉

綴112

田部重治
心の行方を追うて

綴29

三重吉が創めた「赤い鳥」の綴方運動によつて、文章が職業人の獨占をはなれて、眞に健康な大衆自身のものとなつたことは萬人の認めるところであるが、「赤い鳥」に發表された綴方に三重吉自身が親切な指導と批評を加へて編まれたこの書物が、國語教課の單なる一分課にすぎなかつた綴方を獨自な藝術の域にまで高めた功績は大きい。

夏目漱石の門に入り、ケーベル博士に學んだ哲人安倍能成氏の二七歳頃から四〇歳まで十數年間の筆になる隨想集であるが、ここにはジャーナリズムの空疎な議論や不徹底な考へ方などに對する批評や、嚴しい自己批判、自然に對する愛などが若々しい正直さで述べられ、このオールド・リベラリストの人間的面がよくあらはれてゐる。

東北の小さな城下町に生れた「三太郎の日記」の著者の精神發展の記録ともいふべきこの文集は、また遍歴する魂の告白でもある。著者にとつて第一の師は「家と故郷」であり、その發展は「日本とその文化傳統」にはかならないが、家と故郷を語り、心を許した友を憶つて綴られたこの書には、著者の生ひ立ちの道程が彰まれてゐる。

この著者ほどつねに學生を愛し青年に暖い指導の手をさしのべてきた學者は珍らしいが、ここには親しく學生と膝を交へながら「教養の問題」を説き、ゲーテの「詩と眞實」を語り、「讀書の意義」が進べられる。「三太郎の日記」の奥に流れてゐる著者の青春の日の眞實と苦惱の體驗がこまやかな愛をつらぬいて生かされてゐる。

決定版「漱石全集」を世に送り、名著「夏目漱石」をもつて藝術院賞を與へられた著者の漱石紹介の業績はまことに大きなものがあるが、その獻身的事業のあひまに綴られたこれらの隨想は、著者自身も喜ぶごとく記念碑的意義を持つてゐる。著者の偉業の背後に寅彦や三重吉の美しい友情がささへてゐたことを教へられる。

單なる登山紀行家ではなく、英文學者としても造詣の深い著者の人生論とも言ふべきもの。二〇代から三〇代にかけて、人生いかに生くべきかを思ひ悩んだ著者の思索の跡が、多分に自傳的要素をもつて描かれてゐる。一時代の良識の聲は今も耳を傾けさせる多くのものを藏してゐる。

田部重治
山と溪谷
陸華篇
緑60

明治四一年、まだ登山といふものの餘り知られなかつた時代から、コッコツと山を歩き廻つた著者の、わが國山岳エッセイの第一人者としての全貌がここにある。著者の山への愛情の深さは、これら數々の文章の底を暖く、爽やかに流れてゐる。それはむしろ宗教的ともいふべき性質を帯びて、讀む者を山へいざなはずにはおかない。

田部重治
山と溪谷
紀行篇
緑59

名著「日本アルプスと秩父巡禮」の中紀行に屬する部分を獨立させたもので、著者の最初の二十年間の登山記であり、その想ひ出深い生活の記録である。富山市の近在に生れ、幼い頃より朝に夕に日本アルプスを眺めてゐたことが、著者に山への憧れの心をばぐんだのであるが、これらの紀行文はさうした著者の精神史でもある。

田部重治
峠と高原
緑24

著者はこの書で、峻厳な山岳を降りて、おだやかな峠と高原とを漂泊ひ歩く。そこには登山の激しさはないが、爽やかな美しさがある。登山より、より少い行爲と、それだけに、より一層内面的に充實した行爲の軌跡がある。著者は、ここでは、人間をも交へて、楽しく懐かしくすべてを語らうとしてゐる。

田部重治
青葉の旅・落葉の旅
緑170

著者は更らに「峠と高原」の世界からも降りて來た。そして廣く、青葉と落葉の中を歩きつづけた。これは四季折り折りの旅行記、見聞記である。それら目に見、耳に聞く自然と人界の諸相は、登山家として鍛へられた著者の眼と、ゆたかな教養とによつて、より純粹に美しきものへと還元され、定着させて行かずにゐなかつた。

吉田絃二郎
小鳥の來る日
緑350

版を重ねること二百版を越え、大正から昭和にかけて一時代を畫した本書は、現代の人々が見失つてしまつたやうに思はれる人生に對する眞面目さと眞剣さが、たつたいま書かれたやうな新鮮さをもつて讀者の胸をうち魂に迫つてくる。孤獨を愛しつつ運命の苦難に耐へてきた著者の眞實への意志はこゝで永遠の藝術美に高められてゐる。

吉田絃二郎
人生遍路
緑36

感じやすい青春期の人の心を、いつまでも動かす力を失はぬ吉田絃二郎の文學は、彼自身が永遠の青春にあることを示してゐる。芭蕉を愛じ武藏野を愛する作者は自らを「人生遍路」者であると規定する。だが、彼の文學は常に柔かく、かなしく人の胸に芽を落としつづける。その寂しさの極みに於いてすら、暖かく、快よく、

吉田 絃二郎 わが旅の記 緑178	芭蕉を敬慕する著者はまた限りなく旅を愛する人である。異つた風土、異つた風習、そしてそれらの底を流れる人情の共通したものに、著者は魂の故郷のやうな情れを抱きつづけてゐる。芭蕉の墓に詣て、高野の奥を探ね、芳野に花を賞づるこれら数々の旅の記の美しい文章は、著者の人生運路の記録でもある。
小倉 金之助 數學の窓から——科學と人間性—— 緑192	すぐれた科學者小倉博士は、また鋭利な文明批評家であり、エッセイストでもある。「一數學者の感想」から出發して三十年にわたつて書きつらねられて來たこれらの文章は、氣樂な彩りを持ちながら、きびしい科學者の人間形成の記録として讀まれない。
内田 百閒 漱石山房の記 緑290	漱石門の逸材としてその氣骨を繼はれる著者が、はじめて漱石山房を訪ねた頃から師の臨終にいたるまでのくさぐさの出來事や印象を綴つた隨想錄。著者獨特のユーモアの漂ふなかに、師の人格を徳ぶ美しい門下生の謝念にあふれるこれらの文章は、同時にまた漱石研究に缺くことの出来ない貴重な數々の資料を提供してくれる。
辰野 隆 忘れ得ぬ人々 緑14	わが國フランス文學の權威であり、幾多の俊才をその門から世に送つた著者は、當代に比肩するものの少いエッセイストでもある。暖い愛情をこめて淡々と語るこれらのエッセイを太くつらぬいてゐるものは、著者自身の人生觀であり文學觀であるが、著者の語る人々は讀者にとつても永久に忘れ得ぬ人々として鮮かに燒きつけられる。
辰野 隆 忘れ得ぬ人々 緑15	著者は外國文學研究者としての一つの道を、「忘れ得ぬ人々」への敬慕といふ形で、いささかのてらひもなく語りつつ、自己の資質との近似から出發して順次に理解を擴げて行くのであるが、正義を愛し、にせ者を憎む著者の心の激しさは、本書を讀んでいる香氣を放たしめてゐる。著者の主張するのは強い自由主義の道である。
尾崎 喜八 山の繪本 緑10	詩人尾崎喜八氏はまた山を愛すること深い。氏の詩情は、たたなはる山々に對ふとき生き生きと躍動せずにはゐない。「山の繪本」はさうした詩人の第一散文集である。これらの、折り折りに書きとめられた文章は、すでに散文詩であり、尾崎氏はここで山にたくしてまた人生をしみじみと語つてゐるのである。

尾崎喜八

碧い遠方

緑65

尾崎喜八

雲と草原

緑252

辻村伊助

スウィス日記

緑158

高田保

ぶらりひょうたん

辰野隆解題

中谷宇吉郎隨筆集I

緑5

小宮賢隆解題

中谷宇吉郎隨筆集II

緑6

戦後、都府をさけて、信州八ヶ岳のふもとに住みついた尾崎氏は、「自然とそれに直接する人生との具體的事實の詩的或は散文形式で表現する」ために、詩眼を凝らして日山の姿をこれらの文字に捉らへようとつとめた。「碧い遠方」とは、さうした詩人の希ひをこめた、永遠なる理想郷なのである。

「山の繪本」の姉妹篇として多くの人に愛讀されてきたこのユニークな文集は、繊細なユエンスに富む紀行と隨想と直感的な山の記憶などが渾然とした美しさを醸し出してゐる。それらを裏づける作者の詩眼と格調の高い文章とは正に汲すべく、山と自然に對する暖かい愛はそのまに人生への讃歌となつてゐる。

日本山岳會初期の會員である著者が西歐各國の國勢を観察のかたはらスウィスのアルプスに遊んだ時の紀行である。雲峰の麓に異國の人情風俗をさぐり、アルプスの牧歌的美しさを流麗な筆でかきつづつた裡に見る名文であるが、寫眞數葉と併せて見るに樂しく讀むに樂しいものとして編纂された山岳愛好家には絶好の伴侶である。

一種の輕評論の形でその抱懐するところのものを吐露したこのユニークな隨想集が、江湖の絶頂を勝ち得たのは、明るい文章の奥底に流れてゐる著者の切々たる庶民愛のゆゑである。庶民を離れて眞の知性はあり得ないが、死ぬまで庶民への愛情を捨てなかつた眞の意味での知識人の典型がこの著者の姿である。

第二の寺田實彦と稱せられる著者は、事實、實彦の愛弟子であるが、學問以外においてもその雄略と勝れた表現力は、まさに師の名をはばかりしめない。この集には、著者が師をしのぶ文章のみが集められてゐるが、卓然として高明なる先輩を追慕してやまない優秀なる後輩の知性と情熱が、全篇のすみずみにまでゆきわたつてゐる。

隨筆はこの著者にとつて一種のリクリエーションであるが、著者の鋭い感受性と精神の精巧さが、その内に貯へたものを整然とした形に秩序したのがこれらのエッセイである。この集には主として、自然と人と書物について折り折りに書かれた文章が収められてゐるが、科學者である著者がまたすぐれた詩人でもあることを示してゐる。

安倍能成解題

中谷宇吉郎隨筆集Ⅲ

緑7

物理學者であると共に科學一般に關するイデオを會得した著者は、理論や原則を日常身邊の現實的生活に結びつけて考へたり應用したりする感覺の豊かな人でもある。この集にはさういふ著者の啓蒙的な科學隨筆が集められてゐるが、科學的に物ごとを見たり考へたりすることの正しい意味を手にとるやうに平易に教へてゐる。

幸田 文

幸田文隨筆集

—父・こんなこと—

緑319

一代の文豪露伴を父に持つ作者の文學は心の痛みから生れる。流れて一ところにとどまらない幅のひろい流れが父露伴の藝術を生むものであつたが、子の文學は凝結した痛み在所産である。ただよひてはなくなつたためらひであり、流れては固執であり、はなはだ造型的である。ここには代表的名品「父」「こんなこと」等が収められてゐる。

原口 統三

二十歳のエチュード

緑156

あらゆる表現を拒否し一個の裸形の魂として世を立去つた原口統三在りし一高寄宿寮での日々、生きながら傳説的人物だつた彼は自殺といふ自らの創り出した傳説に殉じて逗子海岸に消えた。遺稿は表現の虚偽を痛切に體感した者のみが獲た純粹結晶に輝き、師友の讃歌は永遠に彷徨する若き詩人への愛の表白である。

田山 花袋
吉田 精一 解説

近代の小説

緑219

本書は單なる學究的な文學史や文學論ではなく、浪漫主義から自然主義へと日本の近代文學發展の證人としての著者が、自己の見たありのままの文壇の様相を努めて客觀的に描いた貴重なエッセイである。全巻を通じて視はれるものは著者の近代文學に對する切々たる愛情であり、それがこの書を比類なく清新な生々しいものにしてゐる。

上田 敏

現代の藝術

緑122

明治四三年から翌年にかけて京都帝國大學特別講演會でなされた講演を編纂した書である。現代生活の基調をなす經濟、思想の問題から、文學、繪畫、音樂等にわたり、ひろく世界の藝術を論じながら展開される豊かな智慧と文明批評は今日なほいささかの古きをもたない潑刺さをもつて讀む者の心を打つ。

高濱 虛子

俳句讀本

本書は、「俳句とは何ぞ」といふ問題を組織的に闡明してゐるところに特色があるが、それは恰も坪内逍遙が「小説神髓」を著して組織的小説論を世に問うたのに似てゐる。俳句論、花鳥風詠詩、俳句史、俳句作法、俳句解釋の五部に悉きに説かれてゐる俳句の本質原理に學ぶとき、觀念にあらざる寫生の句の妙を深く認識するに違ひない。

高 濱 虛 子
俳句はかく解しかく味ふ
◇ 緑 8

厨 川 白 村
近代の戀愛觀
◇ 緑 12

正 宗 白 鳥
作 家 論 全 冊

正 宗 白 鳥
自然主義盛衰史
◇ 緑 380

正 宗 白 鳥
讀 書 雜 記
◇ 緑 291

小 杉 放 庵
唐詩及唐詩人 全 冊
各々々 青 93-94

本書は題名の示す通り、正岡子規の後継者、俳壇の大御所たる筆者が、芭蕉、蕪村を初め現代の俳人に至るまでの名句を一つ取り上げて懇切周到な論評を下したものである。筆者の一隻眼は初学者の入門書としても、實際句作に携つてゐる人の指導書としても、高度の専門書としても、いづれも満足させ得る多角的な觀點にささへられてゐる。

戀愛は人間の本能に根ざしながら、常に高い倫理でささへられねばならない。戀愛論の古典ともいふべき本書の説く所は、その意味における「人間の解放」に外ならない。いまだに無意識裡に人間を支配してゐる封建的道德観をいかにして打破し、近代的な戀愛道德を成立せしめるべきか、本書は自由人の、青春への警告といふべきである。

正宗白鳥氏の印象批評はつとに定評のあるところであるが、これは氏の批評の典型的作品として、すでに古典的價值を與へられてゐる名著である。明治・大正期の代表的作家をとらへて語る著者は、一切の先入觀念を拒絶して自分自身の感覺のみを信ずる態度を堅持してゆづらない。作家論の出色として文學愛好家のよき伴侶となつてゐる。

自然主義文學運動の生えぬきの作家である著者が、過去と現代との對比のなかに自らの生きる場所を見出し、その心の機能だけを信じて筆を執つたこのユニークな歴史の書は、日露戦争前後から大正にかけての文學史であると同時に著者自身の精神の發達史であり、さらにそれらに對する現在の正宗白鳥の批判の書でもある。

永遠の青春といはれる正宗白鳥のさかなな讀書力は一般に知られるところであるが、古今東西の文學書を讀破した著者が、その鋭い鑑賞眼を通してとらへた印象を時々につづつたこの書物は、ダンテの「神曲」から三島由紀夫の「愛の渴き」にいたるまで、雜記と呼ぶには相應しくないほど充實した文學論集をなしてゐる。

かつて日本人の詩情を喰つた唐詩も、現代ではややもすれば戸棚の片隅に押しやられてちてゐる。しかし日本文學に深い影響をもつ唐詩の存在は無視すべくもない。若くして唐詩に傾倒した著者が長い間の情熱をこめた本書は、身についた唐詩鑑賞の案内書であり、作家研究の書でもある。

兼常清佐

與謝野晶子

線208

詩に小説に古典の翻譯に多岐の足跡をのこした與謝野晶子にとって、三十一文字の短歌はまたその生命流露の表現形式であつた。それは人間晶子の姿をのぞき見るに極めてつがうのよい窓であるが、この書は歌人晶子に焦點をあててその窓の扉を開けてみようといふ意圖からなされたもので、晶子を愛する人々の好き伴侶と言へよう。

北原白秋
木俣修補註

明治大正詩史概観

線163

明治・大正・昭和を通じて近代詩開拓の第一人者であつた白秋が新體詩より大正末期詩壇まで簡をえて不偏道切に説述した「近代詩史」の古典的名著。新たに門下俊秀により嚴密な校訂・補註が附され愈々不朽の光彩を放つ。さらに明治詩書及詩史略年表、敍事詩・劇詩略年表、大正詩書及詩史略年表を附す。

萩原朔太郎

虚妄の正義

線115

萩原朔太郎は眞の詩人であつたがゆゑに思想家であり、文明批評家でもあつた。さうした詩人朔太郎に最も相應しい仕事は、これら「連のアフォリズム」であつた。一つの思想を様々な肉情の衣裳によつて直感に盛り上げようといふ意圖したと自負するこの作品は、近代日本詩壇に新しい展望を加へた道標と言はなければならぬ。

萩原朔太郎

戀愛名歌集

線355

「詩人にとつて、歌は美と藝術への恨めしき憤古である」と憧れる朔太郎の情操に向つて、傳統和歌は藝術的完美的位置にあり、音韻構造の秘密を匿ふ寶庫であつた。而も抒情詩最高の美は戀愛詩に於て極めらる。人間情緒の最も強い高熱である戀愛詩こそ抒情詩のエスプリであり、古典世界への此の詩人の郷愁もここをめぐつて愈々深い。

萩原朔太郎

絶望の逃走

線17

「虚妄の正義」と並んで詩人朔太郎の業績の一面を代表するもの。「月に吠える」以下の抒情詩に對するに、これらのアフォリズムを得て彼の詩のいとなみはじめて安定した。これはまた彼の日常生活の記録でもあり、この「白晝」の記録に、一代の詩人萩原朔太郎の素顔を見ることが出来る。

井口信夫

世々の歌びと

線140

記紀歌謡の起りから明治二〇年代の革新にいたる歴史を語りながら、歌の本質に觸れきはめて示唆的な批判を加へてあるこの書は、民俗學、藝能史的研究により國文學の秘奥を開き、自ら歌人としてユニークな作風をなした著者にしてはじめて書くを得た獨特の短歌史入門である。本書によつて歌の文學性が誰にも理解されるだらう。

飯田 蛇笏

現代俳句の批判と鑑賞

緑351

飯田 蛇笏

現代俳句の批判と鑑賞

緑352

日夏耿之介

明治大正の小説家

緑79

日夏耿之介

明治大正の詩人

緑206

土屋 文明

短歌入門

緑353

川端 康成

新文章讀本

緑316

現代俳句の鑑賞批評は多くの作家、批評家の手によつて行はれてゐるが明治・大正・昭和の三代を通じてつねに俳壇の最前線に馳騁して來た鬱然たる巨匠が、今日の中堅作家及び新進作家或は無名の一作一作を深切に論じた本書の如きは他に類を見ない。それだけに俳人以外の人々が眞に安心して讀み得るのも此の書を携いて他にない。

蛇笏の俳句道は全我的全力的な體當りによつて、芭蕉的な人間表現をめざす鎌竹の鍛錬道であつたが、その複雑で強烈な近代人としての個性は、大正・昭和の新體、蛇笏風の光芒を放つてゐる。「現代俳句の批判と鑑賞」の好評のあとをうけて展開されるこれらの批評と鑑賞を通して、さうした蛇笏の俳句道の本質が更に明確に把握出来る。自ら明治的存在人物と稱する著者にとつて、明治・大正・昭和の三代はまさしく血であり肉であり骨であり、屢々幻想であるところの心の古里である。この書で著者は明治のグラン・メユールとしてえらんだ隅外、露伴をはじめ、遠藤、紅葉、一葉、漱石、蘆花など文豪についての自由なノートを集めて、「夢なつかしむ回顧」としてゐる。

日本近代詩概見に筆を起し、藤村、晚翠、沱蘆、有明、敏、晶子、李太郎、啄木、白秋、光太郎、朝太郎、露風、春夫と明治大正の代表詩人のほとんど全部に觸れる本書は、手軽に書かれた「明治大正詩史」とも言へよう。しかもただ文獻の考證に走らず自らもまた明治大正の詩人たる著者の高邁な詩魂がいたるところに光輝を放つてゐる。

世に入門書の類は氾濫してゐるが、本書のやうに短歌の理論を實作に密接して結び付け、また和歌史的敘述にしても直接に現代の問題に觸れて手はどきしてゐる場合は少い。これらが生活即文學、つまり短歌とは生活そのものであるといふ著者の考へから出てゐることは明らかで、子規・左千夫に發するリアリズムの見事な達成と言へる。

「明日の正しい文章、生きてゐる、生命ある文章を考へることは、私たちに課せられた光榮ある宿命であらう」と覺悟する著者が、人と共に變り、時と共に移る文章の道について自ら心苦した體驗のなから、新しい文章の道を説いてゐる。これは著者の長い文章道の集大成であると同時に、「生命ある文章」へのノスタルジアである。

小林秀雄 Xへの手紙 他三篇 緑292	小林秀雄 ドストエフスキイの生活 緑362	小林秀雄 無常といふ事 緑361	小林秀雄 私の人生観 緑331	生島遼一 日本の小説 青89	通井勝一郎 人間教育 緑99
「様々な意匠」は處女評論として昭和四年「改造」に當選した作品であるが、當時の文壇の主流をなす諸傾向を分析し、その知的要素の不足や錯誤を突きながら、自らの信念を語ったもので、わが國の批評文學史にはじめて近代批評を確立した著者の發足點を示してゐる。他に「Xへの手紙」「新人Xへ」「私小説論」を併せて收めた。	近代人といふものに本格的に取組んで、その毒にあたる部分を徹底的に分析・解明したドストエフスキイに真正面からぶつかつて、自分自身の近代性の分析・解明に役立たせようとした小林秀雄が、一切の材料を自由に使ひながら既成概念や傳説を去つてドストエフスキイの生活を描き出した本書は、最高のドストエフスキイ入門である。	戦争中に「文學界」に發表され昭和二十一年一卷にまとめられた「無常といふ事」は、著者が戦争といふ暗黒な日々をいかに強い抵抗をもつて獨断的に生き、そしていかに歴史の必然に對峙したかの見事な證左である。今日すでに古典の域に入らうとしてゐるこれらの諸篇は、ある時代のすぐれた日本人が建設した見事な道標である。	つねに孤高の詩心を持して近代批評の確立のために闘つてきた著者が、講演風に説いた人生觀である。批評とは私心を去ることだと信念する著者は、みづからも感傷に走らず、硬に近い嚴肅さをもつて自己放棄の道に精進する。ここには見ることに考へることとが一如となつた達人の世界があり、達人にのみ現れるはげしい倫理がある。	西歐文學に造詣深い著者は、日本の小説を論ずるにあたつて、つねにヨーロッパの知性と感覺を念頭において省察する。源氏物語から西鶴、鶴外、漱石、獨歩、荷風、潤一郎、秋聲等、我が國の文學の歴史的發生、發展、消滅を西歐のそれとの對比において、深く内容にまでふれつつ解明したのが本書である。	著者が二〇代の後半期に自ら體驗した精神の危機と再生との記録である本書は、昭和の批評文學史における眞の意味での古典と呼んでよい。自らが理想とした社會改造への意志が左翼運動の崩壊といふ歴史的な事件の前でどのやうに動搖しどのやうな苦痛を負はなければならなかつたか、その信念更生の告白は著者の青春の記念碑である。

龜井勝一郎
わが精神の遍歴
緑356

著者が四〇歳のとき、幼少年時代をも含めて半生をかへりみ、戦争中の自己をも省察しつつ、いはば半生の總決算として書いたのがこの精神的自傳である。著者に筆を執ることを追つたのは敗戦がもたらした痛苦であつたが、ただ経験をそのままに書いたものではなく、その意味を省察しつつ書かれた著者の「時と眞實」である。

龜井勝一郎
愛の無常について
緑233

終戦後の若い人々が自らの人間形成の方途について、いかに迷ひ、いかに切實にそれを求めてゐるかを現實に觀た著者が、人間が人間になるための精神形成の基本コースを愛情をもつて、自己を素材としつつ説き示した人間研究の書である。「人間教育」「現代人の遍歴」と共に現代人のための人生論集である。

龜井勝一郎
現代作家論
緑279

「批評家の喜びとは自分の愛しうる作家に邂逅し、彼の成長が自分の成長でもあるやうな、その意味で運命をともしようといふ欲望である」と覺悟した著者が、眞に親愛する作家について折り折り書いてきたノート、覺書、印象記を集めたのが、この書物であるが、そこに流れてゐるものはこれらの作家との邂逅の喜びにはかならない。

龜井勝一郎
智識人の肖像
緑354

現代人の研究といふ永続的なテーマと取組んで独自の批評活動をつづける著者が、明治・大正・昭和の代表的小説に現れた人間像を探求しながら、近代ヨーロッパの洗禮を受けた日本人の知的運命を洞察したユニークな評論に、戦後社會に對する大膽な文明批評を試みた「現代日本についての考察」を併せた書物である。

古谷綱武
宮澤賢治
緑74

詩人であり科學者であり佛教信者であり、それらが何ら矛盾することなく住んでゐた偉大な精神。その詩と童話に不朽の仕事を残した賢治の、一點に收斂し宇宙に擴散しつつ深化して行つた精神形成を、著者は深い愛と情熱を傾けて、その生涯と作品の中になどつた。これは賢治研究の書であるに止まらず、一詩魂の見事な造型でもある。

花田清輝
復興期の精神
緑58

本書は轉形期にいかにか生きるかを主題として戦争下に書きつづけられてゐた。もはやいきることも死ぬことも不可能な状況にまで追ひつめられたわが國の知識人の姿が花田清輝であつた。自己放棄欲にまで人々を驅りなつた戦争から脱出しようとする抵抗精神である。それは、最も人間的なスタイルとして、論理のお伽噺の形をとられた。

中村 光夫 二十世紀の小説 々々 緑134	山本 健吉 私小説作家論 々々 緑154	野由 宇太郎 新東京文學散步 増補訂正版 々々々 緑135	野田 宇太郎 新東京文學散步 續篇 々々々 緑191	福田 恆存 作家論 全三冊 各々々 緑119-121
本書において著者は實證的方法の安定感を與へながら自己の意見を見事に結實させてゐる。とくに笑ひの喪失が理解への怖れ、劣等感から生れること、何らかの絶対權威に屈服する日本的弱さによるものであることなどは、近代の日本文學を實的に理解するのに最も重要な手がかりを與へてあらう。ここには日本への正しい反省がある。	サント・ブウヴから公正と謙遜の美德を學んだ著者が、自己を没却して自ら選んだ對象に近づかうとしたのがこの處女評論集である。いはゆる私小説作家を選びながら、著者は近代日本文學における自己ととも名付くべきものを描き出したのである。個個の作家の肖像を描くといふ目的は、更に倫理から宗教へと飛昇してゐる。	「古典とは背に運つた未來である」といふ宇太郎の言葉に導かれて、考古家の足と頭と、詩人の目と胸とを具有する著者は、何人も手を染めなかつた「足て書く近代文學史」の遍歴を始めた。失はれ行く明治大正の文學の跡は探索され、織田一磨の插繪は、ありし時代の空闊氣とそこに靜動する作家の息吹きを、見事に再現させてゐる。	「新東京文學散步」以後に書かれた新稿と補遺とを併せて一卷としたのが本書である。「雨の日も風の日も雪の日も」歩きつづけたと著者はいふが、その足跡は御茶の水、神田、九段をはじめ、東京のすみずみにまで及び、さらに千住に隅外ゆかりのあとを訪ひ、葛飾に白秋の面影を偲び、その足を獨歩生誕の地練子にまでものばしてゐる。	評論に創作に翻譯に戦後多方面にわたつて活躍してきた著者が明治以降現代に至る作家のさまざまなポーズを、近代社會における個人と社會、藝術と生活の主題をめぐる論じたユニークな作家論で、三冊に収められた本書は内容の豊富さと相俟つて文學愛好家のよき伴侶となるであらう。

〔詩・歌・俳句〕

上田 敏 海潮音・牧羊神 ◆ ◆ 緑118	野田宇太郎編 蒲原有明詩集 ◆ ◆ 緑203	小牧健夫解説 河井醉茗詩集 ◆ ◆ 緑209	斎藤三郎編 石川啄木詩集 ◆ ◆ 緑164	藤原 定編 山村暮鳥詩集 ◆ ◆ 緑177
英・獨・佛・伊の異邦の詩を美しい日本語にうつしかへ、その韻律と色彩の薫りをたきこめて我が國の詩歌にかつてなき莊麗さをもたらした不朽の名著「海潮音」に、更に創作詩「牧羊神」を併せ、上田敏詩集に編まれた部分をも含めて完璧なものにした本書は、その流麗典雅な諧調をもつて今日なほ新しさを失はない。	「草わかば」獨弦哀歌において未來への初々しい豫感の花々を咲かせた此の詩人は、ロゼッタイ、のちにヴェルレーヌに象徵主義を學んで「春鳥集」をえ、これにより從來、主情的に過ぎた國語を主知的なものに變革し、「有明集」に到つて象徵詩の詩風を時代の至高に位置せしめた。言語藝術の髓として後代への影響は決定적である。	夙に「文庫」詩壇の師兄として、時には保薦役として明治の新體詩發展のために力を盡した醉茗は、自身また純情の詩人として、自然の有ても奇蹟と驚異と神秘とを巨細に體驗する處が多かつた。「無弦弓」「塔影」「霧」「醉茗詩集」以下此の詩人の全業績は、自由に時世と移つてゆく聰明と無停滯とによつて人を容易に飽かしめない。	詩こそ少年啄木の全性格を占めるものであつた。早熟にして、模倣の才に長じ、且つ生活に苦しみ通したアンビシヤスな若者の企てである「あこがれ」の價值が、おのづから文學史に地歩を築いて譲らぬ所以は何か。やがてリアリズムに移行し、口語を用ゐ、短歌に専念するに到るが、空想文學としての彼の詩は殆ど完成されてゐたのだ。	デカダンスの横みと絶対者の斬りを發想とする初期詩風から、白樺的ヒューメンを平明健康な中期の詩風。更に自然肯定の世界に遊んだ東洋的枯淡の晩年詩風がひらけた。ヒューメンを肯定の喜びと、言ひやうのない寂しさをたたへた作品は、彷徨をつづけた數奇な彼の運命と同じく、近代の悩みを悩み、多くの遍歴を物語つてゐる。

高村光太郎 道程 復元版 緑53	類唐思潮全盛のさなかにヨーロッパより歸つて、此の詩人本来の理想主義的性格は、白樺派との接觸、智恵子夫人との戀愛を通じて新しい倫理の追及を果たし、平明にして自由な用語の裡におのづから迫力ある生命感を横溢せしめた。本書は日本近代詩史上最大の收穫である。「道程」初版（大正三十年十月、抒情詩社刊）を完全に複製した。
龜井勝一郎編 武者小路實篤詩集 緑224	作者二五歳から最近にいたるまでの詩中精選された代表詩集である。明治以來の詩の潮流の中ではとびぬけてユニークなもので、小説や戯曲と同じく武者小路文學の獨自性をそのまゝ端的にあらはしてゐて音楽と同じく感動に身を委ねるべき詩である。一作家、一思想家の自敘傳として生成と圓熟のすがたがうかがはれる。
村野四郎解説 金子光晴詩集 緑364	「こがね蟲」を起點に「蛟」を経て今日に到る道程を、象徴的耽美主義から唯物論的現實主義へ激しく振幅しつつ歩んだ現代詩のピークは、鬱屈した反逆精神に支へられて人間存在の本質追求に一貫した。自我のクサビを現實へ打込み、その龜裂から人世の深淵を覗かせる世界は、圓熟した口語自由詩型による一種の鬼氣の美學をなした。
萩原朔太郎解説 宮崎稔編 大手拓次詩集 緑200	犀星、朔太郎と並び「白秋旗下の三羽鴉」と稱せらるるも、生前は殆んど無名。佛詩にのみ沈潜し詩壇とは没交渉だった生涯を通じて、彼は彼の存在すら忘れた一女性を戀ふ情感濃やかな官能の詩を賦きず緩つた。當時流行の類型的自由詩とも傳統の文章語詩形とも異なるユニークな詩風は、純愛と情欲の不思議な滴をなして、今尚清新である。
土方定一解説 草野心平詩集 緑32	約けつくやうな惨忍な運命のもと、烈しい飢渴に慣える「蛙」たちも、つひには無眠の寂寥に身を潜めるであらう。これは直ちに人生的理念を象徵する。夙にアナーキストとして出發した此の詩人は、それらしい漠然とした叛逆性と、庶民生活への没入を経たのち「絶景」「富士山」以下のゆるぎなき美の表現にまで高翔してゐる。
查井繁治解説 中野重治詩集	室生犀星の影響下に堀辰雄らの「鷺島」グループから出發した詩人は、犀星の「愛の詩集」のナイーブな感情と鋭い官能が歌ひあげた抒情的詩世界の中へ「野性」と「反逆性」の詩精神を導入した。それは「赤まゝの花」や「女の髪を匂ひ」に託し、昭和一〇年前後の社會現實の矛盾を鋭く批判した。本書は決定版「中野重治詩集」である。

津村秀夫解説

津村信夫詩集

❖

緑124

津村光博解説
櫻井勝美解説

北川冬彦詩集

❖

緑284

中村眞一郎編

立原道造詩集

❖

緑141

歴程同人編
草野心平解説

現代詩集

❖

緑133

吉井勇解説

啄木歌集

❖

緑11

大橋松平編

若山牧水歌集

❖

緑165

信州の風物を愛して、山深い土地に、人の世の愛と悲しみを見た此の詩人の清純にして美しい抒情は、おのづから民話に似た世界を構成していった。そこでは、常に清潔なるジャケツをまとへる少女が跳ね、オルゴールが歌ひ、婚禮の夜の大燭燭の光がゆれ、さうして詩人の思念は生活の複雑さを洗ひ清めてゆくのであった。

昭和初期、新散文詩運動を推進した此の詩人の形式革命が極限に立つて自覚したことは、革命の藝術への轉身であつた。「戦争」に於て見られる帝國主義に對する痛烈な呪詛は、理念的には激しい社會性をもつ現實意識として把握されるに至つた。今やネオ・レアリスムの旗幟のもと、詩人の批判精神は敘事詩的手法さへ驅使してやまぬ。

「四季」に據つた立原は、堀辰雄の系譜に繋り、西歐の近代精神と古い王朝のリリシズムを融合させ、清新典雅、透明で夢のやうに甘美な純粹さを以てしづかに愛とおそれの歌を奏でた。その天折するや、影響の浸透する恰も雨水の熱沙に注ぐが如く、美しき午前に断切れたその歌聲は、既に新しき古典として不滅の青春を生きてゐる。

昭和詩壇の中心は、「四季」「歴程」にあつた。高村光太郎、尾崎喜八、宮澤賢治、中原中也等世代と傾向を異にする大家・中堅・新人を折混せた歴程同人が、おのがじし流轉する世界の靜止せる一點に立つて奏で上げた獨白の詩華集は、和音と不協和音の美しく交響する得難い交感の場をなしてゐる。歴程小史と同人略歴を附す。

畢竟、短歌は「悲しき玩具」に過ぎぬであらうが、新詩社的個の自覺から自然主義をへてやがて社會主義的認識にまで到着していつた啄木の勇氣と良心は時代の先驅としてつねに香はしく匂ふに違ひない。が一方、解説者吉井勇が嘆ずるやうに「純然たる日本固有の浪漫的情緒」として、この三行書き口語短歌も永く愛されねばならぬのだ。

孤獨を愛し、孤獨に悲しんだ心は、おのづから旅を愛し人を戀して「海の聲」「獨り歌へる」以下の哀愁平明の作風となつて、みづみづしい抒情がひとを醉はせた。「死か藝術か」に及んで自我意識の苦惱が破調となつて表はれたが、「朝の歌」以後再び歌風は沈潜し、自然に流露する朗詠調は溫雅清澄、眞に詩歌の至境を究めた。

宮 持二解説 佐藤佐太郎歌集 緑179	久保田正文解説 木俣 修歌集 緑201	釋 道空解説 宮 柊二歌集 緑193	山本健吉編 飯・田蛇笏句集 緑137	加倉井秋を編 富安風生句集 緑173	石田波郷編 水原秋櫻子句集 緑68
茂吉門下の逸足として「寫生」の實踐を、おのが天稟の裡に只管掘り下げてゆく此の歌人の業績は、時代並びに生活環境への沈潜を俟つて、昭和短歌史におのづから新風と緊張とを鼓吹した。韻律の完備、技法の緻密は日常の此事をもよく深奥なる内體驗と化しめ、吟嘆は「輕風」「歩道」「しろたへ」「歸潮」をへて一切眞實に切迫する。	清新な感覺によつて青春を嘆じた「みちのく」に始まり、次第に人間性の探求といふ方向に轉じてゆく此の歌人の營爲は、「高志」「運天運墓」「流砂」をへて戦後、つひに「冬曆」となつて社會的・歴史的表象の把握に激しくヒューマニズムの熱情を焚くに到る。白秋の師風に隨順しつつ歌人の意志は自らを顧つて現實との對決に赴いた。	詩が原初的に、生きることの不幸さに對する目覺めであり澄してあるといふ意味に於て、「宮柊二」の作品ほど天地人の心に深く合體するものはない。「群鶴」「山西省」「小紺珠」「晩夏」を通じて歌人が、寂しい個の生活の底に纏て人間共有の寂けさを生育させてゆく動しみの里程を、ひとはこよなき解説者釋道空と共に歎息するであらう。	その氣魄にみちた格調の雄勁にして莊重、その個性の強烈にして濃厚、世に蛇笏調として大正・昭和の俳諧史上に獨歩する俳人の「山蘆集」「靈芝」より最近作に到る佳句の集成である。持續の精進は田園詩人・土の詩人としての完成を著々と得しめ、山間に貧農、樵人、炭賣、隱亡を把へて泣き笑ひの人生を表現する巨匠の句境は大らかだ。	一俳人とし、否一日本人として、一木一草に對する愛情の眼が、厳しい寫生の鍛錬により研ぎ澄まされつつ、次第に人情の機微に、美の彷徨に、つひに輕快洒脱な風雅の境に心の句を刻み續ける。大正の初めより昭和の今に至る三十數年の風生俳句の歩みは、靜かな人生凝視の昇華にはかならない。	詩人秋櫻子が幼時より育て上げてきた憧憬的なイメージは、そのまま美の幻想を描いて「萬籟」に於ける見事な開花を見た。完全なものの、純粹なものへの藝術家本來の希求が導き出す風景は、やがて大和の古寺に清明の氣品をそへてあらう。時世の移り、の底に孤獨の悲愁を沈ませる「重陽」「霜林」への道程に、巨匠の結實が刻まれてゐる。

安住 教解説

久保田万太郎句集

々々

緑305

西東三鬼編

山口 誓子句集

々々

緑149

安住 教編

日野草城句集

々々

緑176

山本健吉解説

中村草田男句集

々々

緑151

山本健吉解説

加藤 楸邨句集

々々

緑150

山本健吉解説

石田 波郷句集

々々

緑138

みづから餘技と稱する此の戯曲作家・小説家の俳句が何故につねに清新であり美しいのか。夫はれゆく東京の、下町の浅草の、懐古的情趣と夢を織り出す所謂万太郎調の空疎美の秘密は何か。フィクション・ネルを創造世界に對極して、俳句こそ彼の私小説として實生活の息吹に觸れる島なのだ。近作のおのづから高き心境に即く所以である。

既に若年にして四S時代を擔つた誓子の句業は、革新の氣に満ちた特異のものであつた。連作形式によつて新しい現實を新しい視覚で把握する「凍港」の世界は、俳句の可能性を大いに鼓舞した。「激浪」「遠星」に及んで感情の深さを強め、平淡に嚮つて新しい古典を豫知した。今や根源俳句の探求を目指して、作品は深化の一途にある。

傳統否定と無季俳句の確立を唱へた所謂新興俳句運動に、草城は將としてその先頭に立つた。青春の情熱を奔放に詠ひあげた「花水」から「昨日の花」「轉轍手」における大膽な表現、新分野の開拓に到るまで、要するに標榜するところは新精神と自由主義にあつた。彈壓時代をへて戦後再び俳壇に復歸、日々の心境を詠つて淡々。

客觀世界の混沌さ、非合理さを、恰かも「長子」の責務の如く身に引受けた詩人が、最後に絶對絶命の自己表現の道として見出したものこそ俳句であつたのだ。童心の持續は直ちに汎神論的世界觀を意味するが、事實、彼は凡ゆる存在物に寓意を見た。この二重層をなす表現世界に「火の鳥」「萬緑」「來し方行方」の生命力の讃歌が在る。

「寒市」において素朴純情、やや感傷的な田園詩人として出發した楸邨が、その特質である庶民の傾向を一層内面に沈潜せしむるとき、孤獨の寂寥に行き着いたのは當然であるが、「沙漠の鶴」は中國の庶民生活の悠久につながる悲しみに觸れたのだ。つひに「野哭」に到つて人間惡・社會惡に對決し、善意に出づる感動の振幅は巨大だ。

ある時は市井に混濁して「鶴の眼」を描き、ある時は芭蕉晩年における詠歌に想ひを馳せて「風切」の古調に泣き、あるは兵衣を纏つて「病雁」と嘆き、焦土に立つて「雨夜」に慟哭、あるは胸形變ずる「惜命」の語を奏する詩人のたましひに導かれて、人は俳句の定型の中に不思議な國を見る時のやうな興奮を必ず味はふてあらう。

外 國 文 學

〔フランス〕

水谷 謙三 譯
狐 物 語
フランス中世古典
赤231

「アーサー王物語」「善教物語」と共に中世三大物語の一。人間社會を動物社會に見立てた當時の社會の縮圖であり、その風刺や思想は現代世相にもある問題である。古代の寓話や東方諸國に語り傳へられた説話の影響を受けてゐて、現在アイヌに傳承されてゐる説話と共通するものがあるのは、説話傳播の問題を提出してゐる。

モリエール 譯
町入貴族・強制結婚
赤171

フランス十七世紀は信仰の世紀といはれるが、民衆を歸一せしめたカトリックは中央集權と結び、ルイ十四世下に古典主義文化を生んだのであつた。「スカパンの悪だくみ」と並ぶ此の二つの戯曲は、宗教と權力、形式と理想との結合の當然の歸結として、民衆の反抗精神の代辯者として、道化の假面を被つたファルスとなつて現れた。

アベ・ブレイヴ オ
勝見 勝 譯
マノン・レスコオ
赤6

一生淫慾をしつづけて一週間も貞節でゐられない女。その女ゆゑに幾多の犯罪を犯してまでも愛情を求めつづけて行く男。「あゝマノン！ お前が生きてゐたら私だつてどんなに愛した事だらう」といふ嘆息は、熱い血潮に彩られた愛情の盲目性の自然と眞實に對する讚美であり、シイドが世界十大小説の一つに選んだ理由でもある。

原 亨 吉 譯
宇佐見英治 譯
スタン
ダール 戀 愛 論 全二冊
上々々 下々々
赤19-20

「戀愛は私の一生にとつて唯一の出來事であつた」とスタンダールは告白する。親友メリメは「彼はいつも戀をしてゐるか、また戀をしてゐるつもりだつた」と云ふ。生涯人間の魂から魂へと放浪し、戀の獵人であると共に、戀を愛した作者が、その一生の主導者であつた「愛」の思想を整理し、體驗をまとめたのが「戀愛論」である。

スタンダール
大久保和郎譯

と

黒 全三冊
上・中・下

赤99—101

スタンダール
小林正譯

カストロの尼 他一篇

赤140

スタンダール
秋山晴夫譯

パルムの僧院 二冊

赤3—4

スタンダール
河内清譯

改譯 谷間の百合 全三冊

赤23—24

スタンダール
小西茂也譯

ゴリオ爺さん 全三冊

赤103—104

スタンダール
堀口大學譯

天上の花・シャベエル大佐

赤105

軍服と法衣に、愛を金に換へた主人公の周到な野望がその緻密さの故に破れて行く姿の中にスタンダールは自己の内生活を投入し、同時に空白の世相を生きる若い世代の梗塞と葛藤に表現を與へた。完璧な構成、微妙な心理の蓄積、「結晶作用」にも比すべき見事な轉位で結ばれた本書はかくして本格的ロマンを近代小説史上に樹立した。

人間觀察、現實凝視の鋭利の底で、スタンダールが追求したのは情熱とエネルギーであつた。「カストロの尼」に示された山賊青年隊長と美貌の女子修道院長との悲戀物語においても、自分の父親に凌辱された少女が、これを謀殺するといふ露骨な「チエンチ一族」でも、その新鮮な野性的魅力が時代を隔てた人々に語りかける。

五六といふ齡を重ね人生の黄昏の到来を自覺したスタンダールが過去の一切を、生涯の精神的、智的パノラマを懸命に掘へようとして產出したのが本書である。波瀾を極める王侯貴族の姿、僧院・戦争・戀愛の生活は彼が書て實現した、或ひは實現出来なかつた魂の祕史であり、情熱と意志に裏付けられた智的で意欲的對人生態度であつた。

本書は大革命とその後の動亂を背景に、主人公フェリックスの告白の形で進められた彼の年上の夫人に對する純愛と、夫人の妻として母としての義務感と愛欲の相剋を描いた美しい物語である。アラランが推奨し愛好したといはれる此のロマンは高い愛情の調べと、苛酷な人の世の掟を描きつつ、讀者の胸に烈しく迫る。

性格小説と風俗小説の融和と混淆こそ「人間喜劇」の基調をなすものに他ならない。本書において描破されてゐるものは巨大なパリの全景であり、當時の風俗誌であると共に人物再現の手法によつて「人間喜劇」の各小説の中に再現される強烈な個性を持つた幾多の人間像である。かくしてダイメンションある世界像は幕を開けたと言へよう。

私生活内狀の犀利な剔抉はバルザックの最も得意としたところであつた。と同時に彼の現實描寫は描寫以上の世界を描き、人間情熱の昇華といふパトスを感じさせてゐる彼の小説のもつ魔術である。それが「シャベエル大佐」を最も如實な最も魅力に富んだ傑作としてゐるばかりでなく、「天上の花」を貫く強い社會道徳と結び付いてゐる。

セ ラ フ イ タ 赤229	從 兄 ポ ン ス 赤277-278	川 揉 み 女 赤211-212	湖 畔 の 愛 赤288	魔 沼 赤170	愛 妖 精
兩性具有の觀念は早くから神話に現れてゐる。兩性を具有する本書の主人公に對するバルザックの神秘性は「男女の性質が漸次融合して、肉欲を離れた兩性具有の裡に實現される」戀、即ち「天使のやうな戀愛」を描く事によつて神との合一を願ふ。本書がバルザックの「神曲」とも、又「ファウスト」とも見られる因はそこにある。	好人物のボンスは古美術・骨董を蒐集し、孤獨な生活の慰めとしてゐる。この物質を惡智恵で掠奪せんとつけねらう貪慾で邪惡な人間共は、彼を慘酷にいじめぬいて、憐れな死に至らしめる。物慾がどれ程強く人間の心を支配してゐるか、作者は冷酷な筆致を以て描きながらも、讀者に暖い涙を誘ふ。「從妹ベット」と並び稱される傑作。	「ビエレット」「トゥールの司祭」等と鼎立する本書は「人間喜劇」の裡の「田舎生活場景」に屬すもので、因循固陋な田舎生活が、獨身者の偏狹、片意地、煩悩に作用してゐるあり方を捉へ、歪んだ情熱、煩悩の囚人達の不可避的行動のエゴイズムを礼彈する事によつて、金と遺傳の二方面からの人間形成を一つの社會史として描出する。	その人の死が愛とボエジの眞實を體得せしめたといふシャルル夫人の思ひ出に生きたつづけたのが浪漫派の巨匠ラマルチエヌであつた。その思ひ出が「瞑想詩集」となり、散文形式としては本書を生んだ。アルプス山中に繰り繰げられる戀の生活、歡喜と絶望との記録は「ヴェルナル」にも比す芳菲な抒情の世界を見事に描出してゐる。	幼年時代、少女時代からはぐくんで來たベリの大母が、理知と情熱の嵐に耐へた一本の風樹に秘かに己れの鼓動を傳へ、やがてその根が深くなるにつれて見事な花を咲かせた。「魔が沼」がその一つである。身も心も疲れた彼女は立籠める土俵と夢想の霧の中で、故郷への思慕の情を一連の田園小説といふ傑作の中に託したのである。	「私は戀愛を、美しい感情と美しい思想とによつて私共を高めて呉れる氣高い情熱であると思つてゐます」と作者は言ふ。サンドウ、ミユッセ、ショパンと歩きながら、つひに報いられたなかつた愛の運歴の傷跡を愛撫しつつ、昔日への感情の幻が、本書の健康な野性的美女ファアットに、知性の苦惱と、愛情の神秘とを興へた。

長塚隆二譯 葉子のフランソワ 赤194	宇佐見英治譯 彼女と彼女 赤279	栗原美佐子譯 世紀兒の告白 赤89—90	中村眞一郎譯 曉の女王と精靈の王の物語 赤119	加茂儀一譯 ルネツサンズ 赤270—271	渡邊一夫譯 青春の回想 赤96
拾はれた妻が養母に對して抱く思慕の情が成長するにつれて、次第に戀愛感情に變化して行く経緯を描くこの小説は、その非現實的、非倫理的な主題にも拘らず清楚な詩神の肌を感ぜしめる。作者が思慕、戀愛、愛慕の果てに至り着いた母性の愛情は「魔が沼」(愛の妖精)をへて、三天田園小説の最後の作に、その實を結んだのであつた。	「戀は本質的に一なる絶対者への上り坂にあるが、愛は反對に多なる相對者への降り坂にある」と言ふ。「彼女と彼」とは畢竟愛する事に存在意義を見出してゐたサントと戀を戀する十字架を背負つてゐたミユッセとの異邦の戀であり、浪漫の世代を生きた此の二人の天才の苦悶する魂の織成す強烈な悲愴への抒情であり挽歌である。	革命と帝國戰爭後の薄明時代を生きた天才詩人ミユッセは不信を唱へ放蕩を事としつつ、同時に自らを贖罪の質となさねばならなかつた。彼が戀に救ひを求めた時、過去の惡習がそれを妨げ且つ愛人の背信を招く。「彼女と彼」がサントの告白であるならば、本書はミユッセの愛と苦悩とに傷付いた魂が死に導かれて語つた告白であつた。	十九世紀前半の激しい時代の變轉は無数の浪漫派の藝術家を生んだ。思想と感覺との沸騰的な解放の中で、彼等が一樣に眺めてゐたのは、青白い中世紀の月であり、金屬的な熱帯の海であつた。作者の内部を流れた浪漫の血は現實への夢の氾濫を招き、シバの女王と傳道者ソロモンとの傳説を、近代の時間に再生せしめたのであつた。	烈しい情熱がリアリズム文學を呼び、崩壊と空白の中からロマンティズム文學が生まれ出るとするならば、文藝復興は進歩と傳統、科學と宗教の闘争に血塗られた時代の詩であつた。サヴォナローラからミケルアンジェロに至るその歴史を舞臺に展開した本書は、現代の人々の血の中に眠つてゐる魂の詩を呼び醒ますにはおかない。	フランス・ロマンティシズムは單なる文學上の現象ではない。フランス革命から自然に芽生えた文化運動、精神運動であり、新しい精神が表現を求め、道を拓かうとした脈動でもあつた。ロマン派の曉將の手になるこの青春詩はその歴史を描く得難い文獻であると共に、かうした壯快さと新銳の氣との絶好の絶ち難い愛慕の詩である。

江口清譯 二重の誤解 赤107	秋山晴夫譯 コロンバ 赤195	秋山晴夫譯 カメルン 赤149	ボードレール 村上菊一郎譯 全譯 惡の華 赤26	ボードレール 河上徹太郎譯 赤裸の心 赤95	ボードレール 小西茂也譯 若き魔術師 他一篇 赤198
エキゾチックな短篇作家として特異的存在を示すメリメは簡潔正確なリアリズム手法をもつて描く作家であるが、本書は彼のものとしてはユニークな作品で、ジイド以下現代作家の高く評價する心理小説である。二重の誤解とは、いはば女の側から見た精神の戀愛と、男の側から見た官能の戀愛との誤算から生じた悲劇を意味してゐる。	父の非業の死に遭つて愛を宿すべき清純な處女の胸に復讐の情熱を燃やすコルシカ娘コロンバは、大陸文化に押された兄の胸にコルシカ人の血を呼喚し、愛と情、文明と野性の抗爭を孕む復讐綺譚を繰りなして行く。構成の巧、文體の簡、郷土色豊かな作風は「カメルン」と共にメリメ第一の傑作と言へよう。	情熱のスペインを舞臺に、奔放なジプシー女カメルンの野性と、バスク男のドン・ホセの純情とが描き出す宿命的戀愛物語は、歌劇、映畫に取りあげられて廣く世界に知られてゐる。數多いメリメの作品中、最も有名であり、最も藝術的香り高い傑作で、血を見ねば止まない野性の戀は、妖艶な中に烈しい魂の息吹きを感じさせる。	後期ロマン派に屬し、高踏派の詩の氾濫の唯中に脚光を浴びた「惡の華」はユゴーが「新しい戰慄」と呼んで脱帽したものを持壇に齎した革命的詩集であつた。映像、音調によつて魂のある狀態を暗示する事を詩の生命と考へる文學理念は、高踏派と完全に袂を別つものであり、それは象徵詩を生み顧唐派の詩人達を誘つて行くのである。	本書はボードレールが自分の爲に書いた手記、あるひは日記で、彼の思想の核心を語つたものであり、彼を理解する上に不可欠の書である。近代詩の祖となつた「惡の華」や「巴里の憂鬱」等に見事に開花した著者の思想・詩精神のエッセンスがここに壓縮され、なまなましい裸身を現してゐる。赤裸の心とはその裸身に他ならない。	「ボンベイの古羊紙からの判讀」といふ形式をかりた「若き魔術師」は、古代魔畫を前にして美術批評家ボードレールの内部に潜んでゐた想像の翼が生み出す、美しい幻想の詩であつた。軍人と官殿の奥深く生きる巫女との神祕と妖怪に包まれたローマ宿命的戀として、ボードレールはギリシャ神話を背景に物語は魔畫に言葉を加へた。

佐藤正彰
中島健蔵
ボードレール

藝術論

論

赤250

金子光晴

ランボオ詩集

詩集

赤55

組川 幸郎

ランボオの手紙

手紙

赤82

秋山澄夫

マラルメ詩集

詩集

赤219

山内義雄

フランスマ詩集

詩集

赤163

山内義雄

山内義雄譯詩集

詩集

赤345

古典的なものに對立するものとしてのボードレールは彼自身の中に一人の批評家を擁してゐた。美的審判者としての彼は事實最上級の批評家であつた。ワグナー不評の唯中に書いたワグナー論は第二帝政期におけるブルジョワの卑俗への反抗であつた。ユゴー論、ドラクロワ論は此の卑俗への一生を略した挑戦の産物に他ならなかつた。

現代詩はランボオの輪廻で生き返つたと言つてよい。パリ・コンミュニンの時代を生きた天才少年のイマジナシオンが現代の世界人にとつても少しも古くなつてゐない事は奇蹟に近い。第一詩集、イリュミナシオンを含む本詩集は、描きやうもないものを好んで描き、剌戟に永遠を與へた彼の全貌を示す事に依つてその奇蹟に答へてゐる。

地獄の季節破毀説の真相。アラビアへの逃亡、ブラッセル事件等を中心に展開するランボオの書簡は、ヴェルレーヌとの不倫關係によつて廣く注目を浴びた彼の生活をなまなましく露呈してゐる。と同時に、その苦惱苦悶を通して語る文學思想はこの手紙を單なる書簡集にとどめる事なく、すぐれた一個の文學作品となしてゐる。

象徵主義の完成者としてその作品を寶物視されるマラルメは寧ろ逸早く象徵主義を捨てて絶對詩のイデアに到達、現代藝術の指導原理たる物その物の思想を提出した點に重大さがある。譯者多年の研鑽による解釋に基き、邦語可能な極限において從來とされてゐた難解の作品を剩すことなく紹介する。「莊の試み」「初期の作品」を附す。

十九世紀初頭のロマンティズムより象徵派に至る近代フランス詩人の主流を網羅し、作品選擇に當つては名譯として許され得るもののみを集め、現代日本語に與へた影響の大きいボードレール以後の詩人に多くの頁を割いた。編者は斯界における一人者であり、又「海潮音」「珊瑚集」等現在では稀覯書から多くの名詩を收録してゐる。

すぐれた譯業でその存在を知られる譯者が、過去三十年にわたつて、その折り折り、無數のフランス詩の中を輕輕く散策した所産がこの譯詩集である。收録した詩人はマラルメ以下三十人、譯者の深く愛する詩篇だけを選んでゐることが、世の譯詩集を超えた独自の芬蘭氣をなし、そこに本書の生命がある。

土居寛之師 アミエルの日記 全一册 各々々々 赤34-35	アニー・マ・ペール 石川登志夫譯 鐵假面 全一册 上々々々 赤332-333	アニー・マ・フリス 權守操一譯 椿姫 全一册 上々々々 赤109	アニー・マ・フリス 鈴木力衛譯 戀の火あそび 他一册 上々々々 赤236	ユクトル・マロ 鈴木三重吉譯 家なき兒 全一册 各々々々 赤313-315	ウレニエ・メシエ 小林龍雄譯 さまよえるユダヤ人 全一册 上々々々 下々々々 赤93-94
哲人、詩人、批評家であつた著者の日記は、既に世界日本文學中の古典となつてゐる。深い思索と繊細な感受性との綜合されたこの日記には、十九世紀の後半を生きた彼の所謂、世紀末的心理の典型がみられ、孤獨な魂が神と永遠と絶對の前に立つて戦慄し、悩み、思考した跡が滲み出てゐる。五十頁のシュレルの序文は一層の理解を助く。	フランス・ロマンティズムは歴史的「地方色」の再現を重要なプログラムの一つにかけた。かうして小説の分野には数々の歴史小説が生れた。中でも、ルイ十四世時代を中心に、世に名高いフランス王室秘話を描いた本書は「モンテクリスト伯」「三銃士」と並んで、雄大な構想、千變萬化のプロットをもつて無類と稱される名作である。	薄幸な一佳人と純情な青年との悲戀を描いた「椿姫」こそ戀愛小説の典型として、總ての人々の胸を衝つたものがある。豊かな天分と青春の情熱を傾けて、甘美な浪漫的戀愛と情熱を描きながらも、作者は當時の社會の因襲を鋭く衝き、藝術小説の高貴な氣品と大衆小説の普遍的興味を兼ね備へて、その名を不朽にせしめたのである。	「椿姫」についてアニー・マ二五歳の時書かれた作品で、前者とともに小説家アニー・マの代表作である。これ以後のアニー・マは劇作に筆を轉ずるが、この作品にもすでにさうした演劇性が見られ、さらに後年著しかつた社會批判の眼が現れてゐることは注目すべきである。本書は、晩年のコント「鳩の懸賞」を併せて收めてゐる。	藝人の子に賣られ放浪の旅をつづける一少年が、困苦と迫害を乗り越えて、清純な魂と優しい愛情とを育てつつ健気に生きて行く此の物語は、佛文壇最高名譽たるフランスマ・アカデミー大賞を受けたばかりでなく、ひろく全世界の人々に愛顧された不朽の名著である。麗截な譯文は本書を完全な日本語物語として再現してゐる。	十九世紀中半に起つた新しい文學發表形式であるロマン・フイットン（連載小説）は、波瀾重疊の筋立てと劇的な息巻く描寫の多くの大衆小説を生んだ。新興デモクラシー精神によつて、當時のフランス國民の間に深く根を下したカトリック教の弊害を剔抉する意圖のもとに描かれた本書は新聞連載小説隆盛の口火を切つた傑作であつた。

フエラント・ラケル 山内義雄譯 美しき夕暮 赤325	フロベール 村上菊一郎譯 ボヴァリー夫人 全二册 上々々々 下々々 赤27-28	フロベール 神部孝譯 サラ・ポオ 全二册 各々々 赤262-263	フロベール 鈴木健郎譯 感情教育 全二册 各々々 赤227-228	フロベール 村上菊一郎譯 三つの物語 赤102	フロベール 櫻井成夫譯 狂人の手記・十一月 他一篇 各々 赤248
作者はフランス農民生活を極めて誠實に描き出す事に成功した作家として十九世紀小説史上にその名をとどめてゐる。本書は佛南部セヴェヌ山地の渾朴な農民生活を背景として少年少女の清純無垢な、そして極めて烈しい感情を描いた代表作で、作者の求めた魂の安息所は讀者を美しき夕暮に色彩られた若き日の古里へと誘ふ。	「ボヴァリー夫人は私だ」といふフロベールの言葉は別として、本篇はフロベールの代表作であり、フランス近代小説の傑作である。五年にわたる苦心の果てにフロベールはこの作品に生命を與へた。平凡な日常の中にその夢と情熱を閉ぢこめられたエンマの苦痛を通して、フロベールは世の俗物を痛罵して止まないのである。	近代社會から遠くかけはなれて素晴らしい主題の中で生きたいと希つたフロベールが古代カルタゴにおけるポエニ戰役後の傭兵たちの反亂とカルタゴの運命が懸る月の女神の被布を守る處女サラ・ポオの戀を精確多彩な文體で書いた歴史小説で寫實主義の名作「ボヴァリー夫人」に對してロマンティズム期の最大傑作と稱せられる。	二月革命より第二帝政に至る社會風俗、政治精神の繪卷たる本書は、地方女性の一典型を描いた「ボヴァリー夫人」と對稱的な位置を占めるが、科學的嚴密と藝術的完成を求めた、神無き宗教家が漂泊の末に辿着いた一境地でもあつた。チボーデは言ふ、「ボヴァリー夫人がフロベール自身であるならば、感情教育は彼の時代である」。	晩年の此の三つの短篇には作者の傑出せる事實が見事に綜合されてゐる。哀れな渾朴な女の生涯を描いた「素朴な心」には「ボヴァリー夫人」の心理描寫や寫實的な文體が現はれ、「ジュリアン聖人傳」には浪漫的な傳奇物語の筆致があり、ヨハネの死を東洋的色彩で描いた「ヘロデヤ」には歴史と大自然に對する嗜好が繰返されてゐる。	「狂人の手記」は一八三八年、作者一七歳、「十一月」は一八四二年、共に少青年期の精神的肉體的危险を赤裸々に語る「青春の書」で、若き日の作者を知る最も重要な資料であり、人妻への戀愛、結婚の大膽極まる官能の告白にすら一抹の詩情が流れてゐる。併載の「情熱と道徳」は「ボヴァリー夫人」の先驅的な試作と言へよう。

モーパーッサン 丸山熊雄譯 脂肪の塊り 他二篇 赤116	モーパーッサン 廣津和郎譯 女の生 赤255	モーパーッサン 杉捷夫譯 ピエールとジヤン 赤135	モーパーッサン 木村庄三郎譯 ペラ ミ 全一册 赤365—366	モーパーッサン 山口年臣譯 死よりも強し 赤18	モーパーッサン 杉捷夫譯 頸飾り 他十三篇 赤347
ゾラよりは遙かに残酷な世界を風俗小説と心理小説の二つの傳統の中に没し直した著者は、その意味でゾラよりは遙かに廣い世界を描いたとも言へる。本書がリアリズムの典型と看做される因はそこにあり、「人間に關係のあるすべての事が自分に無關係でなくなる」べく努力することからこれらの結婚文學は生れたのである。	人生への汚れない希望を抱いて修道院を出て来た少女は何を見たか。結婚初夜の幻滅に追ひかけて夫と小間使ひの、さらに他の夫人との醜聞、そしてすべてを息子にかけて生きつづけたジヤヌスは、そこでも又現實の手術い真切りに遣はねばならなかつた。これはモーパーッサンの厭世哲學を盛つた「女の歴史」なのである。	二人の兄弟の弟に突然遺産がこぼれこんで来るところから母運の過去の過失が暴露されるといふストーリーを通して、兄弟の苦惱反目を心理的に、そして如實に描いた傑作で、漱石もこの小説だけは名作なりと激賞してゐる。彼の長篇の中では一番よくまとまつたもので、冒頭の小説論と併せモーパーッサンの特色がうかがはれる。	作家として最も油ののりきつた時期の作であるこの小説は、ジュールジュ・デュロワといふ美青年が次から次へと女を利用して出世する話を書いたものであるが、戀の成功に酔ひしれて浮きうきしてゐるデュロワに對して語る老詩人ノルベル・ド・ヴァレヌの言葉の中には、すでに死の恐怖にをのくモーパーッサンの内心の告白が見られる。	初期の作品に見られたブルジョワ憎惡、傳統的道德に對する反抗、人間離絶等の冷酷な筆致を離れて、華やかな社交界の片隅に人知らず咲き埋れて行つた老實家ペルタンの戀に片寄せて、孤獨と老衰と死とに對する限りない恐怖をまともに解剖しながら、宿命的な、死の如く、死よりも強い愛を描いた作品である。	モーパーッサンはど人生の細かい皺を皮肉な眼で眺めた作家はゐない。彼はそれをささやかな短簡形式の中に見事に定着してみせる。彼の作品を支へるベシズムはデュエロフに似て、より暗澹たるが故に、彼の筆はより嘲笑的で嘲諷的である。「頸飾り」以下の十四篇は完璧の技巧を以て多様なモーパーッサンの世界へ讀者を引込んでゆく。

大西克和譯 嘆きのテレーズ (ヘレーズ・ラカン) 各々々々 赤199	山口年臣譯 ナ 全一冊 各々々々 赤16—17	大西克和譯 風車小屋だより 各々々々	八木さわ子譯 プチ・シヨーズ 全一冊 前々々 赤280—281	加藤達夫譯 アルルの女 赤110	組川幸譯 アルプスのタルタラン 各々々 赤344
いはゆる「實驗小説」を提唱し、大作「ルーゴン・マツカール叢書」によつてリアリズム文學の先驅をなしたゾラにとつても本書は重要な位置を占める。この小説で夫を密殺した森通者達の追ひつめられて行く姿を、その默的な肉慾から眼を反らすことなく、赤裸々に、極めて臨床醫學的に描寫し得て、ゾラは以後の進むべき道を發見した。	ゾラの膨大な「ルーゴン・マツカール叢書」の第九巻に當る「ナナ」は彼の代表作としても餘りに有名である。洗濯女と酒精中毒者を父母に持つ女優ナナの淫蕩な娼婦性は、何事もないゾラの筆によつて、ほとんど象徵にまで達し、その結末の見事さは、フロベールをして「ナナの死はミケランジェロ的です」とまで嘆ぜしめた。	「一番樂しかつた青春時代を、馬鹿げた高笑ひを、悔ゆる事のない陶醉を、再び會へぬ友の容貌風姿を」慕ひつつ、その印象と追憶の情を、古郷プロヴァンスのある風車の廻轉によつて感動的な言葉をもつて優美に物語つた此のコント集は、短篇作家としてのドーデの名を不朽ならしめたばかりでなく、彼の暖い詩情を感じしめる。	「水々しき少年時の思ひ出は、多くの作家にすぐれた物語を作らしめる」といふ。「プチ・シヨーズ」もドーデを育てた南佛ニームへの思ひ出にながつてゐる。地方色豊かな「風車小屋便り」で出發したドーデが風刺的な「タルタラン」物に移行する中間に書かれた本書は兩作の特色を併せ持つ代表作として多くの人に愛されてゐる。	「風車小屋便り」の中の一挿話をドーデが自ら敍曲化したもので、この作品によるビゼーの作曲は「カルメン」と並んで有名である。アルルに住む若き農夫の失戀と苦惱、彼を愛する母の切々たる眞情を描いて、まさに香り高い一篇を成し、ドーデの傑作の一つとされる。讀者は人間の心の美しさに感動せずには居られぬであらう。	タルタランはドーデが創造した十九世紀のドン・キホーテである。彼は善良で小心な癖に法螺吹きである。常に天外の空想で頭をいつばいにしてゐて、到る所で珍奇な失敗譚をまきちらす。本書は彼の「タルタラン物語」の一つで、アルプス登山を企てたタルタランの戲畫的な姿のなかに、ドーデの詩と風刺が豊かに凝く流れてゐる。

ド 桃井 京次 譯 サ フ オ ——巴里風儀—— 赤230	ド 櫻田 佐譯 川 船 物 語 赤311	ジャ ヴ エル 尾崎 喜八 譯 一 登山家の思ひ出 赤196	ビ エール・ロチ 村松 一郎・吉沢 清 譯 秋 の 日 本 赤275	アナ トール・フランス 岡 野 馨 譯 舞 姫 タ イ ス 赤187	アナ トール・フランス 長 塚 隆二 譯 青 鬚 の 七 人 の 妻 他三篇 赤238
舞臺はパリ、奔放な美女と純潔な若青年との偶然の出會ひから戀、同棲、さらに「フィナーレ」へと、二人の愛と苦惱を美しく抒情的に描いてゐるこの作品は、いかにも「風車小屋便り」の作家らしい匂ひに満ちて多くの若い心をとらへて來た。それは女主人公「サフォール」が椿姫よりもナナよりも平凡だが、女の息吹きを持つからである。	ドーデは誰からも愛し親しまれた作家である。それは詩人ドーデの心の暖かさを示してゐる。「川船物語」は、さうした彼が子供への愛と善良を傾けた、開朗期の作品。子供たちのための良い讀物を、といふ氣持がこの小篇に文學作品としての生命を與へ、子供を描いて比類ない筆の冴えを見せてゐる。	「アルプスの傳道者」と言はれたジャヴエルのこれらのすぐれた山の回想録は、そのまま山の詩である。彼のこの遺作は、山岳文學の中でも孤高の座を占める。アルプスの山々谷々を愛と喜びにみちて漂泊ひ歩いたジャヴエルの姿は、本書を通して鮮やかだ。悲しく澄んできらきらした文章は、山に融け込んだ彼の魂の燃焼である。	名作「お菊さん」と同時に書かれたロチの日本印象記。明治一八年といふ、現代の我が目の前にすら或る種の遠ひを感じさせる鹿鳴館時代の世相、風俗が、この外國作家の鋭い觀察眼によつて如實に描かれてゐる。芥川龍之介の小説に素材を與へたといふ本書によつて、我々はわがなつかしき明治開化期の風俗を味ひ、唸み直すことが出来る。	數多いフランスの作品の中でも最も人口に膾炙したもの。聖者パフェニスと踊り子タイスの交渉を描きながら、博學のフランスは古代アレキサンドリアの生活や、迫害を避けて沙漠をさすらふキリスト教徒の生活を生々と再現させてゐる。「舞姫タイス」にはまた様々の哲學的思想が盛られ、フランスの名文はそれらを巧みに語つてゐる。	古くからブルターニュに残る青鬚傳説に取材して、フランス獨特の皮肉な解釋を冴えた文體に載せた本篇は、彼の數多い歴史小説を代表するものである。他に「魔鏡」「赤い卵」「バルタザール」の三篇を収めてゐるが、これらを併せて、十九世紀の典型的な教養主義文人アナトール・フランスの博識な風采をうかがふに足りよう。

フランシス・ジヤム
市原 聖太郎

三人の乙女

赤108

當に得べくして人の世の幸福を得ず、満されぬ寂寥をひたすら神と自然の愛に誓して生きてゆく可憐な姿は「神聖なる苦惱」と呼ばれるに相応しい。「クララ・アレブワズ」以下この三つの物語を通じて終始聞えて来るものはかくの如き苦惱から生れた神と自然に對する憧憬であり、諸々の苦惱の中に清淨の泉を湧かしめる「祈りである」。

フランシス・ジヤム
安東 次男 譯

野うさぎ物語

赤310

象徵主義の晦澁と對象をなす、清純明晰なジヤムの詩型は、田園の風物を捉へ、素朴な人々を描き、大麥の穂の上に、古釣瓶のきしりの音に天使の群れ飛ぶ姿を寓し出した。本書に収録した散文詩・詩篇は比較的初期の作品で、自然・動物との水々しい共感が愛と神との運歴の中に歌ひ上げられ、その波紋は讀者の心に打ち寄せる。

アンドレ・ジイド
堀口 大學 譯

パリのウド

赤181

世間、道德、行爲等の諸現實が、いかに空虚であり、無意味であり、思はせざるやあるかを二七歳のジイドは諷刺をもつて描きながら、世間といふ此の現實の泥沼の水深を測定し、この水中における位置及び他人といふ他の岩礁との關係を見きはめようとした。パリュウドとは沈滞を聯想させる此の沼地に他ならない。

アンドレ・ジイド
堀口 大學 譯

地上の糧

赤207

處女作「アンドレ・ワルテルの手記」に示された肉情を制御する快美感、その夢を抱き續ける快美感は、本書においてはあらゆる感覚を全面的に享樂し、そこに異教的な美を見出した告白に變つてゐる。アルジュリヤに閉病生活を送つたジイドが自らの肉體を恢復せしめたと同様に、自らの生活態度の上にも大きな轉換を記したのであつた。

アンドレ・ジイド
淀野 隆三 譯

狹き門

赤346

「背徳者」と對蹠的な「狹き門」の天上の喜びの追求はジイドの創作生活を書く中心問題でもあつた。戀を犠牲にして靈的完成への努力と精進の道を辿るアリスの姿は深い感銘と共感を與へずにはおかないが、欲望と道德・宗教との對立に見事な表現を與へる事によつて、解決の道を示したジイド自身の苦惱の魂でもあつた。

アンドレ・ジイド
太田 俊太郎 譯

法王廳の拔穴

赤206

無神論者アンテムの改宗と破滅、法王救出を理由に詐欺を働く百足組のプロトス、それに翻弄されるサンプリ夫人等を中心に展開する複雑怪奇な事件は、「無償の行爲」を實行するラファカチオの理由なき殺人によつて事を告げる。行爲の無償性は行爲の絶對なる自由性に通ずるものであり、人間行動の奥底に横はる秘密を解く鍵でもあつた。

アンドレ・ジイド 今日出海譯 田園交響樂 赤180	アンドレ・ジイド 根津意三譯 一粒の麥もし死なずば 全三冊 各々々 赤232—233	アンドレ・ジイド 鈴木健郎譯 廣金つくり 全三冊 上々々 下々々 赤242—243	アンドレ・ジイド 鈴木健郎譯 廣金つくりの日記 々々 赤340	アンドレ・ジイド 堀口大學譯 女の學校・ロベール 々々 赤343	アンドレ・ジイド 秋山晴夫譯 地獄 々々々 赤295
「背徳者」「疾き門」「田園交響樂」に流れてゐるものは抒情的心理の展開であり、その本質は傳統への反逆に根ざされたジイド的ヒューマニズムである。雲深いスイスの片田舎を舞臺に、牧師と盲目の少女、牧師の妻と息子との四人の愛情の葛藤を中心にマタイ傳の「盲人もし盲人を導かば」の意圖を提出したのであつた。	精神的蛹蟲時代よりの成長の過程を赤裸々に告白してゐる此の自傳體小説はエグジビシオニズムを云々される程露出的であるが、そこには必ず血の滲むやうな精神と肉體の、神と惡魔の争闘が伴はれてゐる。本書を讀くものはまさに「藝術作品によつてしか救はれない複雑さはまる相矛盾した要素」の告白の眞摯性に他ならない。	十九世紀的なリアリズム小説に終止符を打つ事が二十世紀前半を生きた作家達の大きな命題であつた。實在した貨幣廣造事件に取材して、六年を費し、一九二五年に世に出た此の小説は、十九世紀リアリズム文學を批判した「小説批評の小説」であり、ロマネスクな要素だけで構成する事を企圖した「純粹小説」の試みてあつた。	ジイドが自ら唯一のロマンと銘打つた「廣金つくり」は彼學生の大作であつた。一九一九年七月より小説脱稿の翌日まで續けられた「廣金つくりの日記」はその創作ノートで、「廣金つくり」に附隨して讀むべき小説作法であるばかりでなく、それを解く鍵であり、又一般的な意味でのロマンといふ様式に關する批判・考察の集録でもある。	「女の學校」は、夢多い結婚時代から、幻滅の母としての二十年間にまたがる妻の日記の形式をかりて、清い愛と善良な意志にもかかはらず、結婚生活にはつねに幻滅の深淵が開かれてゐることを描き、「ロベール」はこの妻の日記に對する夫の抗議書として、社會人および家庭人としての夫の立場からなされた辯明の書である。	フランス左翼作家として聲名高いバルビュスの初期の代表作。下宿屋の壁の穴をのぞく主人公の眼前には人間の赤裸々な姿が展開する。それは愛慾であり、孤獨であり、人間の苦惱である。この一作で人間の外部のあらゆるものを否定したバルビュスには、必然的に後年のソシヤリズムへの傾倒が見えされる。人間の眞空を刺つた大作。

オー・ド・ウー マリーの仕事場 赤248	デュ・アメル 阿蘭陀組曲・北方の歌 赤249	レーモン・ラダイゲ 肉體の惡魔 赤188	レーモン・ラダイゲ ドルヂエル伯の舞踏會 赤189	フィリップ ピュビュ・ド・モンパルナツス 赤200	フラン・フルニエ モーヌの大將 赤201
正確で微細な觀察とそれを掩ふ作家の愛憐の深さとひろがり、これがオー・ド・ウーの作品に常に生命を與へてゐる。「孤兒マリー」がさうであるやうに、この作品も多分に自傳的要素を持ち、パリへ出て紡績女工となつたマリーと彼女をめぐる群像を、女らしいタッチで美しく描く。それは「涙ぐましい無限愛憐の世界」である。	デュ・アメル「ヨーロッパの惡魔地理學」にふくまれるこの二作は、彼獨特の清明な敏智と詩とが融合して、無類の散文詩的紀行文をなしてゐる。その示唆する詩と眞實の豊かさは早春の雨のやうに明るく人の心に滲み入つてくる。譯者であり、詩人、劇作家、小説家、批評家であるデュ・アメルのも最も純粹な面を本書は露呈してゐる。	「肉體の惡魔」はラダイゲが一七歳の時書かれた。二〇歳にして世を去つたこの作家は、第一次大戦中の混亂した社會で、人妻との眞剣な戀に生きる少年の心理を、驚くほど精緻に描いた。「肉體の惡魔」の持つ透徹した知性と心理解剖とは多くの人を魅了し去り、はやくも二十世紀心理小説の古典としての地歩を占めてゐる。	「この小説の中では、心理がロマネスクなのだ」とラダイゲは言つた。彼は「肉體の惡魔」で確立した手法を本篇でさらに、透徹して押し進めて行つた。灼爛たる社交界を背景にして描き出された人間心理のプリズムは一世を驚倒させた。ジャン・コクトーは彼を「日附のない本の年齢のない作者」として惜しみない賞讃を與へてゐる。	フィリップの作品中、最も多くの人に讀まれてゐる本篇は、パリの下町に生きる賣笑婦やゴロツキの救ひがたい生活を、暖かい愛情をこめて描いたもの。フィリップの處女作であるだけに、このささやかだが清澄な作家の特質を遺憾なく示してゐる。フィリップはこの一作で自己の道を發見したと言つてよい。	フランスの中央に位置するシェール縣は牧場と農園の多い美しい土地である。そして雨、雪、嵐と晴れた日と、四季の移り變りはここに住む少年たちの夢を育み、それはまた人生の現實と交錯する。美しい追憶の霧で包まれたこの小説は、今や「ロビンソン・クルーソー」「寶島」に並ぶ地位を占めようとしてゐる。フルニエの唯一の遺作。

ヴァイルドラック 高橋邦太郎譯 商船テナシチイ 赤191	ウジェーヌ・ダビ 岩田豊雄譯 北ホテ 赤190	ジャン・コクトー 東郷青児譯 怖るべき子供たち 赤220	ジャン・コクトー 堀口大學譯 阿片——或る解毒治療の日記—— ハ〇園 赤147	コレット 石川登志夫譯 青い麥 赤359	モーリヤック 秋山晴夫譯 火の河 赤225
映画「商船テナシチイ」は世界の多くの人を魅了したが、原作たるヴァイルドラックの戯曲もフランス現代劇の名作として輝かしい地位を占めてゐる。ヴァイルドラックの戯曲は常に平凡な臺詞と仕種の裏に隠れた魂の神秘を暗示するところに生命がある。彼は本篇で「運命は従ふものを去らしめ、抗ひものを引いてゆく」現實を浮彫りにした。	北ホタルはバリの場末の木賃宿である。ダビはかつて貧乏畫家としてそこに住んだ。「北ホタル」でダビは豊富な體驗と才能を注いで、どん底に近く生きてゐる希望を求める男女の哀歌を正確に陰影深く描き上げた。本書は、ジイドとソヴエート旅行中、若くして客死したダビの代表作であり、ポビエラリズム文學の典型である。	コクトーの詩や小説の中でも、特に神経の鋭い作品であるこの「怖るべき子供たち」は、阿片を吸つて茫漠と彷徨ふ作者の不思議な感覺を通して、日蔭の植物が蒼白い本能のままに、ひよろひよろ伸びてゆくやうな感じて、同情愛、盗み、虚偽、愛情、毒藥、巨萬の富を浪費する無目的な混亂の中に子供たちの官能が露出してゐる。	愛弟子レーモン・ラザイグの死によつて無常寂寞の孤獨地獄に落込んだコクトーが、自殺する氣持で救ひの手を求めたのが阿片であつたが、やがてその弊害に氣づき百餘日にわたる苦しい解毒治療を受ける間に書かれたのがこの脱出の日記である。しかしこれは、立派な精神論、創作論であり、さらにコクトーの自己究明の書でもある。	現代フランスの最もすぐれた女流作家であつたコレットの作品には、いづれも「魂の郷愁が重苦しく裏へてゐる」といふ。幼い少年少女の戀を描いた本篇もその例外ではなく、すべて感覺の面で捉へられた風景が、男女が、讀者の心を懐かしく揺する。彼女の藝術の水品を透して開けた世界の輝きは人間に生きる喜びを興へずにはおかない。	モーリヤックは鋭いカトリックの傳統を踏まへた佛文壇最高の作家である。彼は常に惡への宿命を自覺する人間を創造して神と対決させる。それは古くからのキリスト教的テーマであるが又最も新しい問題を孕んでゐる。本篇はモーリヤックの初期に屬するが、後年の大作への契機を内包するものとして注目すべきものである。

モーリヤック 辻野久憲譯 癡者への接吻・母 赤209	シャルドンヌ 山口年臣譯 祝婚歌 全册 各々 赤618—319	シャルドンヌ 鈴木健郎譯 未完の日記（ヘヴア） 赤351	ノエル・ヌエット 石川清譯 愛は神ならず 赤177	ポール・モーラン 堀口大學譯 夜ひらく 赤341	マルセル・パニョル 永戸俊雄譯 マリウス 赤284
詩人として出發し、すでに成種の名譽を得てゐたモーリヤックは第一次大戦後「癡者への接吻」を發表することによつて、一躍小説家としての自己を確立した。作家は處女作に向つて成長する」といふが、この作品も、又最もモーリヤックの世界を瞥見せしめる。第三作である佳篇「母」を併せてモーリヤック理解に資す。	批評家フエルナンデスはいふ。「シャルドンヌの作品はコニヤックだ。急いで飲むべきではない。さればといつて緩くくりしぎでもいけない」と。シャルドンヌは常に結婚生活を主題にする。彼は結婚生活にこそ人間性の内奥が現れると考へる。端々しい心理分析に充ちたこの特異な處女作は人間の幸福を深く美しく暗示して止まない。	シャルドンヌはその作品について、「私は女が男に與へ得る幸福、この世で唯一の幸福を表現してみたい。他のことは書けさうにもない」といふ。「未完の日記」は彼の思考を最も端的に示してゐる。一人の男の日記の形で日常茶飯の感情を淡々と綴つてゐながら、この作品は意外な悲劇を孕んで、日記體小説の新風となつた。	「それぞれの世代ごとに新しく發生する」青春の危機を描いて香氣あふれる本篇の作者は、古くから詩人として知られ、その上すでに久しく日本に滞在してフランス語、フランス文學を教へてゐる人。第一次大戦で若くして死亡した友の戀愛を語る形において、作者は戀愛一般に對する世人の見解をも訂正しようとしてゐる。	本篇は「夜とぎす」と共に作家モーランの核心をなす。彼は新鮮な感覺と華麗な文章とをもつて第一次大戦後のヨーロッパを描く。混沌として一種狂氣じみたヨーロッパの生體がモーランの筆によつて鮮やかに浮上つた。その感覺的、繪畫的文章が二十世紀文學に與へた影響の大きさは、日本のかつての新感覺派の運動を見ても明らかである。	太陽の國マルセイユの平和な港には無數のマスツが誘惑の網を張る。とりとめもない旅の夢、一度取りつかれたら最後癒す術のないこの熱病の犠牲者マリウスは、又狂亂にも似た逃避の欲望の強い生體でもあつた。作者はマルセイユ人の生活を繪畫的に舞臺に描き、詩として表現しながら、その美しい生體を夢の女、永遠の女性とした。

ヴァルテ・ラルボオ 堀口大學・青柳瑞穂譯 仇　　こ ろ 赤253	マルセル・アルラン 佐藤文樹譯 惱　め　る　魂 他二篇 赤265	ジュリアン・グリー 新庄嘉章譯 閉　さ　れ　た　庭 全二册 赤363—364	ルネ・モブラン 深尾須磨子譯 沙　漠　の　息　子 赤92	その心理作家であることでスタンダールと比べられるラルボオは、また二十世紀における輝かしいモダニストである。ポール・モーランが百年後にヨーロッパ各地にラルボオ・クラブの設立を夢想した如く、彼は何よりもヨーロッパ人であり、その作品は廣く全土に普及してゐる。本篇はその代表であり、彼の特異な作風を知るに適はしい。信仰も夢も計畫も、すべて殘骸となりはて、永遠の離散状態にあるわれらの古き世界の中には、哲學の體系の遠く及びつかぬ現實がある。それは、文明のいかなる段階においても、人間をそこから解放せしめ得ない惡の「惨めさ」である。本書の三つの小説のユニタを構成してゐるものは、さうした惨めさの分析と描寫に他ならない。 二十世紀は様々な型の作家を生んだ。一九二八年度のフエミナ賞を獲得したJ・グリーンもその一人であつた。本書は隔絶された、休息も悦びもない、ただ孤獨と惡夢とに彩られた肉體間の狂的な憎惡を舞臺に、その息詰る雰囲気から脱出しようとする人間の盲目的な、没我的な行爲を、神と惡魔の筆をもつて描いたものである。 文明社會を離れ、自然の懷に抱かれる時、人生はいかに啓發せられ、又人間はいかに幸福になれるものであらうか。高い精神の糧に買かれたこの年青い人々の純愛の物語は、過去に向つては遠く「ポールとヴィルシー」に連なるものであり。未來に對してはその認められた大きな理想によつて、人類の前途に光明を與へる。
--	--	--	---	---

〔ドイツ〕

相良守華編

ドイツ詩集

赤124

ドイツの詩の特徴はラテン系の詩などと違つて、言語形式の美しさよりは寧ろ肉奥の眞實の力づよい表出にある。それは、心の深い憧れ、望み、悲しみ、歡びを吐露して、人々を慰め、救ひ、養ふに足るであらう。本書はゲーテ（斎藤譯）、シラー（手塚譯）からヘッセ（高橋譯）、カロッツ（片山譯）に到るまでの珠玉を以て集成した。

江野事次郎
中込忠三譯

はら男爵の冒險

—ミューンヒハ
ウゼン物語—

赤141

法螺吹きや、嘘つきは市民社會における最大の惡徳であるべき苦悩の、ミューンヒハウゼン男爵は法螺を吹いたために人々に感心され、もてはやされた。それが全く惡氣のない、無邪氣なものだからだ。聞き手の考へや生活に限りない弾力を與へる此の老人の空想力に充ちた話はラスベ、ビュルガーにより立派な文學作品にまで高められた。

手塚事雄譯

ゲーテ詩集 I

赤42

自然そのもののやうに、おのづからに生れ、外見はきほめて單純であるが、はばひろく深みのあるゲーテの抒情詩には、この上ない明るい喜びとともに悲痛な感情が歌はれてゐる。それは振動する生命そのものであり、詩人の状態がそのまま言葉とリズムに化した世界である。これはど骨を折つた翻譯はないといふ名譯決定版である。

佐藤通大譯

改譯 若きヴェールテルの悩み

赤29

永遠の青春の書といはれ、バイブルに次いで最も多く讀まれるといふこの作品は、文學に親しむ者が一度は必ず讀く僅少な名作の一つであるが、真切にして流麗な原文の情感と文勢とを、そのまま邦文に寫した本文庫は、數ふるにたへられないほどの多くの譯本の中にあつて、眞に推稱し得るものであることを疑はない。

關泰一
美しき魂の告白

赤22

これは、全八巻から成るゲーテの長篇小説「ウィルヘルム・マイスターの修業時代」の第六巻を成す部分で、本來獨立に書かれた作品ではないが、年長の友フォン・クレフテンベルグ嬢の遺した手記や書簡をもとに成つた、地上の幸福と心の平和との長い闘ひのあとと完全な世俗超克に達する一個の魂の成長史こそ、忘れ難い教養小説である。

ゲ 原 一 定 譯 ヘルマンとドロテア 赤 87	ミ 二 ヨ シ ミ 二 ヨ シ 赤 251	シ 竹 内 敏 雄 譯 素朴文藝と情念文藝 赤 84	シ 久 保 榮 譯 群 盗 赤 320	石 川 達 雄 譯 ホフマン物語 赤 146	シ 手 塚 富 雄 譯 影を賣った男 赤 139
フランス革命期の不幸なドイツの社會の中にあつても、眞の愛情はその幸福を求める権利があるといふ考へから書かれた、愛と知性によつて輝かしい戀愛叙事詩。一八〇〇年の發表で「ヴェーデルナル」と共に最もひろく讀まれてゐる牧歌的な物語であり、ゲーテが最も愛した作品。その大らかな、健康さ、知性の深さは他に比を見ない。	トオマの同名の歌劇とともにすてにわれわれにも親しいものとなつてゐるミニョンの「君知るや、南の國」の調へは、南國生の清純な少女のすがたにあはせて、人々にエキゾチックな感情をそそらずにはおかない。自分の作品は自己の告白であると云つたゲーテにとつて、ミニョンの故郷は彼自身の心にあつたのだ。	シラーの美學上の探究の最後をかざる著作である。人間がなほ自然の相を保つてゐた「素朴な」古代文藝の様式に對して、すでに文化と人工によつて自然から乖離し、自然をあこがれ求める近代の「情念的」詩人の作風を對比し、これを固有の世界觀的態度にもとづくものとして正當づけたこの論文は現代なはその價値を失はない。	シラー青年期の作で、ドイツ文學史上劃期的な革新時代——シュトルム・ウント・ドランク（疾風怒濤）——の精神を代表する名作といはれる。潮と火によつて既成の社會、道徳に挑戦する盜賊隊長カアル・モオルの悲劇的行爲を描き出し、全篇にみちみちる激しい自由と正義への憧憬は今日なほ強く人々に訴へる。（久保榮譯選集一）	晝間は謹嚴な大審院判事、夜は酒場の飲んだくれ、深夜の書齋で自ら生んだ幻影に脅えつつ創作の筆を執つたホフマンはドイツ後期浪漫派の鬼才としてポオやボードレーンに比較される多くの怪奇小説、惡魔小説を書いた。が、惡こそは彼の仇敵であつたのだ。本書は歌劇ホフマン物語の題材となつた「砂鬼」「歲晚祭夜話」等を収む。	「人間の影は感觸することのできないものであるが、祖國や故郷と同様に人間の自然的所有物の一つである」といふフランスの説明は、萬人が當然持つてゐる無意味なものも持たないといふ大膽なことになるといふ着眼をうがつ。シュレミールの七里靴による世界周遊の物語に潜む辛酸な味は、故國で不幸な男の生活感情の結晶でもあつた。

關敬吾譯 グリュム 昔話集 全六冊 一々々々 赤 326—331	メーリケ譯 小野 浩譯 旅路のモーツアルト 々々 赤 244	田中克己譯 ハイネ 戀愛詩集 々々 赤 218	藤原定譯 シュトルム 詩集 々々 赤 120	シュトルム 北 通文譯 三色すみれ・水に沈む 々々 赤 185	シュトルム 國松孝二譯 みずうみ・人形つかい 他一篇 々々 赤 49
現代の文藝學、ドイツ民族學の源と言はれるグリュム兄弟は、人も知るゲルマンの古代研究家であり、言語學者である。ドイツの村々に口頭で傳はる話を集録したこの昔話集は、グリュム兄弟がその科學的知識にもとづいて慎重に保存に意を用ひたもので、世界中の多くの人々に親しまれ愛され、人間形成に大きな役割を果してゐる。	清らかな泉が、直射する陽光にその底まで見えながら滾々と溢れ輝いてゐるモーツアルトの藝術はどのやうにして生れ出たのか。メーリケがモーツアルトの魂の奥底に深く測錘を投じてその祕密に参じたかは、この一篇に餘すところなく語られてゐる。モーツアルトの音楽が全篇を通じて清らかな伴奏のやうに聞かれる感がある。	一八二三年五月リューネブルグの親のもとに歸つた詩人ハイネの心に映じたものが詩に結晶した「歸郷」、有名な「ハルツ紀行」の中に插まれた新鮮で美しい「ハルツの旅から」そしてさらに、ハイネがユダヤ教から新教に改宗し、世の中に出る途が開けたことに安心し、ホーマーを讀みながら生れたといふ「北海」を併せて編んだもの。	すなはち自然感によつてメーリケに、感覺的直接さによつてハイネに、心情の本質においてゲーテに比べられるシュトルムの詩は、所謂浪漫派詩人たちのやうに高く遠く飛ばうとはせず常に日常生活の位置の中におゐて、その體驗と感動を純化する。孤獨で内面的であるからこそ自然や人事の一見瑣末なものに深く心情をゆすぶられる。	シュトルムの根本的性格たる徹底的な現世主義は繼母を扱つた「三色すみれ」において悲劇的な結末をとらずに明るい肯定に終る。が、子供の水死の責任を父親に歸せしめる「水に沈む」の無常感は逆に凄慘と言ふべきである。しかし讀者は主人公たちの執拗で意志的な戦ひの中に近代的人間像を形象化したリアリズムを見るだらう。	ここに收めた三篇はいづれもシュトルムの代表的中篇で、光と色と音楽と深い思念とが莊嚴なまでの藝術美を織りなしてゐる。「みずうみ」は老人が己れの青春時代を回想する形式のうちに、美しい湖のはとりて愛別りの女と再會する哀傷をこめた珠玉の戀物語であり、「人形つかい」は可憐な戀が音樂的情調を奏してゐる。

シムトルム
高橋健二譯

告白・別離・沈黙

赤133

異常に深い愛情に結ばれながら、そのゆゑにモルヒネによつて愛を安樂に死なしめねばならなかつた若き醫者の苦悩にみちた「告白」。末子の音楽學校での體驗をもとにして書いた「別離」。男の公明でない態度を飽くまで妻に對する罪として描き、夫婦間の絶対的信賴を説いた「沈黙」。これらにおいてシムトルムの滋味は愈々深められる。

シムトルム
關泰祐譯

白馬の騎者

赤78

これは、北海の岸邊に生を享けて風と浪のひびきの裡に孤獨に生ひ立つた、ひたむきな性格の若者ハウケ・ハイエンの生涯の物語である。無理解な民衆の迷信に抗して堤防を構築、つひに愛する妻子とともに事業の犠牲となるが、彼の魂は今も郷土を護り嵐の夜には白馬に跨つて堤防を彷徨する。リアルな筆致になる作者唯一の長篇小説。

ケラ
伊藤武雄譯

村のロミオとジュリエット

赤267

ここに収めたのは、ドイツ・リアリズムの最高傑作であるケラーの短篇小説集「ゼルトヴィーラの人々」の最初の二篇である。悲劇的な情景と喜劇的な情景とを巧妙にからみあはせながら、異常な人物や事件を現實の世界そのまゝのやうに信じこませる手腕は、まさに「短篇小説のシェイクスピア」と稱される作者の名を恥かしめない。

マックス・ミュラー
相良守峯譯

愛は永遠に

赤7

世界的言語學者マックス・ミュラーの唯一の文學作品である。ある高邁なドイツの青年が病弱な公女マリアにささげる中世風な愛を描いたものであるが、その愛は一對の男女間の個人的な愛を超えて、普遍的な永遠の人間愛を意味してゐる。牧歌的、抒情詩的そして音楽的な美しい言葉をもつて綴られた純愛物語である。

ヨハンナ・スピリ
關泰祐・阿部眞隆譯

アルプスの少女

赤154

いつまでもすたれることのないふるさとへの愛や友情や信仰をテーマとするこの美しい物語が、發行以來七十年のあひだ、かはることなく世界中の少年少女たちに愛され親しまれるのは、讀者自身のなかに「ハイジ」が住んでゐるからである。きはめて香り高い藝術美の世界に、讀者は自己の内なる「ハイジ」を育ててゆくのである。

カイザーリング
佐藤晃一譯

白い女

赤197

白い女とは、白い文化の代表者、白い文化に咲く花である。カイザーリングのいふ白い文化とは凋落してゆく社會層の文化であり、すでに根柢を失つた富裕の文化である。この文化の擔ひ手は婦人であるが、彼女達は結婚生活にはいつても官能に目ざめない「白い女」達である。ここには「白い文化」の瀕死の運命が告知されてゐる。

シユニツツレル
番匠谷英一譯
輪舞・緑の鸚鵡
赤168

十篇の對話劇から成るエロチイックで皮肉な戯曲。娼婦と兵隊、その兵隊と小間使、その小間使と若様、その若様と若奥様、その若奥様と夫、その夫とおほこ根、そのおほこ根と詩人、その詩人と女優、その女優と伯爵、その伯爵と最初の娼婦、と情慾の姿を十組の輪に連ねて人間性を浮彫にする。「緑の鸚鵡」は秀れた一幕の怪奇劇。

シユニツツレル
森 鷗 外譯
みれん
他一篇
赤287

シユニツツレルの小説家としての地位を確立した作。原名は「死」で、愛し合ふ男女だつたが、病む男の死期が近づくにつれてそれぞれの氣持がエゴイステイックに、さまざまの「みれん」のために複雑微妙に動搖するのを描く。いはば著者の精神分析學的研究報告であると共に、心理的作品の代表作で、鷗外の名譯によつても名高い。

シユニツツレル
竹内英之助譯
女の一生
ヘレーゼ
赤358

「女の一生」と言へばすぐにモーパッサンの小説を思ひ出すが、シユニツツレルのこの作品はそれに劣らず悲惨である。女の無知と無力と運命がもたらす悲惨の生涯を描いたこの小説は、ウイーンを背景とする幾多の美しいもの悲しい情痴文學を描いたシユニツツレルの人生への深い洞察から生れたもので、彼の代表作の一つと言へよう。

ヴエデキント
野上豊一郎譯
春の目ざめ
赤148

「少年悲劇」といふ副題が添へられてゐるこの作品は、戯曲の形式に整理された一種の性教育論である。春の目ざめとは、少年の心情の中に目ざめる春機發動を意味するもので、少年たちに好奇心を起させ、その目ざめに正しい知識を與へ、親切な指導を行ふことによつて、誤つた道を踏ませまいとする作者の愛情が全篇を支へてゐる。

ズウデルマン
池谷信三郎譯
憂愁夫人
赤222

ハウプトマンとともにドイツ自然主義の雙璧をなす作者の代表的名作。「フラウ・ゾルゲ」とは東プロシヤ地方の一つの傳説的存在であつて、日本では雪女郎のやうなものであるが、この主人公の苦悩と艱難にみちた血のにじむやうな生活の記録は、作者自身の苦しい體驗であると同時に、ドイツ人の精神をよく現してゐる。

シユトラウス
國松孝二譯
春の調べ
二つの生涯
赤143

「今日彼よりも美しい健全な散文を書く者は一人もゐない」とヘッセの絶讃した孤高の作家シユトラウスの出世作。非凡なる音樂的天分を抱きながらも、あまりにも誠實あまりにも純潔であつたために、學校と父親との壓迫のために、つひに自ら生命を断つにいたつた若き魂の哀歌であり、ヘッセの「車輪の下」の先驅をなす作品。

ヘルマン・ヘッセ 原 健 忠 譯 郷愁 (ヘーター・カーメンチント) 赤166	ヘルマン・ヘッセ 秋山六郎兵衛譯 車 輪 の 下 に 赤296	ヘルマン・ヘッセ 秋山六郎兵衛譯 孤 獨 な 魂 (ゲルトルト) 赤342	ヘルマン・ヘッセ 秋山六郎兵衛譯 湖 畔 の 家 (ロスハルデ) 赤369	ヘルマン・ヘッセ 國松孝二譯 青 春 は 美 し 他一篇 赤316	ヘルマン・ヘッセ 相良守肇譯 青春の惑ひ (デーミアン) 赤164
スイスの山村に育つた一青年が、母の死を機会にチューリッヒ、パリと華かな都會に出て作家を志しながら都會の寒氣に浸らうとするが、結局郷里に歸つて來るといふ此の自傳風の小説に示されたヘッセの、自然への郷愁は深くかつ廣い。一切の虚偽を除去して心の奥の元始人間を見究めようとする詩人のいらだちは終生續くだらう。	自己を語る此の作家が、少年から青年、成人へと成長する生涯で最も多難で苦しかったマウルブロン時代を取扱つた小説である。少年の心を理解しない神學校生活の車輪の下に、ハンスは堪へきれなくなつて逃亡するが、人生苦難の道は遅しない。生の悦びを追求する傾向と、禁慾的な求道的な傾向の間に立つて、懐疑の體驗は深刻である。	音楽の魔につかれて無限に自己に沈潜していつた孤獨な魂は、愛人ゲルトルトが異常な音楽家に心引かれて行くのをどうする事もできず、永遠の女性への悲戀を靜かな諦觀の調べに奏でる。病的な浪漫主義の危機を内部に感じたガイエンホーフエン時代のヘッセが、巧緻な小説の假裝をとつて定着した抒情詩的作品である。	自己陶醉的な青春と訣別したヘッセが、抒情的世界を排して客觀的に構成したこの作品は、現實にうちひしがれながらも、はげしい闘ひを通して藝術に強く生きようとする主人公フエラグートの中に、極度に自意識の發達した現代ヨーロッパの家庭の分裂の悲劇を徹底したリアリズムの手法で描き出した問題作である。	夜空に火花を散して消えてゆく火花のやうな青春の美しさとはかなさを、水彩畫のタッチをもつて抒情的に描いたものである。漂泊者の持つ甘い郷愁と孤獨者の持つ靜かなあきらめとが、全篇のすみずみまでに息づいてあるが、それはとりもなほさず、孤獨な漂泊者としてのヘッセ自身の郷愁とあきらめにはかならない。	第一次大戰を契機にヘッセは自然彷徨の郷愁詩人から人生對決の聖雄的哲人へ轉身した。シンクレアの手記はその一大轉機を告げる記録である。友人デーミアンの神祕な精神に導かれて、大戰の慘憺たる試験に耐へつつ、厳しい現實の中に己の運命の證しを凝視する自己沈潜の魂の歩みは、大戰後の西歐の青年を導く精神的指標となつた。

ヘルマン・ヘッセ
手塚富雄譯
シ
ツ
ダ
ル
タ
赤259

ヘッセにおける「東洋の心」の結晶であり、深い印度研究と詩的直観の融合から生れ出た名作。彼の精神の深部を明かしてゐる點で、まさにグレートにおける「ファウスト」の意味に比せられる。若き日の佛陀の人間性、宗教的苦惱を、印度僧の誦經のリズムをとり入れた格調高い文體で描く。譯文また原文に迫る名譯である。

ヘルマン・ヘッセ
國松孝二譯
乾
草
の
月
他一篇
赤339

思春期に入らうとする少年の無垢な心に、ふと芽吹いた戀の若葉が落すあはれ影の微妙なゆらぎを、高原のすがすがしい自然を背景に、それに相應しい清潔なスタイルをもつて描いた「乾草の月」、それはヘッセが若き日に對して示した、最も清らかな愛撫の姿勢である。愛好すべき「ながれ」と共に作者三〇歳前後の青春回顧時代作品。

ヘルマン・ヘッセ
竹越和夫譯
ふるさと紀行
他五篇
赤299

「ふるさと紀行」「エミール・コルブ」はひとりの少年の生ひ立ちから、やがて故郷への憧れのうちに此の世を去つてゆくつつましい人生を大自然との驚くべき融合に於て描き出した中篇。他に「詩人」「イーリス」等のメルヒエンを収めたが、これらは心病める人々の藥餌となり、開かれた門を通過して世界の内面へと誘つてくれるであらう。

ヘルマン・ヘッセ
手塚富雄譯
荒
野
の
狼
赤370

自分の性格や運命のために深い孤獨の生活に浸りつつ、その孤獨を運命として自覺する「荒野の狼」と呼ばれる男の記録として書かれたこの作品の意味するものは、無垢にして高貴な自己を一生涯その天才的な空想力と強烈な思考力との對象とするひとりのキリスト教徒の、隣人愛と利己主義との矛盾と相剋の精神劇にほかならない。

リ
佐藤晃一譯
若き詩人への手紙
赤165

カロッサは「より深い自覺に達したいと思ふ人は、リルケの手紙をじつくり讀んでみるがよい」と言ふ。詩を書かずには生きてゐられない、といふ思ひを語るこの書簡集（一八九九—一九二四）は、生の表面にとどまることを欲しない人々に本當に生きる道とその道を見出す方法を暗示し、リルケの内面生活の深さを明かにしてくれる。

片山敏彦譯
カロ
ッ
サ
詩
集
赤367

カロッサはこまやかな詩的感覚をもつてゐると同時に人生についての敏智を詩の形で表現する賢者である。カロッサの詩は魂の思想のための詩的な音楽であり、そこには「人の心を射當てる慰藉の矢」といふべきものがある。この詩集が全體として讀む者の心に殘す光の痕には、限りなき希望の夢が育つてあらう。

ハンス・カロツサ 石丸 静雄 譯 ドクトル・ビュルゲルの運命 他一篇 赤317	ハンス・カロツサ 石川 鍊次 譯 幼年時代 赤264	ハンス・カロツサ 國松孝二・丸山武夫 譯 青春變轉 赤260	ハンス・カロツサ 石川 鍊次 譯 醫師ギオン 赤179	ハンス・カロツサ 芳賀 檀譯 指導と信從 — 生の追憶の書 — 赤276	トーマス・マン 高橋義孝 譯 トニオ・クレーゲル 赤205
若きビュルゲルは、人間として、醫師として、詩人としての生き方に統一をはからうとして苦悶する。が、この苦悶のはてに横たはるのは一層深い絶望の深淵なのだ。人間的に戀に生きようとするれば、醫師としての使命から遠ざかる。この矛盾の痛みが彼を破局に導いてしまふ。醫師として自からの體驗を振り下げたカロツサの處女作。	飽くまで透明な、而も柔かい薄膜を通じて圓かに光るカロツサの描寫力が捉へた、人生黎明期の神の如き夢の世界は、かつて何人も企て及ばなかつたほどの高さ、深さ、悲しいまでの淨らかさを内に湛へてゐる。それは、やがて展開するべき人生の諸體驗の萌芽を宿した、幼年期の原型の表出であり、成年の觀智は長い道程への省察を怠らない。	制作年代からは「ルー・マニア日記」「醫師ギオン」を、描かれた内容からは「幼年時代」「美しき戀ひの年」を繋ぐ美しい橋である本書を通じて、詩人は人間生成の觀智の成熟するさまを、靜謐な嚴しさを持つ文體により跡づける。大戦の悲慘と苦惱に深く堪へた作家精神は、しかし成長しをへた場所から更に變轉して行くのである。	その作品の殆んどが自敘傳的素材から成り立つてをり、ドイツ的な意味での私小説であるカロツサにとつて、此の小説は唯一のフィクションとして構成並びに筋のうへで特異のものである。戦場より歸還の後、悲慘な敗戦の街ミュンヘンを背景に、名匠が運ぶ筆致は、すでに普遍的な、歴史的な、廣くドイツ的な客觀的諸問題に達する。	幼少時代から第一次大戦の終末に至る半生の誠實な魂の記録として、ゲーテの「詩と眞實」に比せられるべき自傳文學。ホフマンスタール、ゲオルゲ、ベルトラム、リルケ等偉大な詩人との出會ひ、一個の高貴な精神がいかに破壊と恐怖の嵐の中を光を求めて自己を成熟させて行つたか、を印象深く描き、近代ドイツ散文の最高峯をなす。	巨匠二八歳における此の作は、巨大な量にのぼる諸作品のテーマ、色調、氣分、技巧の總てを既に萌芽的に示し、マン自身も繰返して「全著作の中で今でも自分の心に最も近く、またひとにも好んで讀まれる」と言つてゐる。藝術家氣質と市民氣質、靈と肉、知性と感性、生と死等の對立相剋を通じ、更に深く人間一般の問題性を提起する。

ツヴァイク 理譯 哀愁のモンテ・カルロ ——女の二十四時間—— 赤223	ツヴァイク 隆譯 たそがれの戀 他三篇 赤36	ツヴァイク 隆譯 愛慾の海 (情熱のノヴェル) 他二篇 赤88	ツヴァイク 隆譯 ある心の破滅 他二篇 赤297	フランツ・カフカ 中井正文譯 變身 赤167	フランツ・カフカ 本野亨一譯 審判 赤226
人生の一時期を、感情の嵐が恰も運命の通り魔の様に吹き過ぎる事がある。甘美な哀愁の都モンテ・カルロに、年若き未亡人と一青年の間に結ばれたかりそめの愛慾の二十四時間。人の生涯を決定する宿命的な情熱の多彩な様相を、詩、小説、戯曲、評論、傳記等行く所可ならざるなき作者が圓熟期の才能を駆つて描いた佳篇である。	文學の途上によこたはる一切の危険を、みごとに自らの體驗の中に生かし、その美學的自己鍛練のうちから、言葉とスタイルに對する畏敬を身につけつつ獨自の文體を發見したツヴァイクの稀れに見る美しいスタイルが、これらの短篇のうちに典型的に現されてゐる。「たそがれの戀」「夏の夜の物語」「家庭教師」「眼ざめ」の四篇を收む。	原名「アモック」とは、人を狂氣にみちびき奔走させる熱帶病を意味するが、美貌の貴婦人に戀慕する中年醫師の激情を描いたツヴァイクの最高傑作の一つである。灼けつく太陽と海と砂を背景に戀人の棺と共に投身する悲劇的な物語は、異常さのうちに人間性の美と眞實を發見し追求せんとするツヴァイクの文學精神をよく現してゐる。	「孤獨」と「死」の不毛の世界に、老年の情熱を求め續けた「ある心の破滅」、未知の「生」に對する深い憧憬と不安のティーンエージャーのエチュード「燃える祕密」、そして心貧しい庶民の、あまりにも純潔な情熱の讃歌「見えざる蒐集」、これら異色ある三篇こそ、ツヴァイクの特色をなによりもはつきりと示した作品と言へよう。	二十世紀最高の作家であり、實存主義の源流として世界文學に深刻な影響と問題性を投げかけた、天才カフカの代表的中篇小説。一夜のうちに若い主人公が醜い蟲に變身するといふ意想外の設定のもとに、人間の孤獨と不安と絶望を鋭く追求した原作は、一九一五年ドイツで出版されて以來絶讃をくわつ今日まで讀まれてきた。	「審判」は小説「アメリカ」「城」とあはせてカフカの「孤獨の三部作」と呼ばれる作である。人間存在の不安に直面して、瞬時に脱出を許されない人間の赤裸々な告白である。「自分の存在が何故このやうに裁かれるのか」といふ必死の質問には、なんらの應答も與へられない。まったく孤獨に陥つた人間の手記である。

ヴァーニエルト 高橋健二譯 愛すればこそ （ドスコチル の女中） 赤 258	ブリーヴィエ 舟木重信譯 死のスターリングラード 全二冊 上々々々 下々々々 赤 151-152	ヘルマン・ケスラー 小松太郎譯 性にめざめる頃 （ヨーゼフは自由 を求めてゐる） 赤 256	
寒風と氷流とが支配する北ドイツの暗く神秘的な自然を背景に、寡黙で誠實な渡し守 ユルゲンへの愛をまもるために、神の名をもつて迫る漁色の牧師を殺害する女マルチ の魂を緻密に描き出した傑作。北國の暗い夜、氾濫する氷流、神秘的雰囲気包まれ て展開される愛と死の物語で、第一回ラーベ賞を授賞された作である。	一九四一年六月、ドイツはソヴェート・ロシアに宣戦。第六軍は翌年九月スターリン グラードに侵入したが十一月よりロシア軍は反撃に轉じ、二ヶ月間に二十三萬を失は せ、翌年二月二日全軍を殲滅させた。ブリーヴィエの此の作は現實をして歴史的正確 さとゾモニツシユな殘忍性をもつて語らせた最も痛切な敘事詩として高く評價さる。	第一次大戦前のドイツに育つた一三歳の少年ヨーゼフの、人生に對する眞摯な熱情と 生一本の純眞さ。彼が大人の現實の社會に對して感じた幻滅と怒、精神的苦悶と反抗 は發狂の一步手前を痲痺狀態で彷徨したあげく、つひに家と母を棄て別居してゐる父 親の下宿へ飛びこむに到る。理想主義的な傾向を持つた思春期の少年を描いて新鮮。	

〔ロシア〕

ブーシキン
神西 清譯

ドウブローフスキイ奇譚

他三篇
☆☆

赤193

ブーシキン
中村白葉譯

スペードの女王

他一篇
☆☆

赤137

ブーシキン
中村白葉譯

檢察官・外套

☆☆

赤125

ブーシキン
平井 肇譯

隊長ブーリ

☆☆

赤175

ツルゲート
米川正夫譯

貴族の巢

赤54

スリルにつぐスリルを淡々たる簡素な筆致をもつて展開してゆくこの典型的な俠盜物語が、今日なほ讀者の心に訴へるのは、すでに熾熱の極に達した地主貴族文化への、鋭利な批判を含んでゐるゆゑである。たんなる冒險小説ではなくて、女帝エカテリーナ二世治下における地主貴族文化の典型をきはめてリアルに描き出してゐる。

綿雲の街頭を四枚のカードが舞ふ。最後の切れ、スペードのクイーンは、賭の秘傳を知るために殺した老伯爵夫人の顔になつてニタリと笑つた……大理石の冷さと、動物磁氣の怪異にも似て、浪漫主義の極點を拓いた夢幻境。併載の連作「ベールキン物語」とともに、古典美に輝くブーシキン藝術の一主筆を代表する傳奇的佳篇である。

偶然の事から中央政府派遣の檢察官のお忍び姿と早合點された都會の輕薄兒が、常習的瀆職で戦々競々たる田舎の官吏達を思ふ存分諷刺する、ロシア最初の獨創的諷刺喜劇「檢察官」と、薄倖の小役人が新調した外套を纏う短篇名作「外套」。その爆笑の陰には烈火の怒りがあり、笑ひの陰には見えざる涙がある。共にブーシキンの代表作。

コサック魂が極度に高揚され、ウクライナ全土が騒然たる歴史的生活を生きた戦亂の時代、頑固一徹、精力絶倫、義務の前には肉親の愛情、憐愍も顧みず、祖國と信仰とを護つて奮ひ立つた峻烈なタラスの風貌と果敢な部下の奮戦は奔放自在の筆力に「コサックの紋事詩」と化した。ブーシキン「大尉の娘」と並稱される歴史小説の巨篇。

「ルーデン」につづくこのロマンが、ロシア文學史において高い位置を占めてゐるわけは、女主人公リザのすばらしい造形に存する。たぐひまれな詩美をもつてくりひろげられる多くの獨立したエピソードを縫つて形象されるリザ・カリーチナの精神美と卓越した心の姿とは、ロシア文學の作品中類のない成功を収めてゐる。

ツルゲーネフ 小沼文彦譯 初戀 かた戀 赤122	ツルゲーネフ 米川正夫譯 その前夜 赤50	ツルゲーネフ 中澤美彦譯 父と子 赤176	ツルゲーネフ 中村融譯 文學的回憶 赤83	中山省三郎譯 ツルゲーネフ 散文詩 赤21	ドストエーフスキイ 井上満譯 貧しき人々 赤30
サモワールの嘆く和音につれて語り出された初戀の哀歌、ゼラニウムのほのかな香りに残る片戀の憂愁。金メッキのブリヤニクの様な甘ずっぱい青春の思出と、優麗なラヴロマンスの数々を、十九世紀最大の「愛の歌ひ手」は美しくも奏でる。理想の女性像と無慚に崩れる女心の心憎いまでの描寫は、時代と國境を超越して完壁である。	美しい祖國の名を呼びつつ異郷に斃れた愛國の志士と彼を慕ひ情熱のロシア乙女。スラヴ獨立運動への熱の如き意志も、正義と光明への火の如き愛も、ゴンドラたゆたふエニスの入江に漸消の悲歌を奏でる。しかし「その翌日」は、農奴解放令の高らかな鐘の音とともに明け染めた。ロシア社會史の一線を、見事に捉へた悠遠の大作である。	一八四〇年代の無用人は、七〇年代のニヒリストに脱皮した。傳統を否定し進歩も否定し、あらゆる權威を徹底的に否定し去るパザロフは、死に臨んで神をも否定する。新舊兩陣營の葛々たる非難の嵐の中から搖らめき出たロシア・インテリゲンチヤの巨大な映像は、歴史の遠心力と求心力を排して、新しい典型に化石した。	「父と子」の文豪が、一八六八年、五〇歳の時に、「煙」に描かれてゐるドイツの温泉地バーデン・バーデンで、隨想記風に書き始めたロシア文人、海外滞在、若き日等の回想録。「私は唯の觀察者だ」と屢々口にし、作品の中に潔癖なまでに己の顔を出すことを嫌つた作者の人間と文學を、全圖的に理解する上に残された唯一の文獻である。	「私はあはれむ、自分自身を、他人を、あらゆる人々を、獸を、鳥を……生きとし生けるものを。」憂愁の觀照者、哀切の詩人ツルゲーネフ晩年の日々は、美しい無頼の詩となつた。悠久の山河に刹那の生命を感じ、儚い花鳥に不動の形象を眺めつつ、すべてを玲瓏たる珠玉に結晶せしめた此の小品集は、逸すべからざる異色の一卷である。	「貧しき人々」はドストエーフスキイの輝かしいデビューであつたとともに、彼の作家活動の方向を決定するものであつた。そこに描かれる主題は、當時の社會的矛盾から生れた個人と環境の悲劇的な相剋であるが、社會的不正に對する個人の抗議と貧しき人々の反逆に、ドストエーフスキイのヒューマニズムがよく現れてゐる。

ドストエーフスキイ 米川 正 夫 譯 賭 博 者	ドストエーフスキイ 中澤 美 彦 譯 虐 げ ら れ た 人 々 全 冊 各々々々	ドストエーフスキイ 米川 正 夫 譯 永 遠 の 良 人 各々々々	ドストエーフスキイ 中村 融 譯 地 下 生 活 者 の 手 記 各々々々	ドストエーフスキイ 米川 正 夫 譯 罪 と 罰 全 二 冊 各々々々	ドストエーフスキイ 中山省三郎 譯 白 痴 全 四 冊 一・四々々々 二・三々々々
ルレッテンベルグなる架空なドイツ都市におけるロシア貴族の家騒、フランス人、イギリス人などの間に演ぜられる戀愛と物慾と冒險本能の交錯する異色ある作品「賭博者」は、ドストエーフスキイの内部に根強く潜んでゐた賭博本能を骨幹とし堂々と賭博哲學を展開した小説で、ドストエーフスキイの作中ユニークな意義をもつてゐる。	ベテルブルグといふ陰鬱な都會の持つ不思議な魅惑的雰圍氣の中に、獵奇的秘密の絲を繰り擧げ、最後まで讀者の好奇心を擱んで放さないドラマチックな構成をもつて展開される「虐げられた人々」は、ドストエーフスキイ文學の特徴と、その典型的手法を鮮明に現したものととして彼の文學への恰好の入門書と言へよう。	現實は屢々夢幻に似、夢幻が時に現實以上に迫眞性を帯びる、蒸暑い白夜のベテルブルグの裏町、妻に裏切られた見窄らしい一凡人は、笑ひと涙、呪詛と感激の相交錯する滑稽な煩悶の末に、閨男された「永遠の良人」として終る。「白痴」と「悪魔」の間に現れ、恰も荒狂ふ颱風の不氣味清澄な眼を思はせる凝縮された均齊美の心理小説。	地上に榮えるあらゆる正常に激しく嫌惡し、人間性の地下から、科學と近代哲學とが完成した合理的宇宙へ水晶宮」の彼方に、個性の絶対自由を憧れて熾烈な自意識の極北に立つた男。鬱然たる巨匠がその造型を完了した時、後期の大作の鍵はここに提示され、世界文學は現代精神の不條理の主題を初めて己の所有としたのである。	處女作「貧しき人々」において虐げられた薄倖な人々の同情者として出發したドストエーフスキイの創作の興味は、「地下生活者の手記」を轉機として社會問題に向つて轉換して行つた。その傾向を具體的に作品として形象化したのがこの「罪と罰」であるが、その繊細深刻な心理解剖と深い哲學的思索は彼の存在を眞に世界的ならしめた。	ドストエーフスキイの創作の要素が、ほとんど全部取り入れられてゐる「白痴」を書いた作者の意圖は、眞に美しい肯定的な人間を描くことであつた。主人公ムイシキン公府の單純にして清淨な精神、限らない愛の要求に形象された生き生きとした人間像こそ、ドストエーフスキイの藝術的天才が見事にばした愛の思想の造形であつた。

ドストエーフスキイ

中山省三郎譯

カラマゾフの兄弟

全五冊

各々々々

赤213-217

意圖の雄大、小説的構成の複雑、哲學的連観の深遠さにおいて「フアウスト」を凌ぎ、人間愛の熾烈、宗教的信仰の高邁さにおいて「神曲」に劣らないと言はれるこの長篇小説は、ドストエーフスキイの藝術・思想・信仰の一大綜合であり總決算である。それは人間と神との間に架けられた貴い橋であり、永遠に心の糧となる啓示の書である。

トルストイ

米川正夫譯

アンナ・カレーニナ

全五冊

各々々々

赤111-115

十九世紀後半、農奴解放後のロシア生活の見聞を再現である「アンナ・カレーニナ」には、ベテラブルグやモスクワの華麗な社交界と、農村の地主の生活とが、圓熟の極に達した文豪の筆によつて縱横に描寫せられ、眞にリアリズム文學の最高點を示してゐる。しかも人間心理への鋭利な洞察は、この傑作を人類の文學たらしめてゐる。

トルストイ

米川正夫譯

イヴンの馬鹿

赤368

ロマン・罗兰をして「藝術以上の創造」と絶讃せしめたトルストイの民話には、彼の創作の最高峰の一つをなしてゐるが、「イヴンの馬鹿」はその中でも最も人口に膾炙したもので、そこにはトルストイの宗教観のみならず、社會觀、政治觀までが最もロシヤ的な民話の形式に、驚くべき巧妙さで織込まれ、特筆大書すべき價值を持つてゐる。

トルストイ

中村 融譯

藝術とはなにか

赤150

宗教的轉回以後の文豪を支配した藝術觀を集約したもの。藝術を人類永遠の進歩團結に寄與せしめようとする一種の藝術功利説であるが、結論よりもむしろ所説の展開そのものに、文豪の該博な知識と透徹した理解力が横溢してゐて興味深い。「アンナ・カレーニナ」の文豪がその大作を否定するといふ逆説に於て提出した藝術論である。

トルストイ

米川正夫譯

われら何をなすべきか

赤33

「懺悔」「わが宗教」に次いで、文豪は自ら計畫した貧民救濟事業を基礎に宗教に裏附けられた社會問題の解決へ向つた。政治・軍隊・裁判・私有權等、總て人間の自由を束縛する暴力として彼獨自の冷徹周到な解剖批判に曝された。「死の家の記録」に比すべき本書において、彼は純然たる宗教的無政府主義者たる自己の姿を明瞭にした。

トルストイ

中村白葉譯

クロイツェル・ソナタ

赤76

性慾は恐ろしい……早春の夜汽車で廻つた男、嫉妬の果て、不貞の妻を刺殺した夫の告白は、恰もクロイツェル・ソナタのプレストにも似た激情と呻吟を奏する。惡を憎み、肉慾を否定する高齡の苦業者トルストイが、キリストの理想と人類の目的といふ課題を、生涯をかけた眞率な勇氣、稀に見る迫眞的表現力を以て究明した性慾小説。

トルストイ 米川正夫 譯 復活 活 全 册 各々々々 赤 9—10	チエーホフ 中村白葉 譯 女の幸 福 他十二篇 各々 赤 138	チエーホフ 米川正夫 譯 イワノフ フ 赤 349	チエーホフ 中村白葉 譯 かもめ 赤 308	チエーホフ 米川正夫 譯 櫻園 赤 285	チエーホフ 井上滿・袋二平 譯 生れ故郷で 他十二篇 各々 赤 81
「眞の藝術は人生の爲に益するものでなければならぬ。それは宗教的愛情を土臺としなければならぬ」と宣言したトルストイが、その高遠な藝術觀を自ら具体化した肉づけした「復活」は十九世紀が生んだ世界最高の文學として萬人に愛讀されてきたが、それは薄幸の少女カチューシャをめぐつて展開される魂の再生の記録である。	世紀末の憂愁は、ロシアの天地をも覆うてゐた。溶暗の舞臺に登場した天才作家は、動きと色と音を一個の寂光と化して人生の奈落に投映した。涙によつて深められた笑ひは、思想よりも豊かな人間への愛を滿へつつ輕快の筆を走らせる。繊細な感受性と象徴的表現は、早くも創作形式に新境地を拓き、數多きこれらの好短篇を産んだ。	六一年の農奴解放は極端な彈壓政策に終つた。生一本な熱情に燃えて反動政策と複雑な實社會に抵抗し心身共に疲憊し盡し、病身の妻、信財、更に度を過したサーシャの愛の重荷に耐へ得ず、ある漠とした罪の觀念を内に感じて自殺しに行くイワーノフ。それは暗濛たる過渡期に生れたロシア知識人の典型的悲劇であつた。處女長篇戯曲。	チエーホフの四大戯曲の二に數へられる「かもめ」は表現形式の清新さと、インテリトな深い抒情詩美を持つすぐれた作品であるが、作の底を流れてゐる思想的色調は、チエーホフの絶望的人生觀であり、思想的に救ひや光明はないが、そこに盛られた人生觀照の眞摯さのゆゑに強く讀者の心を打つものがある。	朝寒の櫻咲く莊園とその所有者には、悲しい落日の夕映が訪れた。丁々と古木打つ斧音をめぐつて、地主貴族一家と落札商人の悲喜交々。やがて曙光のはの見える頃、新しき門出への盡きぬ名残も、遙かなる靜寂の中へ消えてゆく。温いペースとユーモアを以て新舊時代の交替を柔かく描き出した名作一幕物。詩人の白鳥の歌となつた。	憂愁の病理は、詩人によつて遂に超克された。「冷酷無慈悲な人生に對して、それ相應の返報をせねばならぬ」といふ晩年のチエーホフは、死の接近とともに惡への宣戰を布告した。今や、社會の陷弊と變じた人生の奈落からは暗黒の舞臺へ強烈な光が投げられる。鋭い諷刺と簡潔な文體は革命近き大草原の上に無數の旅を續へした。

シ・ヴァイロウ 瀧田陽之助譯 チエーホフとの戀 赤156	レスコフ 米川正夫譯 魅せられたる旅人 赤136	ゴリキイ 小山内薫譯 ん 底 赤162	エヌ・バイコフ 上 脇 進譯 偉 大 なる 王 赤153	シ・ローホフ 米川正夫譯 開かれた處女地 全二冊 各々々々 赤157-158	シ・モノフ 小野俊二譯 晝となく夜となく 全二冊 各々々々 赤246-247
チエーホフが四一歳で女優クニツベルと結婚するに至るまで、作家で人妻だった筆者と秘かに戀し合った約十年間の記録。ソ連でもつい近年になって初めて公表され、これによつてチエーホフ晩年の謎その他、傳記的空白の解明されたことが多い。なほ懇切な譯註と詳しいチエーホフ年譜、及びプノワ女史筆の挿畫が添へられてゐる。	水雞鳴く農村、病葉散る莊園に湖畔の小都市から驢組の曠野へと、不思議な宿命に誘ふられて、果てしなき漂泊を續ける男の冒険とロマンスは、萬華鏡の幻想に満ちてゐる。そして、人生の最後の波止場、西色に輝く修道院に彷徨へる情熱が眠るとき、魅はしの魔力は去つた。縹渺たる近代民間傳説の風韻ただよふ純ロシア的な逸作。	「晝でも夜でも半屋は暗い……」帝政期ロシアの陰惨な地下木賃宿を舞臺に、希望を失ひ生活にひしがれて人生の「ヘナ・ドニエ」に呻く群像の、抜き差しならぬギリギリの表情と叫びは、さうした生活にも捨てぬロシア民衆の底抜けの樂天性を秘めつつ、あらゆる人間の胸中に浸み透る。既に無數の上演を記録してゐる古典的名戯曲。	バラ色に輝く老爺嶺の山頂に猛虎「王大」は眠る。遙かなる樹海は雷鳴の如き咆哮に充ちたその一代記を認めて神祕である。野猪、羚羊、黑熊、狼群、そして大と獵師たち——密林の王者の歩んだ道は争闘の連續であつた。今なほ化石となつて眠るといふ山神王大、豐麗な滿洲大原始林に響き渡る啄木鳥の啼音が傳へる秀抜な動物譚である。	古いコサック民謡が流れるドン地方に巨大な農村集團化運動の鐵が振り下された。無知を啓き、妨害を排し、矛盾を克服して建設の事業は進む。数々の悲喜劇を生みつつも、豐饒な黒土層からは新しい生命が甦へた。これは、「靜かなるドン」以後の農民達の姿とコルホーズの奮みを、強烈な太陽の下に歌ひ上げた一大敘事詩である。	ヴォルガとドンの彎流する處、炎々と燃え上る丘は古都スターリングラードの市街である。果しないステップを越えて黙々と戦線に復帰する赤軍大隊。かくて獨逸國運を賭しての大攻戦が始まつた。従軍記者として第二次大戰に轉戦した作者が、大攻勢に轉ずる直前の最も絶望的に苦しかった七十晝夜を描いた異常な記録小説である。

〔イギリス〕

シェイクスピア
本多顯彰譯
ハムレット
赤91

バイロン
岡本成経譯
海賊・シヨンの囚人
赤174

タムスン
田部重治譯
イノック・アーデン 他三篇
赤86

村岡勇譯
ラムシェイクスピア物語
赤145

チャールズ・ラム
山内義雄譯
幻の子供たち（ヘリア隨筆抄）
赤261

餘りにも有名な四大悲劇の一（一六〇二年初演）デンマークの王子ハムレットが毒殺された父の亡霊に導かれて叔父と母に復讐し自らも死に弊れる真話。『Romeo and Juliet』の獨白に象徴される深刻な瞑想型のハムレットが、むしろ自己克服を通して行動の完成に至る性格發展を見事に描出し、將に世界最高の古典として不朽の悲劇である。

浪漫期の全歐を風靡した情熱の詩人は作品の中に大膽奔放な自己表白をなした。收める二篇の長詩はその絢爛華麗な表現の中に、詩人の人間觀、戀愛觀を盛り、自由を求める烈々たる熱情を奏でる。波瀾萬丈の局面轉回を繰り、強く打ち出される純潔孤高の人間像は、香り高い抒情を纏うて、全世界を熱狂せしめた詩人の姿であつた。

妻や子供を幸福にするためにイノックは海を越えて稼ぎに行つた。かくて十年の歲月を経て歸つてみれば、妻は他の男に嫁して幸福に暮してゐた。——この悲劇のストーリーはあまねく世界に知られてゐるが、詩人はこれを美しい自然描寫を交へて牧歌的傑作とした。亡き友を偲んで切々と響く挽歌「波を聴きつつ」他二篇を併せ收めた。

「エリア隨筆」の著者が發狂した姉を見守る靜かな日々、エリザベス朝の古典に遊び、シェイクスピアの主要な作品二十篇を選んで物語風に綴つたのが本書である。シェイクスピア劇の入門書として廣く知られてゐるがその理解の深く正確なこと、表現の典雅で秀れてゐることが本書に原作を離れた獨自の讀物としての面白さを與へてゐる。

收めるところ「南海商會」以下十六篇。ラムがエリアの筆名で當時のロンドン・マガジンに連載したエッセイで、床しいユーモアとしみじみとしたベーンソスが交錯し、自己の體驗、印象など、エリザベス朝好みの古雅な文體に盛られて芳醇な香氣に富む作英國隨筆文學の最高峰に位する浪漫復興期の傑作。各篇ごとに別切な解説を附す。

シエリー夫人 山本政喜譯 フランケンシュタイン 赤283	E.C.ギヤスケル 川原 信譯 女だけの町 (ヘクランフォード) 赤298	アイケンズ 驚巢 尚譯 オリヴァ・トウイスト 全二冊 赤272—273	アイケンズ 菊池 武一譯 善神と魔神と (ニコラス・ニクルビー) 赤290	アイケンズ 安藤 一郎譯 クリスマス・カロール 赤25	アイケンズ 刈田 元司譯 爐邊のおろぎ 他一篇 赤132
この生きた人達人間の物語は映畫で已にお馴染だが、案外、原作者が高名の詩人の夫人であることは知られてゐない。彼女は小説家としても一家をなしてゐたが、俗悪でない怪奇小説を書かうとの試みが本書の誕生となつた。この超自然を扱つた幻想物語は當時の世人の怪物と見えたロマンティストの詩りと情みを象徴したものと云へる。	作者ギヤスケル夫人の獨創性が一番あらはれてゐる傑作であるとともに、イギリス文學の古典として特異な價值をもつ「クランフォード」は、キリスト教的道義心にさへられた獨特のベロニクスとヒュー・マーが、淡々とした文體ににじみ出て、人間に對する作者の深い理解と同情がうかがはれ、讀者をして思はず涙ぐましめる。	アイケンズがその社會思想家、人道主義作家としての傾向を示したこの作品は、汚穢醜汚をきはめた下層社會を背景として、殘忍な惡漢や奸智にとむ惡黨、權力を笠にきる小役人等の間にあつてもみくしやにされるみじめな孤兒を歸せつつ、はげしい社會抗議を企てたもので、十九世紀寫實主義の代表的傑作である。	貪慾無慚な人間と可憐な少女とを配して、惡辣な學校經營の真相を描破したこの小説には、貧しき人々の慘めな狀態に同情し、とくに被搾取階級の少年少女たちの境遇に深い愛情をそそいだアイケンズの、いはゆる溫情的社會主義の立場が見事に表現されてゐる。事件の發展の面白味に、作者獨特の技倆が發揮されて興味がつきない。	賢かなヒュー・マニズムと、あらゆる人々に通じる庶民的な人間性への理解を生命とするアイケンズの名を眞に世界的にした「クリスマス・カロール」は、「散文で書かれたクリスマス祝歌」といふ意味であるが、スタイルジといふ強慾症に三人の幽霊を配しつつ、善意のモラルによる人生批評が展開され、愛すべき喜劇となつてゐる。	「クリスマス・カロール」の成功に氣をよくしたアイケンズが、つづいて書いたクリスマスもの一つであるこの作品の目的は、こおろぎを小さい家庭の神にして、物語が悲しい沈んだ場面るときは鳴きやんでゐるが、すべてがうまく幸福になるとき、また聲高く鳴き出せることである。作者の願ひは貧しい人々への祝福であつた。

アイケンズ
山本政喜譯

大いなる遺産 全三冊

上々々 中々々 下々々

赤129—131

プロンテ
大和資雄譯

改譯 嵐が丘 全一冊

各々々

赤1—2

スティーヴンソン
西村孝次譯

新アラビヤ夜話 各々々

赤121

スティーヴンソン
西村孝次譯

寶島 各々々

赤117

スティーヴンソン
島田謙二譯

臨海樓綺譚 他三篇 各々々

赤144

スティーヴンソン
佐藤利吉譯

ギキル博士とハイド氏 各々々

赤41

暖い愛情が家庭生活と人間關係を豊かにするといふこと、それがアイケンズの作品の全部を貫く主題であつたが、彼の一番油の乗つた時期に書かれたこの「大いなる遺産」は、主人公が自ら語る身の上話の形で、大きな遺産を相続する見込みをめぐる人間の喜怒哀樂を語つたもので、読む者にひとごととなぬ深い感銘を與へる。

嵐吹きすさぶオクシヤの荒野を背景に展開されるヒースクリフとキャサリンとの悲戀を描いた「嵐が丘」が、一世紀をへだてた今日なほ變ることのない情熱の息吹きを讀者に與へずにおかないのは、若くして世を去つた英國の處女詩人エミリー・ブロンテの見果てぬ夢がそこに託されてゐるからである。モームは世界最大の小説と讚美する。洋の東西にわたつて萬人に親しまれる古いアラビヤの口傳を、十九世紀半ばの英・佛を舞臺に再現しようとしたのがこの「新アラビヤ夜話」である。明智と勇氣に富む貴公子のロマンスは、スリルと推理の物語りをつなぐ美しい環であるとともに、事件を解決する鍵でもあるが、これは現代にめづらしい傳奇文學の傑作である。

寶探しといふほとんど本能に近い人間の興味と好奇心に強く訴へるこの「寶島」は、しかしけつして單なる冒險物語ではない。作者の示さうとする寶島の地圖とは、人生そのものの縮圖であり、ジョン・シルヴァーといふ主人公のつばの海賊のすばらしい温情こそ、スティーヴンソンが理想的な人間に託した夢にはかならない。

スティーヴンソンの本領は短篇小説にある。スコットランドの荒涼たる海濱を舞臺にとつた「臨海樓綺譚」は彼の中篇の典型であり、その意表を衝く構成と息詰る事件の發展は、登場人物の性格とからみ合つて、讀者をスリルと興奮に引込ますにはあなない。他に「その夜の宿」「マレットロアの殿の扉」「ペルトリーニ氏のギタラ」を收む。

善惡二つの觀念のアレゴリーを描き無意識の世界にメスを入れて古い倫理觀念を去つた近代心理を象徴的に表現した「ギキル博士とハイド氏」は、二重人格の心理といふ新しい傾向を文藝の世界に持ちこんで、象徴的心理小説の先驅をなしたものであるが、神性と獸性ととの分裂に備へ現代人の生活に深い示唆を與へて感銘が深い作品である。

スティーヴンソン 大場正史譯 誘拐されて 赤257	スティーヴンソン 西村孝次譯 パラントレイ卿 赤336	スティーヴンソン 橋本福夫譯 若き人々のために 赤282	大場正史譯 全譯 千一夜物語 トシ版全一〇冊 1-17各々々々 赤56-75	ルイス・キャロル 岩崎民平譯 不思議の國のアリス 赤142	ペイター 吉田健一譯 文藝復興 赤106
明暗種々相の現實世界に豊かな想像力を驅つて、ひたすら生きる喜びと人生の驚異を巧緻な筆致で描き出したスティーヴンソン文學の最高傑作「誘拐されて」は、スコットランドのヘザリーの荒地を背景として、巧みなプロットと思もつかせずに讀ませる迫力で、スコットランドの風雪時代を繪巻物のやうに展開し興味を横溢させてゐる。	兎もして人を信じない兄のジェイムズと、ものしづかで正直な弟のヘンリー・スコットランドの名門パラントレイ家にまつはる王位繼承問題をめぐつての兄弟間の憎しみと争ひと呪ひの悲劇を描いたこの歴史小説は、本質的には「ジキル博士とハイド氏」の二重人格の苦惱と同じ主題をもち、善と惡との交錯する人間模様を繰り出してゐる。	終生青春を失はなかつた作者は、肉體をむしろ心と闘ひながら、青春の歩みに出會する戀愛、結婚、友情、思ひがけの死の問題を、目的地を定めぬ旅の愉しみを味ひつつ思索した。詩情と陰影の漂ふこの勝れたエッセイ集は若き男女に與へる彼の心からなる遺書と言ふべく、肉體を超えた苦行的純粹と睿智の光に輝く青春の書である。	中世にアラビア人の手で大完成された近中東の民間傳承で世界の一大奇書。物語の總數一六九、史話・架空譚・笑話等に分れ絢爛多彩、サラセン文化の粋は勿論當時の人情をも関連に寫し得て妙。少い原典譯中質量とも随一の定評をもち殊に從來抹殺されてゐた素朴な性愛描寫を復元した異色版。全譯は本邦嚆矢。挿繪他多数收録。	「六歳から六〇歳の子供」の好伴侶として、英語國民の日常生活のなかにとけこんでゐる童話文學の傑作。チェシヤ猫、氣狂ひ帽子屋、三月兔、まがひ海龜、ハートの女王、教訓好きの公爵夫人等、一癖あるものばかりが活躍し、全篇にイギリス人好みのヘイリーのユーモアが漲つてゐる。ケニエル畫伯の挿繪は天下一品の譽れ高いもの。	ルネッサンスほど近代人にとつて興味の深い題材はないが、ペイターがこの古典的名著「ルネッサンス」で行つたことは、近代人に見失はれた人間の恆久的な形象を明確に呈示することであり、その着眼の的確さと表現の精緻さによつて不朽の價値を保證されてゐる本書は、新しい時代の前途にある現代に最も現實的な意味をもつてゐる。

ワイルド
日夏歌之介譯

口

✧ メ

赤134

ワイルド
野川圭子譯

眞面目が肝心

✧

赤245

ワイルド
守屋陽一譯

幸福な王子

✧

赤15

ワイルド
菊池武一譯

ドリアン・グレイの畫像

✧✧✧

赤79

ワイルド
守屋陽一譯

柘榴の家

✧✧

赤77

ワイルド
田部重治譯

中記

✧

赤8

一八九六年パリ藝術連て初めて脚光を浴びてより今日まで變らない喝采を博してきた新派漫遊式劇「サロメ」は、もともとサラ・ベルナアル夫人に捧げるために作られたものであるが、まったく新しい感覚に基く盛り込みの近代劇的最大のスターダ・エフエクトを實現して近代劇の歴史に不朽の功績を築いた。ビヤツリーの描繪を併せて収めた。サスペンスで巧みに観客を引つける陳のない構成の美しさと、非現實的なまでに洗煉された臺詞のスタイルの魅力こそワイルドの戯曲の心髓であるが、この「眞面目が肝心」は、そのやうな裝飾藝術品としての形式美が、輕妙洒脫な遊説的臺詞と、胸のすくやうな場面轉換の快調さをもつて運ばれるワイルド喜劇の代表作である。

幸福と不幸、欲望と嫉妬、そして強さと弱さなど、様々な人間の心情の傷が、死の悲しみと愛の優しさの中にはのぼると歸られるこれらの重話は、朝の露も乾かぬヒースの花のごときすがすがしだけがその心を捉へたダンディの詩人オスカー・ワイルドが、自ら見出した最も容易で適切な自己表現の場に他ならない。

「反對ならいいんだ、いつでも若いのが僕で、年をとるのが嫌だつたら……」かうして青春と美貌を永遠に獲得したドリアンは、数々の享樂の果て、十數年経て再び自分の畫像の前に立つた。そして老の醜さと過去の罪惡とて見る影もない肖像を短剣で突通した時、彼は却つて自分の胸を突刺して死んでゐた。世期末唯美學の發言的傑作。

醜惡な身體に生れつた矮人が自己の醜惡に氣づいたときの絶望。いとしい戀人ゆゑに自分の靈魂を追ひ出す漁夫。苦しみのはてに訪れた幸せを抱いてはかなくも消えてゆく美少年。人間の不幸と、そして更にその不幸の性質を見逃さなかつたワイルドのこれらの寓話の隙間からは、あざやかな二十世紀的なものの光がさしてゐる。

象牙の塔よりグヘナの劫火に墮ちた人間ワイルドのヒューマン・ドキュメント。タイ・インズベリ侯爵を名譽毀損罪で訴へ遂に二年の懲役を判決された彼が、僧院のやうな圍園の生活の中で、ヴェルレーヌが「教習」に想ひを凝した如く、靜かな内省と思索を筆にのせた。この懺悔録には一代の才人の苦惱と傷心が生々しく吐露されてゐる。

バーナド・ショー 市川又彦譯 アンドロクリーズと獅子 赤371	ギョッセン 佐藤利吉譯 蜘蛛の巣の家 赤286	コンラッド 藤澤忠枝譯 文化果つるところ 全三冊 赤240—241	イー・エー・ツ 松村みね子譯 鷹の井戸 他二篇 赤309	D・ガーネット 龍口直太郎譯 動物園に入つた男 赤252	ストレイチイ 小川和夫譯 ヴィクトリア女王 赤266
諷刺と皮肉にみちた作風をもつて現代イギリス文學に獨自の光彩を放つバーナド・ショーの戯曲のうちでも、この「アンドロクリーズと獅子」は抱腹絶倒とも云ひうる作品で、ローマ帝國時代のキリスト教徒迫害を、最大の諷刺をこめて痛快に描き出している。ショーは必ずしも宗教を擁護するのではなく権力を諷刺するのである。	フロベールやゾラの影響を受けた作者は、下層中流階級の寫實的歴史家として、好んで社會の悲惨な面を描いた。自分の家をもつことを一生の念願にしてゐる蜘蛛の巣の家の住人に、家や財産をもつより畑を耕して暮らしたいと言はせるペシミズム、それは世紀末の文明裡に呻吟せる教養ある平凡人の苦悩の聲として我々にも身近である。	二十世紀文學に於る新コスモポリタニズムとして最も顯著な徴候を顯したのが、コンラッドである。一片の板切に命を託して海と闘ふ船業生活に新しい道徳を引入れて、前世紀の小説觀念を打破した海洋文學の第一人者は、大自然に生命の息吹を與へる事によつて島嶼の廢墟から鮮かに逃避文學を誕生させた。原題は「島の除け者」。	古色蒼然たるノールランドの傳統に培はれた薄明の詩人が、ケルト神話に發想する渾沌たる幻想と神祕の象徵世界を創出したこの作品は、我が國の能舞臺にヒントを得て創られたものとして有名であるが、貫しい風土に發する陰惨な雰囲気、縊の結末に埋れた荒井戸に、不老の水の湧く時を待つ老人のなかに見事に象徵されてゐる。	戀人との痴話喧嘩から動物園入りと志願する男を辭つて最も痛烈な合理的お伽噺。人の意表を突く荒唐無稽な物語設定の中に、動物園の檻が象徵する近代人の愛の斷絶が、その克服への祈りを秘めた強烈な諷刺を以て追求されてゐる。「ガリヴァー旅行記」以來の英國諷刺文學の傳統を見事に現代に生かした作者の傑作として有名である。	「よい傳記を書くのは、よい生涯を生きたのと同程度に困難なことだ」と告白するストレイチイが、それまでの傳記作者を尊厳里にたどへ、傳記を藝術に高めるために全身を賭けて書いたのがこの作品である。八十一年にわたつたヴィクトリア女王の性格と氣質が、作者の鋭い心理的洞察を通して、見事に浮彫りされてゐる。

息子と戀人 全三冊 上・下・中々々	母へのエディプス・コムプレックスに備む思春期の初戀から豐麗な人妻への企んだ性の放浪敘事詩。その基切は、母を失つたロレンスのフリーダを得るまでの暗黒の心境を傳へてゐるが、同時に作者が新しき出發の爲に、心を要する過去の亡靈、母の想出に捧げた挽歌をなしてゐる。彼の「文學」と「人間」を知る上に必讀の半自傳傳的傑作。
D.H.ロレンス 木下常太郎譯 處女とジブシー 他三篇 各々 赤182	フリーダとの結婚は生涯作者を悩ました心の凝てあつたが、性の神祕を描いた「處女とジブシー」は彼女の森通を正常化する試みの一つである。一次大戦後の處女の生活と性の觀念化を批判した「戀の道」、男女間の怪しい引力關係を象徵的に描く「二羽の青い鳥」、以上晩年の三篇と、初期の病的な迄に怪誕奇怪な「薔薇園の影」を併せ收めた。
オクス・ハックスリ 上田 勲譯 時は止まらねばならぬ 全三冊 各80圖 赤234—235	早熟の天才兒セバスタイアンを中心に多種多様な人物を登場させて現代社會の混亂を描きつつ、人生いかに生くべきかを追求した傑作である。作者生得の分析的、批判的な知性と、イギリス人らしいプラグマティックな考へ方が、神祕宗教的な言説の間から、執拗に顔を出して注目されるが、死後の苦悶を描く筆は異様な迫力を帯びてゐる。
ヴァージニア・ウルフ 鈴木 幸夫譯 波 各々 赤334	六人の男女を導く運命の波濤を、もつぱら彼等の内面的獨白を通して、心理的海面下の靜謐の底から深沈と突てた巧緻夢幻な管絃樂的傑作。「意識の流れ」の新文學方法は、この象徵敘文詩とも稱すべき「波」において純粹度の可能を極めたが、現代英文學屈指の國秀作家は、今次大戦中その餘りに繊細な神經に耐へ切れずウイズ河に投身した。

〔アメリカ〕

アーヴィング
田部重治譯
スケッチ・ブック
赤274

ホーソン
福原麟太郎譯
緋文
字
赤118

ボウダン・ボウ
佐々木直次郎譯
アツシヤア家の崩壊
他九篇
赤85

ボウダン・ボウ
佐々木直次郎譯
モルグ街の殺人事件
他二篇
赤350

ソロー
富田彬譯
森の生活
ヘーデルマン
赤210

英米文學に携はるものが最初に讀むべきものとなつてゐる「スケッチ・ブック」は、アーヴィングの最も有名な代表作であるが、そこにあらはれた思想はきほめて健全であり、ヒューマニスティックであり、そして變化に富んでゐる。讀者は本書を通して英國を知ることができ、またアメリカ人の英國に對する感情をうかがふことができる。十七世紀のボストンを背景に書かれたこの小説は單なる歴史小説ではない。人間の無常と悲哀を象徴的に描きながら、ホーソンは永遠の人間の魂の問題を追求したのであつて、不義のしるしとしてヘスタアの胸に烙印された緋文字Aこそ、ホーソンの創作意識のなかに長い間宿されてゐた罪の意識の象徴に他ならない。

憂愁と恐怖と怪奇な詩的幻想に溢れるボオの作品は、すてに一世紀近くをへた今日なほ新鮮な魅力をもつてユニークな光輝を放つてゐるが、本書は、ボードレール、マラルメなどフランス象徵派の詩人をはじめ、英獨露の世紀末文學に深い内面的な陰翳を投げ與へたボオの代表的傑作をあつめた短篇集である。

現代が痛切に悩み、その超克を迫られてゐる近代精神の悲劇を、一世紀離れて自己の宿命の劇として演じたボオの推理小説は、妥協を容れぬ厳しい藝術的氣品をもつて現代人の感受性に強烈に訴へてやまないが、ここに收められた三篇の作品には、さうしたボオ文學の特質が、恐怖と戦慄のうちに見事に形象されてゐる。

十九世紀の前半に生きたソローが、二年あまりをコンコード町から一哩半ばかり離れたウォールデン池畔の森に自らつくつた小屋の中に住んだ生活経験の詳細な報告書である本書には、ギリギリの條件にまでひきおろされた状況における人生の意義が根源的な深さのなかに追求され、機械化された近代文明への鋭い批判がある。

オルコット
吉田勝江譯

若草物語

四少女 第一部

☆☆☆☆

赤12

南北戦争に特志着禮婚として奉仕したオルコット女史が、一書店のもとに應じて自らの少女時代の思ひ出を綴つたのがこの「若草物語」であるが、生涯孤獨のうちにひたすら家族の幸福を念じて文筆に親しんだオルコット女史の慈愛ゆたかな詩情が、逆境に打ち克つて幸福をかちとる美しく涙ぐましい物語を通して人々の心を強く打つ。

オルコット
吉田勝江譯

續若草物語

四少女 第二部

☆☆☆☆

赤13

「この事が再び引き上げられるか否かは、ひとへにこの「リトル・ウーマン」と呼ばれる家庭劇第一幕の評判如何による」、と結んだ前篇のすばらしい評判にはげまされて書いたこの續篇は舞臺もニューヨークからヨーロッパへと繰り續けられ、現實性に富んだ登場人物たちの喜びや悲しみは、ひしひしと讀むものの胸に迫るものがある。

オルコット
吉田勝江譯

昔氣質の一少女

☆☆

赤52

南北戦争直後に材をとり初めて都會に出た一少女ポリーが、戦後のめまぐるしい新風潮に眼をみはりながら、さまざまな體驗をへてゆく物語である。ポリーは多くの缺點もあれば情みもある人間的な一少女に過ぎないが、その純情で昔氣質のひとつとなり、年代と場所をへだてて今日のアプレ・ゲールの風潮に健康さを投げ與へてあらう。

オルコット
吉田勝江譯

昔氣質の一少女

☆☆

赤53

「昔氣質の一少女」が發表されるや異常な反響と共感を呼んだが、その要望に應へて更に書きあげたのがこの小説である。前篇よりもやや年長の少年少女を対象としてあるが、オルコット女史の才筆はこどもユモラスな美しい物語を描き出して、最後の章に至るまで巻をおかずによりと胸をはずませ、ためいきをつかされる。

マークトウェイン
佐藤利吉譯

トム・ソーヤーの冒険

☆☆

赤155

新しく開拓されたアメリカ大陸の新鮮な空氣と粗野な生活のなかに、ゆかしい人情と面白い迷信につつまれて、生々として成長し、冒險し、發達してゆく少年たちの姿がのびのびとした筆致で描かれるこの小説は、同時にまたあらゆる國、あらゆる民族の少年に共通するものを含んでゐて、世界文學にユニークな位置を占めてゐる。

マークトウェイン
寺井康雄譯

王子と乞食

☆☆

赤172

マークトウェインの代表作の一つであるこの小説は、歴史的ロマンスで、王子と乞食がその身分をしばらく置換へ、峻厳苛酷な國法に悩む貧民と、煩はしい威容儀禮に苦しむ王者とのそれぞれの立場から世の中を見直すといふのが一篇の骨子をなしてゐるが、四百年前の英國の習俗がリアリステイックに描寫されてゐて興味を惹ききない。

ヘンリー・ジェームズ 藤澤忠枝譯 女相續人 (ハウシントン・ スクエヤー) 赤11	バーネット 松原至大譯 小公子 赤335	ジャック・ロンドン 山本政喜譯 荒野の呼び聲 赤224	ジャック・ロンドン 山本政喜譯 白牙 赤239	ドライサー 村川隆譯 黄昏 (ヘキヤリ) 全册 赤337-338	ヴィンキー・パウム 藤澤忠枝譯 ガラスの城 赤294
舞踏會の夜、囁くばかりの美青年に少女の胸は妖しく震へた。父の烈しい反対、悲戀、更に父の死と、身を切る不幸を背負つて歩むキャサリン、彼女の成熟した眼に再び現れた中年の美貌遊蕩兒は最早何の感興も起さぬ。永遠の戀を胸に、美しい心の空虛を踏み堪へて生きる女心の繊細な葛藤を浮彫にして、アメリカ文學開花期を彩る傑作。	深く閉された因習のなかにて悲運と不遇をかこつた小さな老侯爵に、天使の如く純真な小公子を配して展開されるこの美しい物語が、國境を越えて、今日なほ名作として世界の多くの人々に親しまれるのは、そこに人間の正しい愛情が美しい筆で力強く表現されて、讀む者の魂を清め心を高めずにはおかないからである。	飼犬のバックがふとしたことで誘惑され、金儲けのクロンダイクへ連れて行かれる。様々な人に苛酷な仕打を受けるがその訓練に堪へて雄犬として成功し、つひにやさしい主人を得て名犬振りを發揮するが、「野性の呼び聲」にさそはれて再び荒野に身を投ずるといふ物語りて、動物の一生に人間の生き方を描いた作として有名である。	犬の血の混つた狼の仔が、最初はインディアンに、後は白人に飼はれて段々と飼犬にならされてゆく。アラスカの酷烈な大自然を背景としてそこに住む動物と人間の生態が激刺と描かれてゐるばかりでなく、金儲けをめぐる人間の生活の明暗が見事に浮彫りされてアメリカ社會主義小説の先驅をなす名作である。	前世紀末の變動期のアメリカ社會を背景に、その社會的矛盾にあへぎつつ非情な人間關係の深みに落ち込んでゆく近代人の宿命的な悲戀を描いた自然主義文學の巨篇で、可憐な女優キャリと、つひには無名の共同墓地に眠らねばならなかった中年男の戀が、崩れゆく黄昏の薄光にも似た思ひづまる世界に描かれてゐる。	「男には解らない」といふ原名のこの小説は、ガラスの城に象徵される底知れぬ神秘的な女の情熱と心理がコスモポリタンの青年との束の間の戀に美しく描かれる。「昨日私は家にゐた、今日はパリ、そして明日は一體どこにあるのかしら。」ふと眩く人妻の嘆息の中にお互に理解し合ふことの出来ない宿命的な人間關係の冷さを匂はせる。

アンダソン
飯島淳秀譯

夜の逢ひき

赤289

フォークナーやヘミングウェイの大先輩格の作家たるアンダソンが、第一次世界大戦後の虚無思想を背景に、「チャタレイ夫人の戀人」を思はせる若き人妻と園丁の妖しい本能の呼び合ひを描き、現代文明に毒されたインテリゲンチヤの精神的・肉體的インポテンツを劇化した内容形式共に興味深い特異な作品である。

ウィラ・キャザー
龍口直太郎譯

別の歌

赤362

素朴な現實のうちに意義をもつ光點を選ぶ、いはば選擇的リアリズムともいふべき技法に立つウィラ・キャザーの文學は、素材のうちに自分自身を全的に投げ出して行くことをその特色とするが、この「別の歌」は圓熟の極に達したキャザーが、その内面生活に近い音楽の世界をテーマとし、女性の眞實を美しく歌ひ出してゐる。

E・ウイルスン
大貫三郎譯

アクセルの城

赤268

《想像力文學の研究》
☆☆☆☆

ヨーロッパ文學をして世界文學たらしめる推進力となつた今世紀の偉大な作家たちを象徵主義の系譜のもとに浮彫にした本書は、象徵主義の傳統に關する最も大膽にして秀れた構想になる現代ヨーロッパ文學の批評の書である。ここに論ぜられてゐる作家は日本でも多く讀まれてゐるが、それらの作家についての明確な概念が與へられる。

ヘミングウェイ
龍口直太郎譯

殺人者・狩獵者

赤269

ここに收めた「殺人者」「狩獵者」「世の光」はヘミングウェイの作家經歷における三つの道標ともみなさるべき作品であるが、とくに「殺人者」は壁によつて象徵される死と、救ひのない作者のニヒリズムが短い會話によつて一分の隙もなく組み立てられた名短篇であり、「狩獵者」は「キリマンジャロの雪」と並び稱せられる傑作である。

ヘミングウェイ
龍口直太郎譯

キリマンジャロの雪

赤221

キリマンジャロといふアフリカの高嶺にエソと呼ばれる病氣にとりつかれた作家ハリが愛人の看護をうけつつも、酒をあふつては過激な女や、戦場や、パリの街々の追憶にふける。藝術家としての苦惱を通して、愛と死の問題に深く觸れたヘミングウェイの最高の作である。他に代表的短篇六篇を併せ收めた。

コールドウェル
杉木喬譯

莓の季節・秋の求婚

赤237

アメリカの南部、ジョージヤ州の荒廢した土地——そこには白人小作農がほとんど原始的な生活を営んでゐる。しかし果樹園や畑、野原や森に眞晝の陽光を浴びていささかも醜態を興へない彼らの戀愛、といふよりも欲情は微笑ましいユーモアに包まれて、青春の真觀を奏でながら繰り續けられる。短篇作家としての技術を示す佳品。

コールドウェル 北村小松譯 タバコ・ロード もやもや 赤357	スタインベック 角邦雄譯 戦後ソヴェート紀行 々々 赤48	プロムワイールド 大久保康雄譯 雨季來る 全三冊 上々々々 赤352—354	ローリングズ 大久保康雄譯 物語 全二冊 各々々々 赤355—356	
棉栽培の王國と言はれるアメリカの西南部、ジョージヤ州を舞臺として、棉の栽培が不可能になり生活の手段を失つた農民の悲劇を描いた小説である。土地への愛着からあくまでも不生産的な土地にへばりついて、つひに産業文明に屈服して餓死する主人公の悲劇は、日本の讀者にも切實な何ものかを訴へずにはおかない。	鐵のカーチンの彼方に生きる民衆の肌に觸れようとしたスタインベックが、報道寫眞家ロバート・キャパと共にモスクワ、キエフ、スターリングラードからウクライナの地方まで旅行した紀行であるが、中正な立場に立つて戦後ソヴェートの實狀を見聞したまま率直に書いてゐる本書は、我々日本人にとつても大きな意義を持つてゐる。	インドの西部に「ランチプール」なる架空の王國を設定し、そこに住むイギリス人、アメリカ人、ヒンズー人、回教徒など多數の民族を離れせつて虚無的なイギリス貴族と、淫蕩不倫なブルジョア未亡人と、無邪氣で一本氣なアメリカ人と③三角關係を中心に、自然の暴威のもとに白人とインド人が觸れ合う過程を描いてゐる。	イギリスで「百萬人に讀まれ愛される書」と言はれ、この小説は一九三八年度のピューリッツァア文學賞を與へられ、各國語に翻譯されてゐるローリングズ女史の代表的傑作であるが、フロリダ山間の矮樹林に住む開拓農民の家庭を描き可憐な少年の仔鹿に對する愛情をうつして、年齢や階級を越えて何人にも深い感動を與へずにはおかない。	

〔その他〕

ロンドン
オース
英 茂一譯
ダフニスとクロエー
（牧人の戀
がたり）
赤51

番匠谷英一譯
アンデルセン 童話集 I
赤45

番匠谷英一譯
アンデルセン 童話集 II
赤46

アンデルセン
川崎芳隆譯
繪のない繪本
赤14

ヤコブセン
山室 靜譯
死と愛
（ニイルス・リイネ）
赤97

世界における田園小説の嚆矢としてラヴェルの音楽にも知られる名篇。女詩人サッファ
オーの島レスボスを背景に羊飼の少年ダフニスと少女クロエーの確な心に育まれた優
しくも清らかな戀の物語。田園の四季の描寫にまた自然な會話の巧みに、美しい抒情
とリアリズムとを併せる此の小説は、紀元三世紀の修辭學者ロンゴスの作と傳へらる。

アンデルセンは汲めども盡きぬ愛の泉である。彼の童話は、大人をも子供をも、男を
も女をも喜ばせる。彼の童話からは、年ごとに境遇ごとに、限りなき慰樂の泉が湧き
いでる。ひからび、すさんだ此の世において、まことにこれは精神の糧である。第一
集には最傑作「瀧指姫」の他「赤い靴」「みにくいあひるの子」等十三篇を収む。

「わたくしの一生は、そのままで、立派なお伽話です」と自傳の冒頭に書いたアンデ
ルセンにとつて、その多くの傑作童話が自叙傳風に見えるのは當然であらう。幼いこ
ろ、木箱に生えた豌豆の成長を、花園のやうに楽しんだ経験の記録から得た傑作「さ
やからとび出た五粒のえんどう豆」の他、「人魚姫」「白鳥」等十一篇を収む。

演劇俳優を夢みて志破れたアンデルセンの孤獨な生活から生れた美しい童話。月が世
界の旅をする間に見た三十三夜の物語は、人間の悲しみに深く觸れ、人々を深く感動
させずにはおかぬ。物語の内容は高名な旅行家だったこの「童話の王様」の體驗を材
料とし、豐饒な想像力の裏は故國デンマークからヨーロッパ、印度、アメリカに飛ぶ。

ヤコブセンはユーラン半島の小都市ティスタッドに生れ、北歐の小國デンマークに出
て、二つの長篇「マリ・グルッペ夫人」「死と愛」と少數の短篇を残しただけで早逝し
たが、今日では世界文學の中に北方の星としての地位を得た。殊にリルケの傾倒は周
知。生に對してさうであるやうに死を冷靜に雄々しく受取らうとする美しき魂の書。

ヤコブセン 山室 靜譯 ここに薔薇あらば 他七篇 赤80	イブセン 島村抱月譯 人形の家の家 赤169	イブセン 菅原 卓譯 民衆の敵 赤208	イブセン 植山正雄譯 ヘッダ・ガープレル 赤192	ビュルンソン 山室 靜譯 日向丘の少女 附・掌聲集 赤186	ストリンドベリ 植山正雄譯 令嬢ジュリ 赤178
世界文學の中に美しい光をはなつ北方の星として、詩人リルケをして深く傾倒せしめたヤコブセンの文學は、その作品の印象主義的なタッチの爽やかな新しさと完璧さをもつて、北歐文學にひとつの天啓的な花を咲かせたが、ここに収めた諸篇はその習作時代のものから遺稿まで、数少ないヤコブセンの作品の珠玉の集成と言へよう。	イブセンの社會劇は多く問題劇で、「人形の家」はすなはち婦人問題を材料にした劇であるといふ。事實、ここには婦人の解放、婦人の獨立、婦人の自覺、男女對等の個人としての結婚、戀愛を基礎とした結婚といふやうな問題が含まれてゐる。が、ノラをして夫を棄て家を去らしめるこの「近代劇の父」の目的は現實の人間描寫にあつた。	近代劇の父と言はれるこの作家の憤りを爆發させた代表的社會劇である。しかしこの作品が半世紀後の今日にも生き生きとしてゐるのは、大衆と個人との對立を主題として追ひつめてゐるためである。さればこそ、ここに譯出した臺本により日本全國の都市を遍つた「民衆」の公演は、異常な歡呼をもつて迎へられたのだ。	「海の夫人」から二年を隔てて一八九〇年の夏、イブセンの外國流型時代最後の作として書かれた此の戯曲の意匠について、作者自身「一個の人間としてのヘッダが、夫の妻としてよりも、むしろ父の娘として見らるべきことを示し」「人間と、人間の情緒と、人間の運命を描かうとした」と語る。舞臺技巧にも愈々圓熟を見せる名作。	これは早く「藥の處女」として譯されたノルウェーの文豪ビュルンソンの處女小説。大づかみて素朴な筆致をもつて描く、北歐の森羅で美しい自然を背景に繰り演ぜられるこの清純無垢の愛の物語が、これに續く「アルネ」「幸福な少年」と共に青春文學の代表として世界の人々から親しまれてゐるのは詩人が魂の底から書いたためである。	合體ジュリーの悲惨な運命を、作者は、母親の本能、父親による誤った教育、彼女自身の本性、弱い退化した頭腦に影響を與へた婚約者の示唆等によつて動機づけた。しかし戯曲の主題は、二つの性、二つの階級の闘争に盡きるものであらねばならぬ。五十有餘にのぼるストリンドベリーの戯曲中、主要なレパートリーとして數へられる。

ラーゲルレーフ
佐々木基一譯
地主の家の物語
赤184

ラーゲルレーフ
石丸解雄譯
沼の家の娘
他三篇
赤98

シェンキーウィッチ
木村毅譯
クオ・ヴァデイス
全三册
上・下々々々 中々々
赤126-128

ワシレーフスカヤ
錢一平譯
虹
赤183

ダモンチオ
鹽田武譯
死の勝利
《童叢小説》全三册
各々々々
赤159-160

潘松
増田涉譯
聊齋志異
中國千夜一夜物語
赤173

一九〇九年女性として最初にノーベル文學賞を受けたラーゲルレーフの存在は、凡ゆる主題が問題性を帯び近代文學の潮流の中で、一つの「奇蹟」である。自分の土地に對する度外れた愛着のために、自らを犠牲にしてしまふ此の物語は、北歐の古い物語（サガ）の近代への復元であり、夢と神祕と傳説への無邪氣な信仰なのである。

本書はスウェーデンの偉大な女流作家ラーゲルレーフ女史の深い郷土愛とおほらかな人間愛とから生れた傑作中の傑作で、北歐の霧深い大自然を背景に信頼と純愛に結びつく若いスウェーデン農民達の眞摯な姿を、心にくいまでに描いてゐる。他に好短篇の「靈魂の手」、「わが生涯の思ひ出」、「輕氣球」等三篇を添へた。

使途ベトロがネロ帝の迫害に堪へえずして羅馬を去らんとする途中キリストの幻影に逢ひ、再び羅馬に歸つて殉教する此の小説の終局は、暴君ネロが自殺して、精神的にはベトロの勝利になつてゐる。本書はまた、歐洲文明思潮の二大基根であるヘレニズムとヘブライズムの對立衝突を、根柢的に解明した點からも、名著と仰がれてゐる。

ソヴエート文學史に於て古典的位置を占めてゐる「虹」は、第二次大戦のさなかソ連にとつて正に危機の絶頂と思はれた時期にあらはれた作品であるが、作者は熟練の外科醫もおよばぬメスの牙を示して、強烈な藝術の説伏力を縱横にふるひ、よくソヴエート人の屈服せぬ魂をつかみ出して、高く勝利への凱歌をあげてゐる。

イタリア語の魔術師といはれるダモンチオの代表作としてイタリア文學史に不朽の名をとどめるこの作品は、美しい南イタリアの山野と海に繰り展げられた光と香と音の祭典である。情熱のイタリアの太陽と、沈思の南海の月光が變化自在の言葉で愛と死のメロデイを奏で、人間を拒みつづける偉大な自然が美しい幻を展開する。

世界に聞えた中國の怪異譚より十八篇を厳選。狐狸や幽霊や鳥や昆蟲や花の精や仙人等が人間界に現はれ、人間の姿や感情で戀愛し哀歎し、また忽然として本來の性と世界に立ち戻つたりする、不可思議にして神祕縹緲なる物語。その構想の天外、登場者の多彩、その文章の流麗はまさに「アラビアン・ナイト」に比肩しよう。

鈴木柳郎先生遺稿
實業界泰斗信一

老舍

四世同堂

第一部

全二冊

各々々々

赤302-303

生粋の北京人として露骨な諷刺的な異色ある作風を以て知られる老舍の文學は、紅樓夢、兒女英雄傳等の古典的作品と並んで、現代中國文學の代表をなすものであるが、古都北京の人情世態の中から新舊思想の矛盾をつかみ出し流麗な北京語を縦横に駆使して独自の文體を創造したその表現は現代北京語の典型と謳はれてゐる。

宗教・哲學

内村鑑三

歡喜と希望・愛吟

青48

「歡喜と希望」は天然・交友・傳道の歡喜と善人救済説と天國の希望とを語り、愛吟は著者が愛誦した二十七篇の英米獨伊の翻譯詩である。花を語り友を語り、傳道の喜びと神の救ひの喜びとを説き、人生と天國を讚美してやまない獨立獨歩の内村鑑三の深い信仰と豊かな詩心とが、この小さな書物に結晶してゐる。

内村鑑三

所感十年

青5

本書は著者の主宰した宗教雜誌「聖書之研究」の巻頭に毎號連載した短文を自選して一書となしたものである。神・聖書・信仰・愛・天國・傳道・天然等の二十項目にわたつて著者の思想を隨筆風に述べ、著者自ら「眞理の直覺なり、天國の瞥見なり、信者の朝の夢なり」と言ふ。詳細な目次と著者の年譜を附してある。

内村鑑三

キリスト教問答

青60

本書は膝を交へて語り合ふやうな平易な問答體で來世・神性論・聖書・三位一體・教會・原罪・奇蹟等のキリスト教の根本問題を説く。宗教家・詩人・人道主義者たる著者の稀有にして深刻な體驗と信仰、天賦の英才と學識のすべてを傾けて日本的キリスト教の土臺を据ゑたカナキズムである。

山本泰次郎解説

内村鑑三

一日一生

青51

ボーガツキーの「賣の櫃」に範をとり「一日は貴い一生である。一日を有効的に使用するためには神の言を聴き神に祈る事より始めるにある」と自著十八種中より短文を自選し、これに適切な聖句を附して三百六十五日に配列したもので、應接に暇なき多様性をもつて朝ごとに讀者を考へさせ、勉め、力づける。三十頁に及ぶ解説を附す。

内村美代子編
山本泰次郎編
内村鑑三

非戰論

青72

日清戦争には主戦論の急先鋒であつた著者は、日露戦争には敢然非戦論を高唱して世を驚かせた。本書は著者が非戦論者へ轉じた由來、日露・歐洲大戦時に唱へた非戦論、非義論の原理、世界の平和はいかにして來るか等この日本非戦運動の先驅者の非戦・平和論文五十篇を集め時代別・内容別に編輯したもの。

山本義次郎譯

内村鑑三の生涯

—ベルへの手紙—
ややや

青62

内村鑑三が生涯四十年にわたつて米國の親友ベルに送り續けた百八十四通の私信（英文）を骨子として、近世日本の漢語者の人・生涯・信仰・事業を描いたもの。書簡文學者でもあつた彼の手紙はそのまゝに生きた自然體となつてゐるが、編者は更に各種の資料を肉付けし、時代を背景としてこの偉人の全貌を浮彫りにすべく努めた。

内村鑑三
石原兵永譯

日本の天職

—世界に訴う—
やや

青77

著者はイエスと祖國日本との二つのJを終生熱愛し續けた人である。本書は彼が晩年發行せる英文雜誌「インテリゲンサー」所載英文の全譯。彼の全生涯にわたる信仰體驗を語り、信ずる福音の光に照して日本の最善を世界に紹介し、日本に課せられた世界史的使命を述べて廣く世界の讀者に訴ふ。

鈴木大拙

禪とは何か

やや

青138

これはありふれた概説書ではない。その根柢をなしてゐるものは著者の深い禪經驗であるが、初めて禪を學ぶ人の入門書であると同時に久しく禪を學ぶ人の入門書でもある。禪に參ずるには何よりもすぐれた師と書物を持つことが必要であるが、この書を永遠の入門書として幾度も味讀することによつて禪とは何かが明白になるであらう。

鈴木大拙

無心といふこと

やや

青130

佛教の見方と考へ方、とくに禪の世界を説いて本書ほどわかり易く親しみやすい書物は他に類を見ない。世界的な佛教學者である著者が、その深い學識と自らの禪の體驗を自由に活かして、講話風に説いたもので、佛教を知らうとする者は、まづ本書をひとくちの一番の近道であるときへいはれるほどの古典的名著である。

下村湖人

論語物語

やや

青80

本書は論語の中のいくつかの章句を骨子に、二十八篇の夫々に獨立した短い物語を構成し、物語の進行中隨所に他の章句を對話その他に引用しつつ、孔子とその門人達との人間的交渉を描いた。論語は心の書であるといふ考への下に、次郎物語の作者はそれを現代人の意識で讀み、現代人の心理で解剖した。

高神覺昇

般若心經講義

やや

青65

佛教の根本思想は「空」であり、「色即是空」「空即是色」なる「空」の二方面、否定と肯定、無と有との辯證法的統一を論じたのが「心經」である。佛教學者であると共に近代西歐哲學の素養をもつ著者は、古今東西にわたる實例により「空」の意義を平易に説き、「空」の認識に重大な關係をもつ「因縁」をも併せて論じてゐる。

友松 國詩

法 句 經 講 義

青131

同上 敬太郎

新 聖 書 講 義

青58

關根 文之助

聖 書 の 讀 み 方

青133

山本 光雄 譯

宴

宴 — 戀について —

青59

山本 光雄 譯

ソクラテスの辯明

他一篇

青114

關根 秀雄 譯

モンテーニュ 隨想錄抄

青7

自由と享樂の氾濫に憤む人々に、禁慾と節制のきびしい倫理を明示しようとの愛の心から、ラジオ放送を通して連續的に講義されたのが本書であるが、ここに聞く佛教は、西歐思想を一度通りぬけてきた現代佛教であつて、ここでは釋尊は詩人として、教育者として、生きた人生指導者として登場し、しかも永遠不易の眞理を説いてやまない。

これは聖書の註釋書でもなければ教義の研究でもない。現代の文藝批評界にユニークな地位を占める著者が、自らの内面的な苦惱と問題とをひきつぎて聖書の前に立ち、その心眼に映じたキリストの影像と精神とを淡々と綴つた批評の書である。ここには著者の批評の精髓が示されるところに、またその現代に對する批判をなしてゐる。

長年にわたつてキリスト教教育の仕事にたづさはつてきた著者が、誰にもわかるやうに聖書の讀み方の手引きとして書かれた本書は、歌人である著者の流麗な文章とあひまつて、さながらに聖書そのものにふれる思ひを抱かしめる。聖書の各書の簡明な解説に、聖書の眞髓をつたへる名句の説明が添へられ、最も手頃な聖書入門となつてゐる。西洋哲學の祖であると同時に卓越した詩人プラトン壯年期の代表的名著であるこの書は、プラトニック・ラヴといふ呼稱の源泉である戀愛觀が、當時のギリシャの知識人たちの口をかりて、さまざまの形で展開され、まさに戀愛論の聖典ともいふべき不朽の意義を持つてゐる。なほ有名なイデア論がはつきりと示されてゐる。

「ソクラテスの辯明」は法廷においてせられた罪狀に對するソクラテスの辯明を描き、「クリトン」は死刑判決後牢獄にあつたソクラテスに脱獄をすすめた老友クリトンとの對話を描いたもの。いづれもプラトン青年期の情熱的な傑作で、師に對する永遠の慕辭銘であると同時に、人類に残した貴重な教訓である。

戦争とか革命とか何かの形でフアナチズムが頭をもたげるとき、いつも人々に失ひかけた良心と理性を取り戻させ、何れの側にも捲き込まれない眞の個性、眞の自由を教へてくれるこの「エッセー」は、十六世紀フランスの生んだ偉大なるモラリスト、モンテーニュの手になるヒューマニズムの聖書である。

デカルト 小場瀬卓三譯 方法序説 青22	パスカル 津田 穰譯 愛の情念に關する説 他一篇 青 4	ヤハマン 木場深定譯 カントの生涯 青63	フイヒテ 小野 浩譯 ドイツ國民に告ぐ 青87	カ 川 昇譯 實踐理性批判 青64	ショーペン 石井 正譯 哲學入門 青112
「眞理を認識する能力は凡ての人に平等である」ことを標榜して、一切の外的權威を否定し、思想の獨立を宣言すると共に、あらゆるものを疑ひつくし、つひに有名な「我思ふ故に我在り」の第一原理を發見する経緯を書き綴つた思想的自叙傳であり方法的懷疑の書である。其後發展するデカルト哲學の萌芽は總て本書に包含される。	「パンセ」の著者として何人も知らない者のないフランス十七世紀の最大の思想家パスカルが、體驗と觀察にもとづいて戀愛の心理と眞實を覺悟風に記録したこの書物は、モラリストとしてのパスカルの面目躍如たるものがある。他に「パンセ」を解く鍵といはれる彼の宗教觀のエッセンス「サーシとの對話」を併せて譯出した。	思想において偉大であるのみでなく、又人間性においても偉大であつたカント。「自ら救へた通りに生きた」といはれるこの不滅哲人の全生涯を、「その人間らしさのまゝに」描き出した愛弟子ヤハマンの「イマールヌエル・カント」と、殊にこの哲人の晩年に親炙したヴァン・ランスキの「カント終焉記」とを収める。	カント哲學の矛盾を克服して、自我の方向において究極のところまで徹底せしめた主觀的觀念論者フイヒテが、ドイツ帝國の崩壊に際して發表した愛國の書。祖國の危急を前にして語る彼の言葉は、焰の門を漕ぎ抜けた現在の日本のために用意された叱咤激勵であり、その氣魄は讀者の胸を深く打つに違ひない。	これはカントが人間の眞に尊嚴である所以のものへの深い洞察に基き道德行為の先天的要素を闡明してその認識の體系を展開した倫理學史上不朽の古典であり、その精緻な理論の背後には敬虔な道德的人格が在つて、常に人間の道德的勇氣を鼓舞する永遠の書である。懇切な註釋と索引を附して讀者の理解を助けた。	その最良の弟子ニーチェが何よりも「教育者」として論じてゐるやうにショーペンハウエル（一七八八—一八六〇）の著作は啓蒙的で眞に生きる道を教へる人間教育の書であるが、本書は哲學とその方法から筆を起し、辯證法、物自體、神の問題に至る哲學の諸問題を系統的に平易に説いた生きた哲學入門である。

石井 立輝

女性に ついて

青50

石井正・石井立輝

幸福について

青125

秋山英夫

反時代的考察 全二册

各々々々

青24-25

秋山英夫

この人を見よ・アンチクリスト

各々々

青26

秋山英夫

偶像の薄明 他二篇

各々々

青27

佐藤通次

ツアラトウストはかく語りき 全三册

上々々 中・下々々

青28-30

「女性の敵」これが本書に對して女性から上つた批判である。一見奇矯な偏見に充ちたこの女性論は、しかし鋭く女性のすべてを衝いてゐる。男性にとつて永遠の謎、とはいへ生涯の伴侶たるべき女性について、これほど明らかに眞實を語つた文章はない。青年にとつて女性神祕化へ冷水を浴びせる解毒劑の意味を持つ。

ショーペンハウエルのアフォリズムの中心をなすこの書は、彼の主著「意志と表象としての世界」の縮刷版ともいふべく、人生のあり方と生き方について、獨特の調子をもつて敘述しながら、ほんたうの幸福の所在を明示したもので、從來多くの譯文がある中で、本書ほどショーペンハウエルの眞意を正しく傳へるものはない。

哲學者は「反時代的」存在であり、一種の怖ろしい爆發物に他ならぬといふニーチェ（一八四四—一九〇〇）特有の在り方を極めて鮮かに現した書。上巻は「生の立場」から「文化俗物」と「歴史病」に對する憤怒を、下巻は教育者ショーペンハウエルと藝術家ワーグネルに對する頌徳表である。譯註、解説と懇切な索引を附す。

運命的使命の不可抗力から来る息詰るナンボの裡にも一種不思議な風日和の長閑さを湛へたニーチェ文學最後の結晶である「この人を見よ」はゲーテの「詩と眞實」と並ぶ世界自傳文學中獨特の位置を占める運命的書。「アンチクリスト」は總ての價値の價値轉換の立場からヨーロッパ精神の基底であるキリスト教を批判した作品。

發狂の前年におけるニーチェの異常な著作活動中の三篇——「あらゆる價値の價値轉換」といふ彼特有の立場から從來のすべての理想を偶像として斷罪し、ニーチェ哲學の異端性を集約的に示した「偶像の薄明」及びワーグネルのアカダニス性を痛撃した「ワーグネルの場合」「ニーチェ對ワーグネル」を収める。

概念をもつて思索することを嫌惡し、思想を形象によつて藝術的に表現することに終始したニーチェの最大傑作であるこの書には、彼が最高の情懷の標的とした人間の理想像と、みづから觀照し感受せる生の本質とが、響のよい律動的な文體をもつて敘述せられ、ドイツ文學中他に比類を見ない獨特の音樂的作品となつてゐる。

小野 浩譯
わが生涯より 他六篇
青31

ニ 一 チエ
小野 浩譯
悲劇的 時代の哲學 他八篇
青32

ニ 一 チエ
浅井 眞男譯
人間のなまりに人間のなま
全三册
上
青33—34

ニ 一 チエ
原 佑譯
權力への意志 全三册
上
青35—37

シエ ストフ
河上 徹太郎譯
虚無よりの創造 他二篇
青70

シエ ストフ
中山 省三郎譯
勝利と敗北 生涯と藝術
青101

まさに終らんとする少年期を概観した自傳的小篇「わが生涯より」を始め、彼の生涯の方向を決定したギリシャ觀の基礎的布石を劈出し得んがために「ホメロスと古典文獻學」「ギリシャの音樂劇」「ソクラテスと悲劇」「ディオニュソス的世界觀」等の六篇を収めた。いづれも本邦初譯である。

「離れぬ神」を求めて古代に對決したニーチエの語るところは、同時に自己における古代についてであつた。彼は進取の情熱に燃えながら古代において自己を發見し、一切の近代的偶然性を振り落して哲學と時代に對決しつつ、生涯の鑛石をきづいて行つたが、本書はこの間の消息を語る七篇に若き彼の風貌を示す傳記的二篇を添へた。

ニーチエがヨーロッパ的な思想家として迎へられたのはこの書による。傳統と流行と因習に對する最も果敢な戰闘の書。いはゆる「精神の生體解剖」によつて文化と生のあらゆる問題に假借なき認識の刃を向け、人間性を徹底的に批判して、かへつて新しい意味での人間性を探究し、その再建を目指した尖鋭なチフオリズメン。

本書は「すべての價値の價値轉換の試み」と副題された彼の理論的主著。元來は膨大な未完の遺稿断片が實妹の盡力で整理されてなつたものだが、收められた断片の一つ一つは底知れぬ暗示力に迫つてくる。本書によりはじめて彼の思索の廣さと深さ、その問題の所在が正しく理解され、彼の思想の全貌にも接することができると。

シエ ストフの叫びは理性の權威の陰に眠るパリスイ的怠惰と偏激への攻撃である。實證主義に啄ばれた人間性の殘骸、即ち「地下室の人間」の代辯者として彼等の存在を主張するシエ ストフは、チエーホフの理性の破産した「虚無からの創造」を説明し、パスカルを論じては世の終りまで情むイエスの苦惱を知らぬ合理主義者に警告する。

世紀末的虚無思想の一典型であるシエ ストフが、健康で常識的な時代思潮に反逆して書いた一連の文學論の一つ。イブセンの若い時の作品から年代順に論じ、作中人物の不條理な宿命を追及して、イブセンといふ「悲劇人」を完成したものである。シエ ストフのものとしては珍しく解説的で、實存主義の先達として今日の意義がある。

キエルクゴール
井上良雄譯

イエスの招き

—キリスト
教の修練—
☆☆☆☆

青102

ヒルタイ
正木 正譯

悩みと愛と幸福

☆☆

青140

石川 湧譯

幸福論

☆☆

青19

アラン
原 亨 吉譯

海邊の對話

—悟性の探求—
☆☆

青75

B・ラッセル
栗原 孟男譯

自由への道

☆☆

青96

堀 秀 彦譯

B・ラッセル 教育論

☆☆

青113

「死に至る病」の第二部に當る本書は、キエルクゴール自身が「明かに私がこれまで書いた最も眞實で最も完全なものだ」と言つた彼の代表作の一つである。「死に至る病」において死に至る病としての絶望を扱つた彼は、ここではこの病からの根本的な治療の途を示し、現代神學に對して決定的影響を與へた。

「幸福論」や「眠られぬ夜のために」の著者として多くの人々に親しみ深いヒルタイが、人間ゆゑの生きる苦悩と、キリストの教へにさきへられたほんたうの愛の在り方と、眞實の秘りゆたかな幸福を得る道とを断然風に述べたものであるが、暗迷と混亂の世相の中に、はつきりとした希望の光を投げかける貴重な書物である。

二十世紀最高の思想家アランは経験と知能のすべてを傾けて日常卑近な實例に即し、人間生活の目標たる幸福を獲得する方法を、萬人のために説いてゐる。難解をもつて知られた彼の多數の著作のうち、本書は一般讀者にとつて最も親しみ易いものであり、アランへの入門書であると同時に、彼の全思想の要約とも言へよう。

本書は齡六〇に達したアランが、己が「悟性の哲學」を力強く語つた智慧の書である。科學に即して嚴しい悟性の途を探りつつ、常に新しい世界への希望と冒險に導く九篇の對話が、老練の畫家と少壯の技術者を相手に西洋哲學の發祥地イオニアにも似たブルターニユの濱で、蕩搖たる海を眺めつつ展開される。

本書は「太陽の下にある何もによつても畏怖せしめられることを拒否する精神」の持主ラッセルが、社會主義、無政府主義、及びサンダカリズム等についてそれらの發生と内容とを無比の明快さをもつて説き、それらが赴くところを批判した後、あくまで科學的且つ論理的に彼の理想とする社會の構想「自由への道」を述べたものである。

ジョン・デューイをして「最高のイギリスの傳統の中に位置する一書」と絶讃せしめた本書は、二人の幼兒の父としてのラッセルが、目の當り見かつ経験したことをもととして、特に幼年期における教育を論じたもので、平和主義と自由主義とをとして科學主義とが全篇を流れてゐる一貫した思想である。決して教育者のみの書ではない。

堀秀彦譯 B・ラッセル 幸福論 青66	幸・不幸の要因について具體例を示しつつ論理的・心理的に解明した幸福への指標。世に多くの幸福論があるが、これほどアラクティカルで、平凡で、正確な幸福論はない。宗教を信じない著者は、自分自身を唯一の據點としてあくまで自己のみの幸福を論じてゐる。それは我々にとつて、自己が最初にして最後の問題だからである。
森下修一譯 婦人論 全二冊 青90—92	ペーベルの婦人論か、婦人論のペーベルかと言はれた婦人問題に關する古典的名著である。原始社會における婦人の地位から筆を起し、現代社會における結婚、家族、費淫等の諸問題を辛辣な筆致をもつて縱横に批判し、ついで國家と社會における婦人の地位を論じ、社會革命によつて初めて婦人の解放が實現すると結んでゐる。
村岡典嗣譯 近世哲學史 全三冊 青90—92	ドイツ新カント派の巨頭ヴィンデルバントの代表的哲學史。「一般文化並びに諸科學との聯關における」といふ副題の示すやうな廣い視野で、存在、價值等常に繰り返される哲學上の諸問題を捉へ、それらの觀點から近世各時代の哲學者の學說の發展を敘述したもので各章に懇切な譯註を附して理解の便を計つた。
波多野精一 西洋哲學史要 青52	わが哲學界において西田博士と並び稱される著者二四歳の處女作「西洋思想を明晰し同化しわがものとなして敘述」された日本人の手になる最初の體系西洋哲學史である。「波多野宗教哲學」なる體系を創始した著者の研究態度は歴史の重視と尊敬にあり、その全哲學研究への出發點をなすものが他ならぬ本書である。
朝永三十郎 近世に「我」の自覺史 青57	複雑多岐を極める近代精神の種々相を、歴史的內在的批判によつて評價しつつ、「我」の自覺的發展段階を展開し、更に「考へ方」によつて近代精神を類型學的に展示した本書は、今日すべてに哲學書の古典として不朽の價值を占めてゐるが、その深い學藝的基礎と廣い歴史的背景と、行間に溢るる哲人的香氣は讀者をひきつけずにはおかない。
西田幾多郎 現代に於ける理想主義の哲學 青8	「善の研究」發表以來、著者の努力は専ら西歐哲學の廣汎な攝取と紹介とに向けられた。近代理想主義哲學の主流を概観すると共に、新カント派・現象學派等の哲學を體系的に紹介し、現代哲學の動向を初めて明らかにした本書は、まさに歴史的名著であり、「自覺に於ける直觀と反省」に到る西田哲學への手引きでもある。

高山 岩男

西田 哲學

青49

「場所」の概念を定立して自己の哲學に獨自の論理を附與すると共に、故左右田喜一郎博士をして初めて「西田哲學」なる名稱を冠せしめるに至つた「働くものから見るものへの」の後編以後、「一般者の自覺的體系」「無の自覺的限定」を通じて「哲學の根本問題」正續に至る、西田幾多郎博士の思想的發展の跡を體系的に纏めたもの。

三木 清

西田先生との對話

青18

わが哲學史上に不朽の足跡を残した二つの魂が相會し相觸れる對話の妙味。日本文化の特質を語り、ヒューマニズムの現代的意義を論じ、人生及び宗教へと、哲學の深奥にまで語り進む相許した師弟の對話は、ゲーテとエッセルマンとのそれにも増して、讀むものに感銘を與へずには措かない。難々と稱される西田哲學好個の入門書。

阿部 次郎

倫理學の根本問題

青1

著者が哲學上の師と仰ぐリップスの思想と情熱と感激とを、絶対に私見を混へず再現したのが本書である。ここに論ぜられるものは、人と處と時とによつて相違する道德思想ではなく、道德そのものであり、絶対善への憧憬と不斷の歩みである。「三太郎」の苦惱と彷徨はここにその途を見出し理想に向つて開花する。

柳田 謙十郎

辯證法十講

青132

これは單に辯證法に關する知識を與へるために書かれた書物ではなく、どこまでも辯證法といふものを歴史的現實そのものの論理として、現實のつかみ方とらへ方を正し、これをその根柢から變革するといふ方法的立場を中心として述べられたものである。本書をひと通り讀むことによつて人は、辯證法の本質的な意義をつかむであらう。

社會・歴史・自然

小泉 信三

マルクス死後五十年

(マルクス主義の理論的批判)

☆☆☆

青20

大正末期より昭和初年にかけて著者の論鋒はひたすらマルクス主義批判に向けられた。マルクスの死後五十年に當る昭和八年に書かれたマルクス批判論文を始め、マルクス主義研究の成果を収めた本書は、唯物史観、価値、剰餘價值理論、資本蓄積法則その他、マルクスの主要學說に對する著者の總決算とも見られるもの。

猪木 正道

共產主義の系譜

増訂版
☆☆☆

青67

「マルクス主義とは何か」より筆を起し古典的マルクス主義の展開過程を解明すると共に、フォイエルバッハからマルクスを再検討し、ラッサールとマルクスを比較し、更にレーニン、トロツキー、スターリンへと説き進む共產主義批判の筆は、今日ソヴェート聯邦を中心に世界的に活動しつつある「生きてゐる共產主義」の系譜を描く。

河合 榮治郎

自由主義の擁護

☆☆

青2

自由主義を標榜して立つた著者は、滿洲事變以後擴張する右翼思想に敢然として對決した。國家主義の復活と攻勢に對して正面より挑戰した「國家主義の批判」を始め、學園追放・發禁處分の原因となつた自由主義の本質に關する論文の他、法廷における争點に關して著者の所見をのべた「自由主義の辯明」等五篇を収める。

河合 榮治郎

教壇生活二十年

☆☆

青55

森戸事件を契機として日本の社會情勢はファシズムへの一途に驅り立てられた。自由思想のゆゑに「反動教授」と罵られながら、一歩だも退かなかつた著者は、再び襲ひ來つた國家主義の前には、つひに教壇を去らざるを得なかつた。著者の教壇生活はまさに東大經濟學部の生きた歴史であり、日本思想界の重要な側面史である。

清水 幾太郎

市民社會

☆

青137

「市民社會」「現實の再建」「自由主義の系譜」の三篇が収められてゐるが、いづれも戦争中に書かれたものである。ブルジョワ社會が思想史風に述べられ、人間は奥へられた現實に改造を施して望ましい現實を作り得ることが強調され、そして、自由主義の擁護と、それを乗り越えた地點に社會主義的なものが開かれることが力説される。

清水幾太郎

社會的人間論

青135

狭い論壇に閉ぢこまることなく、社會の廣場に出てものを書く社會學者として世評の高い著者が、種々の社會集團の類型のなかに人間の姿を捉へようとしたユニークな論述である。人間についての著者の考へ方が他のどの書物よりも本書のなかにおいて明らかに見られ、数多い著作中もつとも代表的なものと言へよう。

清水幾太郎

私の社會觀

青136

「私の社會觀」の他に「反社會的集團」「匿名の思想」「暗殺」「庶民」「暴力」「運命の岐路に立ちて」等代表的な論文九篇が收められてゐる本書は、幼少の時代から著者が世の中といふものをどう見て來たかといふ、一種の自傳的な告白であると同時に、様様の問題に直面してそれを處理する著者固有の反應様式の公開でもある。

モルガン
荒畑寒村譯

古代社會

全二冊
各々々々

青119—120

米國の著名な社會學者モルガンの「古代社會」はアメリカ土人の結婚關係、氏族組織に基く社會制度を研究し、野蠻・未開時代をへて文明時代にいたる人類の家族、政府、財産の觀念の發達を論證して、マルクスが四十年前に創唱した唯物論的歴史觀を獨自に再發見したといはれる。舊譯に徹底的改訂を加へて定本とした。

マックス・ウェーバー
阿部吉男・内藤完爾譯

社會學の基礎概念

青76

本書は二十世紀社會科學界の巨匠マックス・ウェーバーの名著「經濟と社會」第一部、第一章の全譯。ここには、彼の提唱する理解社會學の方法と對象とが、具體的に述べられてゐる。社會的行爲、社會關係、正當の秩序、開爭、團體、權力、支配等について彼の社會學體系の精髓が鮮やかに展開されて行く。

バーナード・ショー
藤本良・池澤譯

資本主義社會主義
全體主義共產主義

全三冊
上・中・下々々

青115—117

二十世紀の良心として戯曲や小説の創作を通して現代英文學の歩みに偉大な足跡をのこした文豪ショーは、またフエビアン協會の重要なメンバーとして社會主義の建設に大きな役割を果たしたが、その平和主義的な考へ方につらぬかれた本書は、きほめて平易に説かれた社會主義社會への啓蒙的手引として健全な理解を與へてくれる。

ギンズ
安士正夫譯

ヨーロッパ文明史

全二冊
各々々々

青81—82

モンテスキュー、ヴォルテールに始まるフランス史學界は、革命後の國家的大變動、ロマン派の歴史的好奇心、資料の公開、實證精神の發達等あらゆる好條件に恵まれ、十九世紀にいたつて大歴史家を輩出した。その一人ギンズの手になる本書はローマ帝國崩壊から十八世紀までの歐洲文明發達の鳥瞰であり、史學方法論でもある。

クロボトキン 藤本良造譯 一革命家の思ひ出 *** 青123	トロッキ 山西英一譯 ロシア革命史(一) （帝政の 顛落上） *** 青104	G・E・スミス 西村朝日太郎譯 文明の起源 *** 青79	イ・リ 八住利雄譯 人間の歴史 （先史篇） *** 青86	イ・リ 村川隆譯 人間の歴史 （古代篇） *** 青95	大類 仲 綜合西洋史 （全二册） 各々*** 青14—15
クロボトキンほどに社會のあらゆる層の経験をしこれを知つてゐる人物は稀であるが、その變化と波瀾に富んだ生涯を淡々と語つたこの自叙傳は、ゲーテの「詩と眞實」とオーガスチンの「懺悔」を一つにしたやうな内容を含んで、興味のあるところを知らない。讀者はこの一卷に牧歌と悲劇とロマンスのあらゆる要素を見出すであらう。	「事件は事件自體の法則にしたがはねばならぬ」といふ信念に立つたトロッキが、自ら參加したロシア革命の歴史的展開の法則を發見しようとして書いたのがこの革命史である。ロシア社會の發展とその内的諸力の輪郭から筆を起しつつ、革命といふ大事件の現實的過程が、完全に自然な必然性をもつて讀者の前に展開されてくる。	世界的な解剖學者にしてマンチエスタフ學派の巨頭として知られるスミスの快心の作である本書は、雄壯にして瀟灑的な内容と、雄渾にして流麗なる筆致によつて人類文明の起源を説いたものとして全世界の讀者人を魅了した名著であるが、著者と親しい關係にある篤學の民族學者たる譯者の流暢な譯文は何人にも親しまれるであらう。	無味乾燥になり易い人類進化の跡づけを、立派な科學的方法によつてわかり易く書いた本書は、氷河時代に入類の先祖がどのやうな努力をもつて生き抜いたか、そして、兇暴な自然との闘ひの後にどのやうにして「人間」になり、道具や言葉がどのやうにしてつくられたか、といったことがきはめて藝術的な表現で述べられてゐる。	今世紀の生んだ天才史家イリンの手になる本書は、古代文明生誕の地エジプトに始まり華やかなギリシャ文明の最盛期をへてその終焉の都ローマにいたる四千年の長き旅路を、豊かな熱情と人間性をもつて描いた新しい人間の讃歌である。若き世代に捧げられた希望と誠實の書として數百萬讀者を魅了した文明史の香り高い名篇である。	史學界の權威大類博士がその公平な歴史觀と優れた方法をもつて西洋三千年の歴史を總括的に考察し記述した本書の特色は、政治・經濟・文化の各分野の特殊史を時代思潮の中に綜合して、個々の歴史事象を洩れなく敘述することにより、併せて歴史理解を汎からしめる点である。詳細な索引と圖版は讀者に一層の便を與へる。

鳥山喜一 支那史 黃河の水 青13	森 鉄三 おらんだ正月 ——日本の科 學者たち—— 青69	服部之總 黒船前後 青103	福澤諭吉 福翁百話 青128	大内兵衛解題 昆野和七校訂 福澤諭吉 福翁自傳 復元版 青68	スウェーデン・ヘーデン 岩村 忍輝 中央亞細亞探検記 青97
本書は古い傳説時代から最近の中華人民共和國の成立にいたるまでの支那の歴史の動きを、民族史的・文化史的の観点に重きをおいて敘述した簡略な通史である。特に國際理解は歴史を通じて少年層から始めるべきだといふ著者の信念から、その記述が極めて平易な表現をしたのも一つの特色で、地圖、索引を附した懇切な書である。	江戸時代の科學者を中心に地理學者・兵學者・土木家・探検家等五十餘人の事蹟を、少年少女向きに平易に、しかも興味深く記述したもの。ここに登場する人物は、志す方面こそ違へ、何れもよき日本人を、よき社會を造るべく、眞剣に努力した尊敬すべき人々であり、その言行は次代を背負ふ若き讀者に多くの夢を興へずにはおかない。	これはまことにユニークな歴史隨筆集である。現代日本の最も進歩的な歴史家として、近代史とくに明治維新史の研究につねに卓見をばく著者が、すぐれた史料の整理と、奇抜なまでに面白い着想と、歴史家には珍らしい流暢な筆のはこびをもつて淡々と綴つたこれらの文章は、何人にも歴史への深い關心を抱かしめずにはおかない。	交るところすこぶる廣かつた福澤諭吉が客に接して語つたことを拾て去るのを惜んて綴つた本書には、宇宙人生觀あり、政治經濟論から學問教育論、婦人解放論、一身一家の處世訓など、凡ゆる問題について福澤が平生感ずるところを率直に述べたもので、思想の圓熟した福澤が縱橫無盡に論じ去り論じ來るところ獨自の價值を持つてゐる。	思想的にも事業的にも明治日本の最大の先覺者であつた福澤諭吉が、生ひ立ちから老餘の半生までを語つたこの自傳は、古今の自傳傳文學中白眉の書であるのみならず、出版以來五十餘年のあひだ、愛國心の源泉として萬人に讀まれ、また、本文庫版は最近発見された自筆の草稿にもとづいて復元した決定版ともいふべきものである。	かつてヘーデンのごとく永きにわたり、且廣範圍に及ぶ中央アジア研究を行つた者はない。ヘーデンこそその生涯を中央アジアと共にした人といへようが、本書は彼の中央アジア探検の記録であるのみならず、探検家としてのヘーデン自身を最もよく傳へるものとして世界探検史上貴重な文獻として古典的價值を認められてゐる。

厨川白村

近代文學十講

☆☆☆☆

青47

福原麟太郎

英文學六講

☆☆

青129

大和資雄

英文學史

☆☆☆☆

青23

三井光彌

ドイツ文學十二講

全二冊

☆☆☆☆

青53—54

米川正夫

ロシア文學史

☆☆

青21

藤村作

國文學史總説

☆☆

青3

十九世紀後半から二十世紀初頭にわたる五、六十年間の歐洲文藝思潮を鳥瞰的に、平易に多くの實例を引用して日本文壇と結び付けて講じたもの。著者なエッセイストでもあつた著者は本書を單に懇切丁寧な文學案内書たるに止まらず、それ自體一つの香高い文學作品にまで高めてゐる。詳細な索引を附してゐる。

英文學の教習が面白くなれば英文學そのもの面白くなるといふ信念に立つ著者が、英文學の理解を通して文化を高め、生活を豊かにしようとして書いた本書は、從來ありきたりの英文學の紹介書の域を脱した新しい英學の書である。逆境に處して動じない英國人の生き方から著者は戦後の若い世代に將來への希望を與へようとする。

ペイオウルフから現代までの英文學史をわかりやすく周到に説いて、さらにアメリカ文學史の概要にも及び、假名書きによる索引を添へてある。歴史の流れとしてはとらへにくい一千年來の英國の文學の要點を巧みにとらへ、學習參考としても、又讀ものとしても好適な伴侶としてひろく江湖の讀者に推薦し得るものである。

廣汎なドイツ文學の中から、日本の讀者のために最も適當と思はれる十二の講題を選んで、堅苦しいものと思はれがちなドイツの作家と作品に眞に親しみと興味を抱かせるやうに書かれたものであるが、著者は、數世紀にわたつてドイツ文學を貫いてゐる筋金を系統的に辿りながら、ドイツ民族の特性とその運命をするどく見抜いてゐる。

ロシア文學の萌芽期から現代ソヴェート文學にいたる歴史、その特質、その意義と價值等を、斯界の第一人者たる著者が多くの文獻を基とし、「人生の爲の藝術」の立場から公平な批判を加へつつ、一貫したシステムと様式によつて敘述した。巻末に詳細な索引を附して讀者の便を計つたロシア文學の良き入門書といへよう。

藤村作は文學博士・東大名譽教授で、本書は日本文學の史的展開を考察する基礎研究として、中正簡明に、時代の思潮、作家の傳記、作品の解題を述べ、適切な引例を施した最も權威と定評を持つ日本文學史である。巻末に國文學年表と詳細な索引を附し、教科書として最適のものでも多數學校に採用されてゐる。

柳田國男
桃太郎の誕生
青164

わが國昔話の科學的研究における誕生の書。民俗學の權威者たる著者は、「桃太郎の誕生」「海神少童」「田螺の長者」「繪妻女房」等興味ある説話を説いて、わが民族の心の奥に古くから秘められた信仰の世界に昔話發生の據り處を求め、二千年の成長變化を通して、わが民族の持つ傳統と信仰の力を證してゐる。

柳田國男
一目小僧その他
青118

傳説を手がかりとして、それを生み出した基のもの、すなはち傳説を支へてゐる日本人の信仰や習俗を明らかにしようとする著者が、「一目小僧」「橋姫」「ダラダラ坊の足跡」等の傳説をめぐつて、傳説傳播の過程およびその運搬者の問題、さらに傳説を解釋する場合に注意すべきことなどを懇切に説きあかした名著である。

柳田國男
日本の昔話
青71

昭和四年に刊行されてから、いく度びとなく版を重ねてきたこの書物は、日本全國の町や村に古くから傳はつてきた昔話のうちから、特に若い人たちに向くものを選び出してつくられたものであるが、日本の民間に古くから傳はつてきた文化を深く理解して、日本をほんたうに知らうとする人々への手近な入門書と言へよう。

柳田國男
日本の傳説
青78

次第に忘れられてゆく日本の傳説を惜しんだ著者が、讀書のすきな若い人々を目あてに「昔話」の姉妹篇として書いたのがこの書物である。このやうに單純で色彩の鮮かな傳説が、どのやうにしてこの國土にめばへ、そして成長してきたか、さういふ學問上の好奇心を植ゑつけようとする著者のこまやかな愛情が隔々にまてゆきとどいてゐる。

柳田國男
國語の將來

國語教育の目的は「よき選舉民」をつくることであり、國民の一人一人が日てなりたてなれて、自分の言はうとすることが自由に言へて、しかも像期した効果を相手に與へることが出来る人を作りあげることである、といふのが著者の抱負であるが、こゝには民俗學の豊かな資料とその方法により「活きたことば」の教育が主張されてゐる。

金田一京助
國語の變遷
青127

NHKのマイクを通じて全國に放送された本書は、アイヌ語學の世界的權威である著者がその言語學國語學における深い學問の基礎に立つて國語の移り變りものとをきはめて平易に敘述したもので、言語學的なひろい視野において國語學上の具體的な課題を解明し要約した代表的著述として國語に關する一般的教育のための必讀の書である。

野尻抱影
星と傳説

星に關する名著を數多く世に送つてつとに世評の高い著者が、星と傳説について書いた三十篇の隨筆を収めた本書は、古今東西の星界の神秘と人界との交渉を流麗なスタイルをもつて文學的に紹介したもので、星の見方にも争へない國民性が現れてゐることが明らかにされ、いはば民俗天文学とも呼ぶべき獨自の意義を持つてゐる。

J.W.ドレイパー
平田寛譯
宗教と科學の闘争史 全二冊
各々々

青98-99

古代から近代にいたる宗教と科學との深刻な闘争を、科學者らしい公平な筆致で詳述した名著。宗教的教義が科學的發見により無漸に敗退する様や、宗教的權威が科學者を弾壓する模様が十二の主題について生き生きと對明な名筆で實證されてゐる。それは知性とドグマとの戦ひであり、讀者に無限の示唆を與へる。

フロイド
安田徳太郎譯
精神分析入門 全二冊
各々々

青73-74

難解にして廣汎なフロイド學説を理解することはけつして容易なことではないが、フロイドの眞の精神と姿とを最も手近に知り得るものとして、本書の右に出るものはない。若くからフロイドの學説と方法を研究し、自らもまた醫師として深く共鳴した譯者が、この圖の讀者に正しい理解を與へようとの熱情をこめて譯出したものである。

アレキシス・カレル
櫻澤如一譯
人間 全二冊
各々々

青61

人間に關する現代の科學の知識一切をまとめて、觀察と實驗が發見したものの一切を最も手短かにあらゆる階級と境遇の人間のために語つた本書は、機械化された現代文明に對するするどい批判であり、近代社會の科學的迷信から人間を解放しようとする愛の書でもある。これは人間の生命の複雑な眞實相の略圖と言へよう。

W.L.ローレンス
崎川範行譯
0(ゼロ)の曉

アメリカにおける原子爆弾計畫に参加を許されたただ一人のジャーナリストである著者が、人類史上最大の出來事である原子力の解放を、自らの體驗を通じて記録し描寫した偉大なるドキュメントである。原子爆弾その物を目撃し、長崎爆撃作戦に同乘してその觀察記録をつた著者は、原子力の意義を世界の人々に警告してゐる。

藝 術

井上 政次

大 和 古 寺

青 56

美學を専攻する著者が、歴史の都奈良の古寺を観てまはつた印象記であるが、法隆寺、薬師寺、東大寺、唐招提寺、法華尼寺といった風に古いものから時代の順に觀られてゐる上に、記述も漫然たる印象記ではなくきはめて實證的な態度でつらぬかれてゐるので、さながらに日本古代美術史の流れを觀る感を與へてゐる。

ポール・グセル
古川 達雄 譯

ロ ダ ン の 言 葉

青 111

彫刻界の偉大な革命者と謳はれるロダンは、腐敗し墮落した彫刻藝術を、眞實の傳統へと復歸させ、生命の藝術として再生させたが、その秘められた廣い内面の世界と深い思索の生活から溢れ出るこれらロダンの言々句々は、天啓のやうに素晴らしい魅惑にみちてゐる。それは美しい藝術の讃歌であり、美への敬虔な歸依の告白である。

マンダレーナ・バッハ
服部 龍太郎 譯

夫セバスチアン・バッハの回想

赤 123

音楽の父と謳はれるヨハン・セバスチアン・バッハの人となりについて、その後半生の三十年をともにした夫人が記したもので、古來女性の執筆になる数少ない名著中でも、特に情愛のこまやかな作としてつとに定評ある書である。一九三〇年のドイツ版を底本とし、別にバッハの全作品目録を巻末に加へて讀者の便をはかつてゐる。

服部 龍太郎 編

モーツァルトの生涯

青 17

ロマン・ローランが萬人必讀の書と評したモーツァルトの書翰集から、最も權威的なシエダルマイヤー編纂の物に基いて百五十六通を選び、それを中心として此の偉大な音楽家の生涯を述べた。又巻末には現今彼の二大文獻となつてゐるケッヘルとウイゼワ、サン・フォアの權威的な作品總目録を對照的に加へた。

シントラア
柿沼 太郎 譯

ベートーヴェンの生涯

青 9

著者アントン・シントラアはベートーヴェンの側近に十年もゐて秘書役を兼ね、又ベートーヴェンの残した總ての文書を保存し整理したベートーヴェン研究の權威者である。この書は巨匠の死後十三年目の一八四〇年に發表され、今もなほベートーヴェン傳の典據として世界的に名著に擧げられてゐる。本書は初版本からの邦譯である。

チャイコフスキー 堀内 明譯 一音楽家の想ひ出 青 6	諸井 三郎 音楽論ノート 青139	三宅周太郎 文樂の研究 青121	三宅周太郎 文樂の研究 青122	エイゼンシュテイン 佐々木能理男譯編 映畫の辯證法 青100	津村秀夫 映畫と批評 第一部 歐洲篇 青10
チャイコフスキーの自傳的回憶記と音樂評論で、前者は彼が四八歳の時ドイツ各地に指揮者として巡遊したをりの事を中心にブラームス、グリーグ等との交遊を、後者はモーツアルトからリムスキー・コルサコフ、グリシカまで及び、隨筆風なバイロイト訪問記もある。チャイコフスキー小傳と人名解説を附して便を計つた。	現代日本を代表する作曲家の一人であり、文部省の視學官として學校音樂教育の建て直しに活躍する著者が、音樂の鑑賞と理解を助ける目的で書いた本書は、先づ音樂についてのきほめて基本的な問題を取扱い、さらに近代音樂及び日本現代音樂についての重要な問題を主として作曲家を中心として取扱つてゐる。	日本の庶民藝術として文樂の人形芝居はどきどきしい傳統をつらぬいてきたものはないが、これは文樂を語るに當代隨一の人と言はれる著者が、からだを張つて研究し、この古典藝術の構造とそこに生きる人々とに直接ぶつかつて書きたいはば著者の青春の情熱の記念碑ともいふべき名著で、文樂鑑賞者の必讀の書である。	義太夫の名人攝津大掾は七〇歳にしてはじめて「九段目」がわかつたと述懐したが、文樂の藝はそのやうな人間の力によつてこそ傳承されてきたのである。著者は文樂の鑑賞においてもそのきびしさを強調してやまないが、本書はただに文樂鑑賞の手引書としてだけでなく、讀者をして藝の道の眞の精神にふれさせる得がたい書物である。	映畫理論をつねに實踐とむすびつけ、實踐によつて生長したエイゼンシュテインの數多くの映畫論文のなから、重要なもののみを採りあげて編輯したのが本書である。いづれも卓抜な思索の記念碑であり、思索と實踐との合作であるが、藝術家の思索にふさはしい輝くやうな暗示がいたるところにちりばめられてゐる。	映畫批評界きつての大手と題はれる著者の批評の中から主として歐洲の映畫に關するもののみを選んだのがこの第一部であるが、ジュリアン・デュヴィヴィエ、ルネ・クレールをはじめ、西歐のキメラマンの展望、さらに具體的な作品では「外人部隊」「望郷」「乙女の湖」「美しき青春」等評判になつたものはあましまし取上げられてゐる。

津村 秀夫 映 畫 と 批 評 第二部 アメリカ篇 青11	第一部につづくこの篇では、主としてアメリカ映畫を中心として批評が展開されるが、「歐洲映畫と米國映畫」では兩者の比較が具體的に示され、「映畫批評家志願者への助言」では、著者の経験と知識があたたかい愛情のうちに活かされてゐる。作品は「驛馬車」「戦場よさらば」以下三十篇にわたつてゐる。
津村 秀夫 映 畫 と 批 評 第三部 日本篇 青12	この篇には日本映畫に関する文章があつめられてゐるが、「溝口健二論」「田坂具隆論」「山中貞雄の死」「新しい監督群」等著者の監督論が展開されるほか、「人情紙風船」「冬の宿」「太陽の子」「裸の町」「人生劇場」「土」「殘菊物語」等藝術の香り高い名畫の印象が、氏の繊細な鑑賞眼を通して見事に再現されてゐる。

補遺

吉川 英治

親鸞

全四冊

一・二・三・四

緑367—370

幼少にして人生の辛酸をなめ、死ぬまで愚痴鈍根を断ちきれないことを告白する作者が、憂苦と求道の生涯を送った親鸞に憧憬を抱きつつ、戦亂に家を焼かれ衣食に窮し塗炭の苦みをなめる末法の時代を背景に偶像化された傳統から解放された親鸞の生涯を描くこの作品は、同時に作者の現代への批判精神につらぬかれてゐる。

夏目 鏡子

漱石の思ひ出

全三冊

前々々

緑373—374

見合ひから死別まで漱石と生活をともにした鏡子夫人が、故人への限りなき愛情をこめてその思ひ出を語つたこの名著は、夫人でなければのぞき観ることの出来なかつた人間漱石の秘密を明るみにさらしつゝ、漱石の赤裸々な姿を讀者の面前に浮き彫りにするが、漱石研究に缺くことの出来ない文獻として古典的價値を持つてゐる。

水上 瀧太郎

大

阪

々々々

緑378

大正十一年の七月から十二月まで大阪毎日新聞に連載された小説で、實際的で無駄のない實利的な生活を忘れない商業都市大阪を背景に、大阪人の典型的な姿が描かれるが、自らに峻厳で他人には寛容、潔癖で人道主義的正義觀の強い主人公の生活態度には、作者自身の赤裸々な影像が刻みこまれ、瀧太郎の文學の代表をなす作品である。

徳田 秋聲

爛 (ただれ)

々々

緑377

「あらくれ」「足跡」とともに三部作の一をなす「爛」は、市井に生きる人間愛慾の世界をえがいて技神に入り、簡潔細緻をきはめた作品として、曇りなき觀照と純粹なる客觀描寫を生命とする秋聲文學の最高峰たるのみならず、自然主義文學の完成された極地を示すものとして、近代日本文學史に記念碑的位置を占めてゐる。

宮本 百合子

風

知

草

々々

緑376

戦争によつて強ひられてゐた五年間の沈黙のうちに書かれたこの小説は、名作「播州平野」や「二つの庭」と同じく、作者がもつとも書きたくて書くことの出来ないでゐた主題が、溢れる川のやうに溢れて書かれたもので、戦争で苦しめられたすべての日本人、良人や愛人を奪はれた日本の多くの妻や婦人たちの心情への共感にみちてゐる。

樋口一葉
岡田八千代校註

たけくらべ 他二篇

ここに收めた「たけくらべ」「われから」「わかれ道」の三篇は、いづれも一葉の晩年の作であるが、とりわけ「たけくらべ」は一葉の全作品を通じて最も勝れたものである。吉原の近くに住む子供たちの有様が、その近くで一文菓子屋をしてゐた一葉の目を通して如實に語られ、その筆は一分のすきも無い精緻をきはめてゐる。

泉鏡花

高野聖 他一篇

「日本には花の名所が多い。鏡花の文學は情緒の名所である」とは川端康成の言葉であるが、まことに泉鏡花の藝術は情緒の花園であり、その生涯は美の祭典であつた。「高野聖」はそのやうな鏡花文學の典型をなす代表作で、自己の創造した幻想美の世界に、思ふがままに人間を生かす鏡花の面目はこの一篇に盡きてゐる。

宮本百合子

幸福について

緑379

宮本百合子の評論は二百篇を越えるが、この集には社會と文化の問題をひろく扱つたもののなかから、婦人に關する問題を主にした二十八篇を收めたが、幸福な文化的な生活をこの荒れはてた破綻した社會の中にどうして建設して行くか、戦争をひきおこし人民を不幸の座につき落した権力は何を企てゐるかが鋭く洞察されてゐる。

大佛次郎

旅路 全二册 各々々

緑381—382

晩春の佐渡の海から早春の紀伊の田舎までのほぼ一年間の四季の推移を心こまやかに觀察し、自然と人間の親和の相を描いて讀む者に鮮明な印象を刻んでくれるこの小説は、真に健全なヒューマニズムをもつて人間を温く且つすがすがしく高め、未知の可能性を信じさせ、生きゆく希望をかきたてる意味で、清純なる國民文學といへよう。

大野草平

幻燈部屋 上巻

全篇六部からなる「幻燈部屋」は、九州若松の小城主の家を誇る久賀家といふ没落士族の封建的な家庭に育つた友太郎、國藏、千吉三人の兄弟が、それぞれに主軸となつて描く戀愛小説であるが、單なるかいたての戀愛小説ではなく、人間の表面に描く戀愛の文様の根元まで、美醜を超えてつきとめ、愛慾を赤裸々に描き出してゐる。

大野草平

花扇 幻燈部屋下巻

「幻燈部屋」の第四部に該當する作品であるが、作者が生れたときからとりつかれてゐた夢への遠い郷愁にうながされて書きつづけられてゐた「幻燈部屋」が戦争のために中絶してゐたのを、昭和二年はじめて五年の空閒を埋めべく書かれたのが「花扇」であり、つづいて「水祭」「夜鏡」によつて作者の夢は結ばれたのである。

ケッセル
櫻井成夫譯

顔

これは心情と官能との相剋に由來する悲劇である。良人を深く愛して、何一つ不足のない家庭の幸福にひたりきつてゐるかに見える女主人公セヴリスが、性の不満から賣春宿に出入りする物語であるが、作者ケッセルの真意は、性の本能に假借なき解剖を試みることによつて、本能のうちにひそむ清純さを探ねることである。

マイナーク・エルスター
番匠谷英一譯

小説 アルト・ハイデルベルク

赤373

ハイデルベルクはドイツで一審美しい町であり、そこにはドイツ最古の大學がある。この物語の主人公も慣習に従つてその由緒ある大學に一年間の學生生活をすごすべく、ハイデルベルクをおとづれるが、やがてケータイといふ可憐な娘を知つて戀をする。この小説は有名な演劇「アルトハイデルベルク」の原作である。

レール・モントフ
一條正美譯

現代の英雄

秋山英夫譯
シルティ
幸

福論

青141

ロシアにおける最初の心理小説としてトルストイやドストエフスキイの深刻な心理描寫への道をひらいた「現代の英雄」はレール・モントフの專制政治に對する反逆と自由への渴望の反映であり、ツァーリズムに苦しむ人民の氣分が明らかに反映してゐる。レール・モントフのロマンタイシズムは逃避ではなく革命的な性格につらぬかれてゐる。スイスの聖者と首はれるカール・ヒルティの倫理的宗教思想家としての主著の第一部であり、彼の信念の書であるが、その信念の根幹になつてゐるキリスト教は決して單に宗教思想といつた觀念的なものではなく、「幸福」とはこゝろ安らかに喜びをもつて働くことだといふ本書の主張は、ヒルティの人格から流れ出た人生の智慧である。

角川新書

1 津田左右吉 必然・偶然・自由 100

自らの歴史観を系統的な理論の形で發表し、現在流行の唯物史觀と鋭く對決する本書は偉大な歴史家の歴史哲學がはつきり窺ひ得る。

2 坂西志保 アメリカの女性 100

現代アメリカ婦人生活の詳細をその發展の歴史的社會的過程と共に要領よく述べ優に數百頁の大冊に匹敵する。日本婦人には絶好の手引である。

3 寺田寅彦 風土と文學 100

詩人科學者寺田寅彦は生涯にわたつて風土と文學の交渉のありかたを論じた。本書は日本の風土・民族・文學の特殊性を明らかにしてゐる。

4 大塚幸男譯編 戀愛・結婚・女性 100

ひとびとは幾たびか心に、惑ひや悩みを抱くに違ひない。本書に登場する多くのモラリストやロマンティストたちは幾つかの解決の方法を語る。

5 山本光雄 哲學者の笑い 100

ギリシャ哲學者について昔から傳へられてきた面白い話や變つた話を、堅苦しい理窟や難しい批判はぬきにして語つた楽しい哲學夜話。

6 古谷綱武 暮しのなかの人生論 100

日常のくらしの内にひそむ美しさを解き明かして生きることの意味や幸福をしみじみと教へ、若き女性のために與へられた美と愛情との聖書。

7 加藤周一 文學とは何か 100

科學者文學者である著者が廣汎な知識と鋭い直觀明晰な知的操作の全てを駆使して、文學の本質を解明しようとした戦後文學評論中の野心的勞作。

8 家永三郎 近代精神とその限界 100

近代日本の誕生に苦悩の生涯を捧げた四人の先覺者を論究してその意義と眼界を明示する。若きデモクラットのはげしい抗議と闘争の跡。

9 戸板康二 歌舞伎の話 100

これはわれわれの文化財に當てられた新しいスポットライトである。世界に誇るべき藝術歌舞伎全般を通じてその眞髓を説く好個の歌舞伎入門書。

10 高橋里美 私の哲學と人生觀

100

東北大學哲人學長が自己の思想發展の道程を説き更に高橋哲學の立場から人生と人生觀の問題に深刻高遠な思索を展開してゐる。

11 山本健吉 現代俳句上下 各90

現代隨一の俳句評論家が現代俳句の代表三十八作家を鋭い知性と溫い理解の眼で解明し俳句を作る人も作らぬ人も楽しく俳句文藝の花園に遊びしむ。

12 藤原定萩 萩原朔太郎 100

詩人哲學者たる著者が最近の資料に基き近代浪漫詩人の人と作品を内部から深く把へ、萩原朔太郎研究に新しい一步を進めた問題の書である。

13 關根秀雄 モンテーニユを語る 90

人類の書「隨想錄」の著者モンテーニユの人・作品及び時代を詳述して、いかなる時代にゆるぎないモラルと知性の確立を説く萬人必讀の書。

14 龜井勝一郎 現代人の研究 100

混亂の中に異常假説を求めて日本人は何處へ行くか？日本のバックボーンたる著者が語る痛苦に満ちた三代の文明批評。讀賣文學賞受賞作品。

15 松浪信三郎 考える葦 (パスカルの生涯と思想) 100

敬虔比類ないジャンセニストにして冷厳な科學者即目的に眞理を追求する實存者の生涯を具體的に詳述しながら其の思想を原理的に把握する好著。

16 串田孫一 孤獨な思想家 100

思想と藝術、自然と人生の相についての執拗な探究、觀想と、ひたむきな自己解剖に一生を費した詩人・哲學者アミエルの生涯及び内面生活を説く。

17 加藤楸郎 芭蕉秀句上下 各100

俳句作家として人間探究に新風を樹立した楸郎氏は傳記と並行して秀句を作家の鋭い眼で鑑賞しつつ「芭蕉の生きてゐた時間」を本書に再現す。

19 加瀬俊一 世界と日本 (第二次大戦後の國際情勢) 90

第二次大戦中のスポークスマンであり現在外交評論家として知られる著者が認められた資料を駆使し、世界情勢の裏表と新日本の方向を説く。

20 牧田茂 生活の古典 100

史書記録には民衆の生活文化の歴史は描かれてゐない日本文化を形成した前代人の生活感情や生活事情の書かれざる歴史を探る民俗學入門。

21 伊藤至郎 科學への歩み 100

自然科學・社會科學を問はず、すべて科學するものにとつて必要な、その土量となる屈伸性をもつた誠實な新鮮なところを語る特異な科學入門。

22 淡野安太郎 フランスの哲學 90

デカルトに始まり、パスカル、ベルグソンを経てサルトル、マルセル等の二十世紀最新思想に關聯する教智の流れを一望に収め、明解平易に解説す。

24 宮城音彌 人間の心（心理學の初歩） 100

心理學は現代人に不可欠な教養となつた。本書は新界の第一人者が無意識の世界、人間の性慾・性格等の各面を追求し、更に世界心理學界の現況を紹介す。

25 藤原興一 これからの國語 100

國語生活の改善は、いつもだれにも考へられなければならないことである。國語生活の改善は人間の進歩と一つのことだからである。（序文より）

26 矢内原忠雄 キリスト敎入門 100

内村鑑三の精神を繼ぐ基督者・東大總長が平易に語るキリスト敎への道は、凡ゆる自信を喪失せる現代人にとつての精神的指標とならう。

27 戸板康二 新劇史の人々 100

逍遙・須磨子・小山内薫・左團次・友田恭助・丸山定夫と日本演劇革新に苦難の途を歩んだ新劇の人々を描く。豊富な資料を駆使し、多くの逸話を折込み、新劇五十年の人の時代はヴィヴィッドに浮彫りされた。

28 シュミット ニッポン再發見 100

外人の戦後日本見聞記や日本文化批判は数多いが、これは優れたスイスのジャーナリストの愛情を以て語られた「ニッポン日記」である。日本の風景、文物、人間の特殊性を、鋭く深く把握し、廣汎な見識と柔軟な感情に包みながら、その美と病根を見事に裁斷して見せてくれる。

29 J・サーバー 性の心理 100

ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン紙絶讃（著者は無意識の器用さと、ユーモアとよき趣味とをもつて性に關する現代のあらゆる心理學および社會學的議論を展開してゐる）

30 W・カラース他 共産主義の實際 100

イギリス放送協會 英國放送協會の秀抜な記者が實際の見聞と、詳細正確な調査に基づいて執筆した放送原稿に、更に鐵のカートン内の犠牲者の生々しい體驗告白を附す。ソヴェートの一切がこの一冊で解る。

31 桑田忠親 日本の茶道 100

西行、雪舟、宗祇、利休に貫通するものは一なりとした詩人芭蕉は、藝道精神を庶民生活の中に見究めてゐた。著者は生活から遊離した茶道を、萬人の樂しき藝術として取戻した。

32 秋元不死男 俳句入門 近刊

33 34 北川冬彦 現代詩Ⅱ 各100

現代詩の新領土開拓者として激しい詩魂と鋭敏な現實感覺を燃す著者の現代詩批判と鑑賞の書。Ⅰ巻所収は高村光太郎、金子光晴、中野重治等九氏（Ⅱ近刊）

36 堀秀彦 女性のための人生論 100

結婚・戀愛・教養等について語る、男性としての著者の希望は、家庭に、職場に、學校に、生活する女性の生きかたを示し、幸福を求めて彷徨するすべての女性に、生きゆく力と勇氣を與へる。

39 中野五郎 アメリカの暗黒 100

—米國を衝動した大事件—

全米を震駭した歴史的大事件の奇怪な真相を究明し、自由の國アメリカの盲點を衝く本書は「生けるアメリカ社會史」を物語る。

40 瀧井孝作 釣なま 100

夢にも早瀬の横がうつつに見えて来る。戀愛に打込んだやうに、寝てもさめても釣のことを思ふと著者は告白する。冥想の絲を垂れた醜陋味を詩人は語らずに居れぬ衝動で本書は生まれた。

41 伊藤整 文學と人間 百十一章 100

伊藤整氏はいつも自分と對話する術を心得た名手である。氏の小説や批評が面白いのはそのためだ。作品でお馴染の登場人物が、本書で文學戀愛幸福に關する自由な人生對話を試みてゐる。

42 高橋忠彌 西洋繪畫の話 100

西歐繪畫史上の思想や流派の意義を平明に解明し、ダヴィンチ、セザンヌ、ゴッホ、ピカソ等の巨匠の傳記をも兼ねる啓蒙的で楽しい美術入門。挿畫多數。

43 中河與一 戀愛論 近刊

44 植松正 裁判 近刊

45 龜井勝一郎 親鸞 近刊

46 武者小路實篤 幸福論 近刊

フィス(デューマ).....	68
フィヒタ.....	114
フィリップ.....	75
ブーシキン.....	89
ブラトン.....	113
フランス・アナトール).....	72
ブリーヴィエ.....	88
フルニエアラン).....	75
ブレヴォ・アベ).....	62
フロイド.....	126
フロベール.....	69
ブロムフィールド.....	106
ブロンチ.....	97

へ

ベイタア.....	98
ヘッセ(ヘルマン).....	84, 85
ヘディン(スウェーデン).....	123
ベール.....	118
ヘミングウェイ.....	105
ペール(デューマ).....	68

ホ

ボオ(エドガ・アラン).....	102
蒲松齡.....	109
ホーソン.....	102
ボードレー.....	66, 67
ホフマン.....	80

マ

マイアーフェルスター.....	132
マラルメ.....	67
マロ(エクトル).....	68
マン・トーマス).....	86

ミ

ミュッセ.....	65
ミューラー(マックス).....	82

メ

メーリケ.....	81
メーリメ.....	66

モ

モーツァルト.....	127
モパッサン.....	70
モブランルネ.....	78

モラン・ポール).....	77
モリエール.....	62
モリヤック.....	76, 77
モルガン.....	121
モンチーニュ.....	113

ヤ

ヤコブセン.....	107, 108
ヤハマン.....	114

ラ

ラーゲルレーフ.....	109
ラッセル(B.).....	117, 118
ラディゲ(レーモン).....	75
ラマルチーヌ.....	64
ラム姉弟.....	95
ラム(チャールズ).....	95
ラルボオ(ヴァルリ).....	78
ランボオ.....	67

リ

リルケ.....	85
----------	----

レ

レスコフ.....	94
レールモントフ.....	132

ロ

老舍.....	110
ロチ(ビエール).....	72
ローリングズ.....	106
ロレンス(ダヴィッド・H.).....	101
ローレンス(ウィリアム・L.).....	126
ロンゴス.....	107
ロンドン(ジャック).....	104

ワ

ワイルド.....	99
ワシレーフスカヤ.....	109

ジイド(アンドレ).....	73, 74
シェイクスピア.....	95
シエストフ.....	116
ジュームズ(ヘンリー).....	104
ジュリー夫人.....	96
シェンキーヴィッチ.....	109
シェーモノフ.....	94
ジャヴェル.....	72
シャミッソー.....	80
ジャム(フランシス).....	73
シャルドンス.....	77
シュエ(ウージェーヌ).....	68
シュトラウス.....	83
シュトルム.....	81, 82
シュニッツレル.....	83
ショ(パーナド).....	100, 121
ショーベンハウエル.....	114, 115
ショーロホフ.....	94
シラ.....	80
シントラア.....	127

ス

ズウデルマン.....	83
スタインベック.....	106
スタンダール.....	62, 63
ステイーヴンソン.....	97, 98
ストリンドベリ.....	108
ストレイチー.....	100
スピリ(ヨハンナ).....	82
スミス(グラフトン・E.).....	122

ソ

ゾラ(エミール).....	71
ソーロ.....	102

タ

ダヌンチオ.....	109
ダビ(ウージェーヌ).....	76

チ

チエーホフ.....	93
チャイコフスキー.....	128

ツ

ツヴァイク.....	87
ツルゲーネフ.....	89, 90

テ

ディケンズ.....	96, 97
デカルト.....	114
テニス.....	95
デュアメル.....	75
デューマ(フィス).....	68
デューマ(ペール).....	68

ト

トウエイン(マーク).....	103
ドストエフスキー.....	90, 91, 92
ドーデ.....	71, 72
ドライサー.....	104
トルストイ.....	92, 93
ドレイパー(ジョン・W.).....	126
トロツキー.....	122

ニ

ニータエ.....	115, 116
-----------	----------

ヌ

ヌエツト(ノエル).....	77
----------------	----

ネ

ネルヴァル.....	65
------------	----

ハ

バイコフ(エス).....	94
ハイネ.....	81
バイロン.....	95
パウム(ヴィッキイ).....	104
パスカル.....	114
ハックスリ(オルダス).....	101
バウハ(マダレーナ).....	127
バートン.....	98
バニョル(マルセル).....	77
バーネット.....	104
バルザック.....	63, 64
バルビュス(アンリ).....	74

ヒ

ビュルンソン.....	108
ヒルティ.....	117, 132

フ

ファブル(フェルディナン).....	69
--------------------	----

吉川英治	130
吉田勝江	103
吉田健一	98
吉田兼好	4
吉田紘二	47, 48
吉永清	72
淀野隆三	73
米川正夫	89~94, 124

れ

歴程同人	59
------	----

わ

若杉慧	42
若山牧水	59
鷺巢尙	96
渡邊一夫	65

<外 国>

ア

アヴィーロワ(リヂイヤ)	94
アーヴィング	102
アミエル	68
アラ	117
アルラン(マルセル)	78
アンダソン	105
アンデルセン	107

イ

イエーツ	100
イブセン	108
イリン	122

ウ

ヴィーヒェルト	88
ウィルソン(エドモンド)	105
ヴィルドラック	76
ヴィンデルバント	118
ヴェデキント	83
ウェーバー(マックス)	121
ウルフ(ヴァージニア)	101

エ

エイゼンシュテイン	128
-----------	-----

オ

オードウ	75
オルコット	103

カ

カイザーリング	82
ガーネット(ダヴィッド)	100
カフカ(フランツ)	87
カレル(アレキシス)	126
カロッサ(ハンス)	85, 86
カント	114

キ

キェルケゴール	117
ギゾ	121
ギッティング	100
キャザー(ウィラ)	105
ギヤスケル(エリザベス・C.)	96
キャロル(ルーイス)	98

ク

グセル(ポール)	127
グリム	81
グリーン(ジュリアン)	78
クロボトキン	122

ケ

ケステン(ヘルマン)	88
ケッセル	132
ゲ、テ、チ	79, 80
ケ、ラ、	82

コ

コクトー(ジャン)	76
ゴゴリ	89
ゴーチエ	65
コールドウエル	105, 106
ゴディノ	65
ゴリキイ	94
コレット	76
コンラッド	100

サ

サンド(ジョルジュ)	64, 65
------------	--------

シ

本	野	亨	一	87
桃	井	京	次	72
森		陽	外	6,83
森		鏡	三	123
森	下	修	一	118
守	本		薰	41
諾	屋	陽	一	99
	井	三	郎	128

八木	さ	わ	子		71
八住	利	雄		122	
安士	正	夫		121	
安田	徳	郎		126	
柳田	國	男		125	
柳田	謙	郎		119	
大山	和	資	雄	97, 124	
山内	内	義	雄(佛).....	67, 69	
山内	内	義	雄(英).....	95	
山口	口	子		61	
山本	口	臣		70, 71, 77	
山本	西	一		122	
山本	村	鳥		57	
山本	室	靜		107, 108	
山本	本	健	吉	 56	
山本	泰	次	郎	 112	
山本	本	政	喜	 96, 97, 104	
山本	本	光	雄	 113	
山本	本	有	三	 19	

由起しげ子…………… 43

與謝野品子	20
橫光利一	25
吉井勇	4

彌枝	久忠	32, 33
吉人	田澤	100, 104
存人	田澤	123
郎平	田澤	39
定作	田澤	56
遠吉	原	102, 124
信雄	麟太	93, 109
武	一	80, 81
	原村	124
	本森	121, 122
	木川	21
	谷	88
		127
		55

堀	辰	雄	31
堀	秀	彦	117, 118
堀	内	明	128
堀	口	學	63, 73~78
堀	大	男	41
本	陸	彰	95
本	郷		

正木	白	正鳥		117
宗田		沙		51
增尾	芭	蕉		109
松原	至	大子		4
松村	みね	明雄		104
丸山		夫		100
丸山	熊武			41
丸山				70
丸山				86

三	木	清		119
三	由	紀		42
三	幾	郎		101
三	宅	太		128
三	井	端		124
三	谷	三		62.75
水	原	子		60
水	上	郎		20, 130
水	本	二		60
宮	百	合		29, 130, 131
宮				

tr

辻 野 久 憲 77
辻 村 伊 助 49
辻 井 榮 40

て

手 塚 富 雄 79, 80, 85
寺 井 康 雄 103
暉 峻 康 隆 4

と

土 居 寛 之 68
東 郷 青 兒 76
德 田 秋 聲 130
德 永 直 29
富 田 彬 102
富 安 生 60
友 松 詒 113
朝 永 三 郎 118
豐 川 昇 子 114
豐 田 正 子 40, 41
鳥 山 喜 一 123

な

内 藤 莞 爾 121
中 井 勸 助 11
中 井 正 文 87
中 河 與 一 3, 25, 26
中 込 忠 三 79
中 澤 美 彦 90, 91
中 島 敦 教 36
中 島 健 藏 67
中 野 重 治 30, 58
中 村 草 田 男 61
中 村 眞 一 65
中 村 融 葉 90, 91, 92
中 村 白 光 夫 89, 92, 93
中 村 吉 郎 56
中 谷 宇 義 三 郎 49, 50
中 山 省 三 郎 39
中 山 井 秀 郎 90, 91, 92, 116
中 永 秀 雄 9, 10
長 井 隆 二 22
長 塚 善 郎 65, 72
長 興 子 16
夏 目 鏡 漱 石 130
夏 目 石 7, 8, 9

に

西 田 幾 多 郎 118
西 村 朝 日 太 郎 122
西 村 孝 次 97, 98
新 渡 戸 稻 造 45

ね

根 津 憲 三 74

の

野 上 豊 一 郎 83
野 上 鋼 生 子 20
野 田 宇 太 郎 56
野 田 祐 祐 彰 126
野 間 宏 42
野 間 七 生 子 40
野 能 勢 朝 次 4

は

芳 賀 檀 86
波 多 野 精 一 118
芭 蕉 4
原 朔 太 郎 52
橋 本 福 夫 98
服 部 龍 之 郎 123
服 部 龍 太 郎 127
花 田 清 美 輝 子 55
林 芙 美 子 39, 40
原 健 忠 84
原 亨 吉 62, 117
原 民 喜 佑 41
原 佑 三 116
原 口 統 三 50
香 匠 谷 英 一 83, 107, 132

ひ

日 夏 耿 之 介 53, 99
日 野 草 城 61
火 野 平 131
樋 口 葉 5, 131
平 井 榮 89
平 田 寛 126
廣 津 和 郎 20, 21, 70

ふ

深 尾 須 磨 子 78

今 野 出 海.....34, 74
昆 守 和 七.....123
權 操 一.....64, 68

さ

佐々木基一.....109
佐々木直次郎.....102
佐々木能理男.....128
佐々木藤謙三.....3
佐々木藤兄一.....82, 85
佐藤佐太郎.....60
佐藤通次郎.....79, 115
佐藤文正樹.....78
佐藤正利彰吉.....67
佐藤吉鶴.....97, 100, 103
西相良守峯.....79, 82, 84
崎川範行.....126
櫻井澤夫.....64, 69, 132
櫻田一佐.....126
實藤惠秀.....72
.....110

し

志賀直哉.....15, 16
清幾太郎.....120, 121
柳水子六.....38, 39
鹽田武作.....109
島木健作村.....34, 35
島崎藤村.....30
島田二月.....97
島村湖嘉人.....108
下村莊章.....40, 112
新西清.....78
.....89

す

菅原卓.....108
杉本捷夫.....70
杉木喬.....105
鈴木拙郎.....112
鈴木一郎.....110
鈴木重吉.....69, 74, 77
鈴木三吉.....11, 46, 68
鈴木幸夫.....101
鈴木力衛.....68
角邦雄.....106

せ

清野暢一郎.....101
關敬吾.....81
關泰祐.....79, 80, 82
關根秀雄.....113
關文治助.....113
芹澤光治良.....33

そ

祖川孝.....67, 71

た

田中克己.....81
田中英光.....41
田部重治.....46, 47, 95, 99, 102
田宮虎彦.....43
田山花袋.....50
田宰治.....35, 36
高神覺昇.....112
高橋邦太郎.....49
高橋健二.....76
高橋義孝.....82, 88
高橋演子.....86
高見順.....50, 51
高村光太郎.....35
高山岩男.....58
高井孝作.....119
瀧井陽之助.....24
瀧内英之助.....94
竹内數雄.....83
竹越和夫.....80
武田泰淳.....85
武田祐吉.....43
武田麟太郎.....3
武立麟造.....35
立原道隆.....59
辰野郎.....48
龍口直太郎.....100, 105
谷崎潤一郎.....11, 12

つ

津田穰.....114
津村信夫.....59
津村秀夫.....128, 129
土屋明文.....53
辻理.....87

小野	一	94
小場	浩三	81, 114, 116
小尾	三	114
尾崎	八葉	48, 49, 72, 75
尾崎	郎	5
魚返	雄平	34
大久保	雄	110
大久保	郎	42, 43
大久保	雄	63
大久保	郎	106
大久保	次郎	37, 38, 131
大久保	子	40
大久保	次和	58
大久保	郎	71
大久保	史	105
大久保	伸	98
大久保	太郎	122
大久保	代	73
大久保	子	5, 131
大久保	子	72
大久保	子	27, 28
大久保	夫	95
大久保	夫	52
大久保	夫	61
大久保	夫	71
大久保	夫	65
大久保	夫	22
大久保	夫	127
大久保	夫	85
大久保	夫	62
大久保	夫	27
大久保	夫	58, 67
大久保	夫	52
大久保	夫	54, 55
大久保	夫	96
大久保	夫	87, 107
大久保	夫	96
大久保	夫	81
大久保	夫	24, 25, 53
大久保	夫	120
大久保	夫	57
大久保	夫	66, 113, 116
大久保	夫	63
大久保	夫	57
大久保	夫	69

木下	常	太郎	101
木下	常	定	114
木下	常	修	52, 60
木下	常	三郎	70
木下	常	毅	109
木下	常	寛	18
木下	常	一	96, 99
木下	常	士	26, 27
木下	常	文	81
木下	常	彦	59
木下	常	秋	52
木下	常	松	106
木下	常	助	45, 125

久保	榮	30, 80
久保	万太郎	21, 61
久保	正雄	19
久保	平	58
久保	雄	108
久保	二	81, 83 ~ 86
久保	三	22, 23, 24
久保	男	117
久保	子	65
久保	子	99
久保	村	51, 124
久保	一	107
久保	一	110

兼好	法師	4
小泉	三	120
小泉	庵	51
小泉	也	63, 64, 66
小泉	彦	90
小泉	二	28
小泉	正	63, 64
小泉	雄	68
小泉	雄	54
小泉	郎	88
小泉	隆	46
小泉	文	50
小泉	件	5, 45

著 譯 者 名 索 引

〈日 本〉

あ

安	公	房	44
安	能	成	46
安	次	男	73
阿	郎	男	96
阿	一	男	121
阿	古	降	82
阿	賀	郎	46, 119
青	次	二	31, 32
秋	知	穗	78
秋	瑞	夫	67
秋	澄	夫	63, 66, 74, 76
秋	晴	夫	115, 132
山	英	兵	84
山	郎	衛	18
六	之	介	116
川	龍	男	17, 18
井	真	郎	121
井	武	村	
井	寒		
井	烟		

い

井	勇	75
井	次	127
井	滿	90, 93
井	靖	44
井	雄	117
井	鶴	4
井	二	32
井	介	36
伊	整	32
伊	雄	82
伊	花	6, 131
泉	道	120
猪	笏	53, 60
飯	秀	105
飯	一	54
生	郎	27, 83
池	正	114, 115
石	立	115
石	淳	36
石	三	37

石	川	啄	木	10, 57, 59
石	川	登	夫	68, 76
石	川	道	雄	80
石	川	鍊	湧	77, 117
石	坂	洋	次	86
石	田	波	郎	35
石	原	兵	郷	61
石	丸	靜	永	112
石	一	正	雄	86, 109
市	條	又	美	132
市	川	豐	彦	100
今	原	忠	太	73
岩	泉	民	義	4
岩	崎	平	雄	98
岩	田	豐	鳴	76
岩	野	泡	忍	10
岩	村			123

う

宇	佐	見	英	治	62, 64, 65
上	田			勤	101
上	田			敏	50, 57
上	鵬			進	94
上	田			間	48
内	村			三	111, 112
梅	崎			生	42
梅	原			隆	3

え

江	口	清	66, 75
江	野	大	79
江	馬	修	22
江	原	藏	4
順	戸	雄	77
永	原	夫	64
嶋			

お

小	山	内	薰	94
小	川	和	夫	100
小	川	未	明	18
小	倉	金	之	48



東京都千代田區富士見町二丁目七

角 川 書 店

頒價 10 圓

電話 九段(區) 0111番(代表)
振替口座 東京 195208

叢智と教養のいづみ

角川新書

B 36判 約200頁 各200圓

昏迷の現實に直面する現代人の精神の機となり、また生活の指針ともなるべき主題と素材を、斯界一流の大家、新鋭が平明に書下したものの。範圍は文學、藝術の全分野、哲學、自然科學、社會、歴史、さらには高尚なる趣味の世界等廣汎にわたり、一冊一冊が眞に萬人に愛される清新な叢書シリーズである。

高度の内容を平明に

角川全書

小B 6判 クロース装綴

本叢書は、主として新制大學教養學部課程に準據し、人文科學、自然科學の基礎的學科をはじめ、一般教養の資となる學術分野を網羅してゐる。執筆者は現職大學教授等の權威者を揃へ、それぞれ特に書下しを主體とする。哲學的にして専門書たるの性格を具備する本叢書の活用は、斷片的な學習のために密與すること多大であらう。

日本で初めての家庭圖書館

昭和文學全集

A 5判 約500頁 各160圓

昭和期三十年の波瀾と變動の歴史は、その精神文化に當てない複雑な機相を呈したが、昭和期の文學は、かかる時代色を反映して多彩鉤瀾の名作をまた花咲かせた。本全集は、混沌の中から新しい文化創造への祈りを認めて、昭和文學の全貌を展望し、永く後世に遺る心の糧たるべき名作を選んで、ここに時代の記念碑を打ち立てた。

三代に輝く美術殿堂

現代日本美術全集

B 4判 特製各1、200圓 上製各160圓

明治、大正、昭和の世代に發展した日本美術の展開を一望に集め、それぞれの時代の性格、製作意匠を浮彫させて、現代に至る美術の系譜を告げる本美術全集は、我が國繪畫の流れを辿りながら、個々の作品に附せられた詳細な解説と相俟つて、家庭に打立てられた美術館であり、現代日本美術全集の決定版である。

物語るカメラ・アイ

角川寫眞文庫

B 6判 函頁 各100圓

「讀む本」から「見る本」への移行は、今日最も顯著な傾向である。斯界の權威の指導のもとに、清新なカメラ・アイを駆使して、藝術、科學、社會、歴史等の各分野にわたつて、好個のテーマを簡明にまとめたこの寫眞文庫は、まことに、混沌と激變に多忙な現代人の要望に應へた、物語る寫眞集と云へよう。